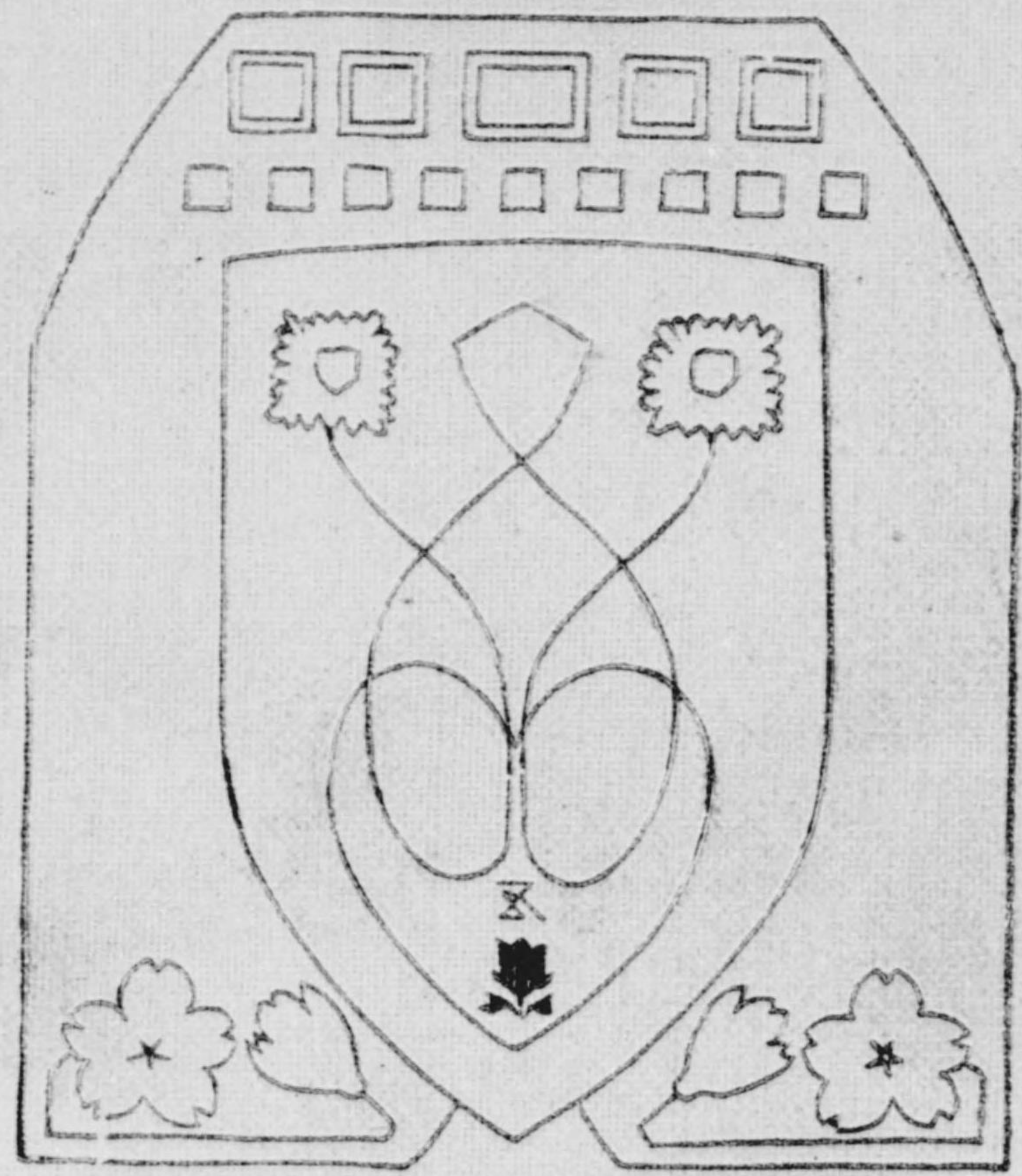


790
86

790
55



割除濟

307

兵學研究會編



戰史評論

第二卷



千城堂發行

戦史評論 第二卷目次

第十六 日露戦争に於ける戦場心理考察の一斑	一
一、鴨綠江の戦闘	一
二、蛤蟆塘戦闘の回顧	二〇
三、断片的實例の一	三三
四、断片的實例の二	四四
第十七 對露戦例	五五
第一 ツオルンドルフ附近の戦闘	五五
第二 クーネルズドルフ附近の戦闘	七三
第三 Austerlitz 會戦	八二
第四 ブルツスタ戦役	九三
第五 普領アイラウ戦役	一〇〇

第六	Heilsberg 附近の戦闘	二一〇
第七	Friedland 戦役	二一三
第八	一八一二年奈翁大敗戦役の概要	二一三
第十八	古今遭遇戦例	二五六
前	言	二五六
第一例	山崎役に於ける遭遇戦	二五八
第二例	Mollwitz 附近の不期遭遇戦	二六六
第三例	Auerstedt 附近不期遭遇戦	二七七
第四例	Marengo 附近二重遭遇戦	二八六
第五例	Custoza 附近遭遇戦	二九六
第六例	一八七〇年(普佛)戦役に於ける Vionville 附近遭遇戦	二九五
第七例	ベルトリク 附近に於ける獨軍歩兵聯隊の森林遭遇戦	二九〇
第八例	Tuszyna 附近獨、露師團の不期遭遇戦	二九六
第九例	Gawciten Kiszowen 附近獨、露軍團の不期遭遇戦	二九二

第十例	Rospuda 河畔に於ける獨 Morgen 兵團對露西比利第三軍團の不期遭遇戦	二六〇
第十一例	日清戦役缸瓦寨附近の遭遇戦	二七七
第十二例	奉天會戰彰驛站附近に於ける日本第九師團對露集成師團の遭遇戦	二九四

戦史評論 第二卷

第十六 日露戦争に於ける戦場心理考察の一斑

日露戦争に於ける實戦談に就ては世上に多く紹介せられてある、従つて青年將校諸賢は我が忠勇なる先輩の武勇談として又對露軍戦闘として、必ず研究せられたるを信ずる。然し此種の經驗談は何尙聞いても、何十遍讀んでも、決して徒爾でない。依つてグンピンネン戦の戦場心理考察は續いて若干の紹介をなす次第である。

日露戦役鴨綠江の戦闘に就ては、露軍を主とする戦闘一般に就て、本書第一卷第十日露戦役鴨綠江の戦闘に於ける露軍の状況に於て研究してある。要すれば之に就て一應記憶を喚起して貰ひ度い。地圖もそれに附されてある。

一 鴨綠江の戦闘

(第十二師團 H 小隊長手記)

イ 鴨綠江岸に達する際の状況

將兵の意氣と露兵との初對面 當時國民の敵愾心は絶頂に達し、將兵の意氣も亦頗る旺盛であり、是非とも初陣の勝利を得ねばならぬと覺悟して居つた。當時露兵の名は天下に響き渡り、就中コサツク兵は頗る勇敢であると考へられて居つた。此露兵に初對面をしたのは四月十五日鴨綠江左岸の前哨に出た時であつた。此時露軍の前哨は九里島や於赤島の砂洲の上に暴露して歩哨を配布し大きな雜囊を肩に掛けた大の男が、呑氣相に歩哨交代などをやつて居るのや、散兵壕を掘つて居るなど、左岸の山の上から、ありありと見えたときには、心氣覺えず躍動した。又對岸の道路には、コサツク騎兵が往復し、電柱などが歴々として指點し得た。夜は朝鮮式の小舟で島と島との間を點火しながら往復するのが見えた。之に反し我が軍は、命令により一切射撃を嚴禁され、松の木を連ねて蔭蔽幕を張り全然行動を秘匿するに努め、夜間は朝鮮人の白服を纏ひ河川の偵察をした。敵も朝鮮人を間諜に利用したが、同人種である點で我が軍は遙かに便利であつた。彼我前哨の緊張度及秘匿の觀念が斯くの如く大差があつた。當時血氣の小隊長として眼下の敵に對し、早く一發見舞ひたく感じた。

小評論

露軍が日本軍を小弱として馬鹿にした點もあるが、彼等の呑氣なる天性が斯く警戒を

等閑に附するに至らしめたのであらう。之に對し最前線の部隊が一發見舞ひたくなるのは心理上當然である。然し、高級指揮官としては、小の蟲を生かして、大の蟲を殺さんが爲、又我が軍行動の秘匿を嚴ならしめん爲、射撃を嚴禁したのに對し、命令が徹底したことは、軍紀上頼母しき要素と謂ふべきである。

將校と下士官 中隊が前哨に服せざる日は、架橋材料の蒐集や其他の雜務に服した。鴨綠江の上流方面から材木を集めたり、又糧秣の運搬や、道路の構築等に忙殺されて、休む邊は殆んどなかつた。殊に鐵山半島から一俵づゝの米麥を兵が背負うて一列縱隊となつて運搬せることや、重砲の爲に道路を構築せることは尠からず兵を疲勞せしめた。然るに之が指揮官には下士官では駄目、必ず將校を出せと屢々會報で注意があつた。此事に就ては其後、沙河の對陣間に露營用の炭焼の使役や、薪採取の使役に至るまで、下士官では十分に仕事が出来ず、何時も將校の引率を會報で要求された。

小評論

以て當時に於ける下士官の能力を窺ふに足る。然し將來の戰爭には、一兵に至るまで獨斷の能力を持たねばならぬ。下士官に至りては、下級幹部として其能力は大に向上せられねばならぬ。到底將校が一兵に至るまで指揮し、指導し得られるものではない。従つて此實

戦者の言へる如き實情では、軍隊の能力發揮に懸念なきを得ぬ。故に平時から、此等の點に十分注意して教育程度を向上せねばならぬ。今や下士官教育機關は日露戦争當時より更に注意を加へられてあるから、面目は一新せらるべきを信するも、戦時に於ける所要人員の劇増を想ふとき、而して將校就中青年將校の數亦不足勝なるに鑑みると、等閑に讀過すべからざる事である。

渡河直前の心理状態 四月二十九日午前二時渡河掩護隊として、烟臺谷の東方高地の麓に集合し、武器、装具を結束し、背負袋中には携帶口糧たる糲の外に、各人精米を靴足袋に入れ出来るだけ多量に持った。尙ほ飯盒や彈藥(百二十發の定數以外に背囊入組の三十發及其他に數十發分)等を收容し方匙、小十字鍬等を結束した。

「煙草のみたき者は今の内にすうて置け、出發後は喫煙を禁ずる。」との嚴命があつた。其時將兵共に生還を期せず煙草を残して置く必要なしとて皆は一度にすうて仕舞つた。

小評論 彈藥や米は背負へる丈け持つて行くが、煙草は残して置く要なしとは矛盾せる理窟であるが、初陣の心理は必ずしも理論的に歸納する譯には行かぬ。唯其瞬時に於ける氣持ち、それは往々に一人の發言が直に群集に共鳴せられ易いのである、が要するに其時の氣持が旺

盛なる意氣を想はしめるに於て頼母しく感ずるが、然し指揮官としては、戦闘直後煙草がなくても志氣を阻喪させるに至ることを想ひ、若き者の心理は之を賞しつつも斯かることは注意を加へる丈けの餘裕が欲しい。

此時鴨綠江を晝間に強行渡河すべきか或は夜間を利用すべきかに就て議論が二つに分れた。併し聯隊は晝間決行することとなつた。此等は北九州の者の心理状態を現はす一斑として見るべきものである。蓋し夜間を利用せば損害少きことは想像し得るが、敵前の冒険で同じく死するならば晝間華々しく戦うて死にたいとの希望である。北九州の兵は其性格上晝間は實に華々しく戦ふも夜間の戦闘には適せざるものがある。従つて夜間は稍、頼み少なき感を懷いた。此點に於ては本戦役間に於て隣師團として併進した第二師團の兵と全く反對なことを、つらく感じた。様子峯で第二師團の前哨が敵の夜襲を受けたとき、之に連絡して特に深く此感じを懷いた。一般に兵は夜襲或は激戦の後は、其戦闘を誇大に吹聴する。就中、夜襲なぞのときは敵の兵力を多く見るもので、戦の直後の戦線は喧騒に互るのが通例であるのに、第二師團では一般に極めて冷静で、夜襲を受けた様な氣色が見えず、其答振りが第十二師團や近衛師團の兵とは大に異なつて居る。

小評論 九州人の性格として晝間華々しく戦死し度いとの氣分は面白いことである。又第二師

團の兵と九州の兵との差も面白き現象であり、今日に於ても多少兩者の接近傾向に在りとは言へ、大體に於ては此記事の通りである様に思はれる。従つて軍隊の運用、統帥に方りては能く其地方色を考察して善處することが肝要である。と同時に、各地方色に於て長所はどこまでも之を伸ばし、短所は平素の教育に於て之が矯正、向上を圖るの注意が必要である。

ロ 渡河時の状況及前哨配布の錯覺

當聯隊は愈々晝間強行渡河をなすに決して天明を待つて居る。此間に、師團砲兵(山砲)は山上に放列をしき、其掩護下に渡河することとなり、先づ工兵隊と連絡して渡河の準備をなす。

二十九日午前十時頃、敵の砲兵が對岸安平河河谷を前進し來るを見るや、我が砲兵は一齊に射撃を開始し其一砲車を破砕した。同時に對岸の騎兵を砲撃するや、敵騎は周章退却したが、別に損害があつた様には見受けなかつた。

斯くて正午に至り砲撃の効果を認め準備せる鐵舟十隻を以て漕渡を開始した。一鐵舟に十五人づゝとし烟臺谷より安平河の一軒家を目標として漕渡を急いだ。時に虎山の敵砲兵から砲撃を受けたが、數發のみにて止んだ。本流の河幅は約三百米、水深は四米餘で急流である。本流の彼岸に達するや直に鐵舟から跳び下り砂の上に散開した。敵側に在る支流は幅約百米で、深さは股の

下部に達する位であつたが、之を無事徒涉した。對岸に在つた若干の敵騎を驅逐し恰も満開の櫻花の高地を占領し、大隊全部渡河終了後大古岑の線を占領し、第九中隊を以て福河谷高地に進め、以て師團の渡河を掩護した。

此大古岑に至る山道は嶮峻で方向が定まらぬ。そこで山上に歩哨を配布するに方り味方の方向に面し敵に背を向けて配布した。夜半の巡察で其の誤りが判明し、別に故障はなかつたが、兎に角錯覺であつた。此夜風強く寒氣は骨に徹する程であつたので、前哨中隊以上では焚火をするに至つた。

小評論 晝間に強行渡過をなすか夜間を選ぶべきかは、勿論情況によるもので一定すべきでない。併し將來戦に於て敵前渡河の要あるときは、多く夜間が選ばれるであらう。此實戦者の述べたる如き、晝間華々しく戦死せんが爲めに云々の理由は、戦術上の原則からは成立の要素となり難いこと、茲に喋々を要せぬであらう。又前哨を敵に背を向けて配置した如きは、甚だ危険なる誤であるが、未知の地に而かも夜間に到着した際に往々にして誤を生じ易い。之は平時の演習に於て此種の實驗をなせば其困難なるなることを了解するであらうし、又此種訓練は特に下級幹部に於て必要である。

ハ 四月三十日に於ける鴨綠河右岸地區の行動

前夜は寒氣の爲、一睡の遑もなく翌三十日午前四時三十分前哨を撤し、我が大隊は旅團の前衛となり嶮惡なる小徑を辿りつゝ午前十時頃下嶺路溝東南高地に達した。時に左方（近衛及第二師團方面）に當つて砲戦が起り、極めて壯觀であつた。腰溝及九連城附近は我が重砲及野砲彈の爲黒煙天に漲るを見る。之は後にて知つたことであるが、第二師團が其偵察斥候の急を救はんが爲、遂に砲戦を惹起したのであつた。同夜は此地附近で、前地の偵察就中鬮河の偵察を爲した。午後十一時に命令があつて、突然出發を命ぜられ、鬮河左岸豺狼子溝西南方高地に進出し、對岸葦子溝及梧頭林子方面に對し掩堡を構築した。工事は徹夜に互り強斷面の立射散兵壕を設け、朝四時に完成した。之が出征以來最初の大工事であつた。工事の終つた頃、風吹いて冷氣を感じ、發汗遽かに凍るが如く覺えた。

同夜、鬮河の偵察をなした結果三箇所の徒涉場を發見した。此偵察に方り中隊の某軍曹及某上等兵は裸體となりて對岸に達し徒涉場に目標を設けた。其功に依り軍司令官から感狀を授けられた。然るに、惜哉此上等兵は翌日石城の戦場で戦死を遂げた。

小評論 鬮河の偵察は各師團共に苦心をしたのであるが、此敵前に於ても上記の如き勇敢にし

て沈著なる將兵により、何れも徒涉場を的確に發見し師團の渡河を容易ならしめたのである。

ニ 五月一日鬮河左岸の觀戰及鬮河渡過前の狀況

五月一日午前四時、散兵壕に據り前方を視察するに、鬮河の對岸には敵影を見ず。そのうちに午前五時二十分頃轟然たる爆音が第二師團の方向に起つた。或は總攻撃の合圖であらうと思つたが、重砲の射撃開始であつた様である。續いて我が重砲陣地と思はれる地點から、猛烈なる砲撃が起り、腰溝附近の敵陣地は黒烟を以て覆はれ、高地上に乗馬者が右往左往に駆け廻りつつある有様が壯觀であつた。

次で午前七時頃近衛及第二師團の歩兵部隊が、鬮河下流の砂洲を前進する有様が側面から望見することが出來た。初めは整然たる散兵線の後方に密集部隊が續行して中洲を前進したが、河岸に近づくと見る内に後方に退くを見る、又盛り返して前進をする、斯く二、三回同じことを繰り返しつつあつたが、其間砂上に黒く死傷者の横はるを見た。其の内に一騎者（隊長か或は副官ならんか）鬮河に跳び込み對岸に到着したと見るや、次で第一線の散兵も河中に躍り入り流を亂して前進し、對岸よりの猛烈なる銃砲火を冒して進む所、壯觀で血の湧くを覺えた。

斯くて近衛及第二師團方面の敵陣地上には敵の乗馬者、徒歩者の暴露して現出する者逐次に多

くなり、敵が動搖の状態歴然たるものが看取されたが、我等の對岸は依然として聲も影もない。最初の間は散兵壕内の兵等が首を胸牆上に顯はし、下流近衛及第二師團の戦況を見るものを固く戒めつつあつたが、該方面の戦況が酣となるや自然に戒心に弛みを生じ、將校は上體までも暴露し、次いで將兵共に自分の警戒は全く顧みざるに至り、側方の觀戰に餘念がなかつた。時に我が前面高地上に下流方面から白馬が一騎駆け來つたが、間もなく俄然我が對岸高地から轟然として砲彈が飛來して胸牆に命中して土砂を飛散し、又次いで後方の谷地に爆發した。折柄後方谷地に集合せる騎兵隊の狼狽は大變であつた。

觀戰將兵は一驚を喫したのは言はずもがな、忽ち壕底に屈伏して頭を出す者もない。之が吾々の最初の砲彈の洗禮であり、兵の内には散兵壕内斜面の土中に頭部を突入せる者もあつて、後の笑ひ草となつた。

小評論 友軍の動作を側面から見物して其壯觀に血を湧かしたることなどは、能くあることで、此記事にも書いてあるが、敵の猛火にやられて退却する有様などは初陣には見せたくないことである。幸ひに、此友軍は奮進以て彼岸に達したのであるから、志氣上には寧ろ好影響を與へたであらう。

又友軍の活動を見物するに餘念なく、不知不識自己の直前を等閑に附したことに就ても往々にして有り勝ちのことである。幹部たる者は能く心を奪はれざる様切に心懸けねばならぬ。其不警戒に對して、どかんと砲彈の見舞を受けたことは、將來の爲、天の與へた警報であつた。其狼狽さ加減も推察し得るが、若し日本軍が敵側に在つたとしたら、急襲砲火と共に直に突撃したであらう。而して必ず成功したであらう。

ホ 石城附近の戦闘

午前八時變河を渡過して前進すべき命令が下つた。そこで當隊は散兵壕を出でて縦隊となり、川岸に進出、次いで四列縦隊にて四人づゝ手を組み合はせ、河を渡つた。背負袋は背部に高く、雜囊は後頸に結び斜に上流に向つて前進した。其渡河線は偵察者が標示した所であるが、水深は相當に深く胸部に達せる處もあり、脚を掬はれ倒れる者もあつた。宇治川の先陣を争ふ如き氣分で日の丸の國旗を押立て、萬歳の聲と共に流を亂して進んだ。此動作は、對岸の高地の爲死角を成形し高地上の敵砲兵は射撃し得ざる關係にあつた爲、幸にも損害なく敵岸に達し得た。

對岸に駆け上るや一寸の遑もなく、併立縦隊を以て早駆を以て石城に向つて前進した。其途中に石垣を廻らしたる一軒家があつたが之を左に廻はり、鞍部に出でて散開隊形に移つた。

全軍は勿論、ずぶ濡であり、靴の中に水が満ちて駆歩が頗る困難であつた。其の上、敵砲彈の爲、濡れた服が土砂を受けて泥鼠の様になつた儘進んだ。斯くて敵前九百米の高地に達し我は射撃を開始した。時に大隊は第一線に二中隊、豫備として二中隊を控置した。敵の銃砲彈漸く猛烈に飛來したが、殆んど早駆を以て敵前七百米位まで躍進した。此時分、後方から駆けつけた豫備二中隊も伍間に増加した。之が爲、隊伍全く混淆し散兵線の某部分には將校三、四名も近く相接して指揮を執り、或る部分には指揮する將校が居らぬ所もあり、斯くて大隊は四箇中隊の混淆にて、而も殆んど密接散兵となり、六百米の敵前まで近づいたが、敵は頑強に抵抗した。依つて此線にて當時の所謂決戦準備の射撃を爲した。

午前十時頃後方から渡河して來著せる第三大隊、第二大隊は左翼の高地方面より増加し、又歩兵第四十八聯隊(大村)の一部も進み來つた。時に我が前面高地の敵は逐次に散兵壕を離れて退却を始むるを目撃した。そこで、更に躍進を續け、午前十時三十分頃敵陣地を奪取した。敵は其陣地に砲臺鏡、銃、砲彈藥、雜囊、水筒、黒パン、角砂糖等澤山に散亂、遺棄して居つた、追撃射撃後、該高地上に一時隊伍を整頓した。

小評論 不意に砲彈に見舞はれて狼狽氣味となつた軍隊も、前進命令で心氣一轉、極めて旺盛

なる氣持で渡河を始めた有様もよくわかる。併し此小隊長自身も所感として述べて居るが、「將兵共に初陣の功名に驅られて、渡河後隊伍を整頓することも忘れ終始早駆で進み、後方の隊が逐次追ひつゝに従つて伍間増加をなした爲、隊の混淆を來たした」のである。爲めに、指揮錯亂し混雜寧ろ言語に絶する有様で、小隊長の所謂「平時の演習ならば講評の限りでなす」様な實狀を呈したのであつた。

〜 當該小隊長の感想一斑

射撃目標の誤り 最初射撃開始の際、敵は高地の防界線を占領し居るものと信じ之を目標として射撃をさせた。然るに七百米に進んだとき、初めて敵は高地の中腹に散兵壕を構築し其胸牆に松の枝を植ゑてあることを發見した。つまりそれまでは無駄な射撃をして居つたことを思ひ慚愧に堪へなす。

約六百米に近づいて敵が、ぼつ／＼退却を始めた頃、敵の陣地が高地の中腹に鉢巻式に構築されあるを知つた。

小評論 射撃目標の誤りも實戰に於て屢、起る所であり、心氣動搖せるとき殊に敵が巧みに遮蔽しあるとき誤り易きものであり、指揮官の特に注意を要する所である。而して指揮官が的

確に目標を指示しても、尙ほ日つ吾等は之を正確沈著に基本射撃でもやるときに射撃し得るものは少なく、寧ろ盲撃ちをやるものも稀れでない。此點も指揮官が胸中の餘裕を以て監視を要する所である。

其他、雜囊が渡河の際濡れたので、河岸に置いた儘戦闘に前進したさうであるが、之れも不可である。戦闘後、再び舊位置に戻つて之を探すなどのことは困難であるばかりでなく、戦機を失することは實戦者の能く承知して居る所である。初陣の人々が能く注意して置くを要することである。

又、「責任は吾人を驅つて勇敢ならしむ」と所感を述べられてあるが、勿論同感である。下士官は兵より、將校は下士官より一層勇敢なるを常とする。勿論少數の例外はあるが、天性の勇敢なる人は、何れの階級と如何なる場合とを問はず常に勇敢であるが、其他の多くの人は時によりて差異があり、階級、責任の大小によりて濃淡があるものである。故に幹部たる者は常に自己の修養に努むると同時に、部下の者が一度勇敢ならざることありとも直に之を捨てず、能く戒めて將來の戦功を以て之を償はしむる様に指導すれば、嘗つての怯者も最も勇敢なる行動を敢行した例は日本軍でも少くないことを青年將校諸彦は是非心得て居て貰ひたい。

ト 蛤蟆塘の戦闘

石城の戦闘では非常に隊伍が混雜をなし、獨り大隊内のみならず、聯隊内でも他の大隊中隊と混じたものもあつた。追撃射撃後隊伍を整ふる必要があるので、比較的纏まつて居る第十、第十一、第八中隊を第三大隊長の指揮に屬し前衛となし追撃せしめた。第十中隊が前兵であつた。

當時尖兵長、前兵長、前衛司令官何れも蛤蟆塘に突進したならば敵の退路に迫り得るものとは毫も考へて居らず、唯敵の退却に尾して進んだのである。残餘は隊伍の整頓出來次第之に續行した。本隊とも稱すべきものは初めは第二、第一大隊の順序であつたが、蛤蟆塘方面から敵砲火を受くるに至るや、多く本道西側の高地を躍進的に前進した爲、命令の傳達、報告、通報何れも中絶し、前方に進み過ぎたる部隊もあれば、後れ過ぎたるものもあつた。従つて再び指揮の統一を缺くに至つた。

午後零時三十分頃尖兵(小隊)が大樓房不正十字路附近に達したとき、前方から敵の部隊が前進中のものがあつたが、我を見るや直に退却し、其後方道路の兩側に歩騎兵四百計り退却しつつあつた。而して其收容部隊は通路の兩側高地を占領せるを見る。前衛は其第十中隊を道路の東側に其他を西側高地より前進せしめた。

後續せる本隊は到着するに従ひ、標高²²³高地と本道との間に展開した。記事には「開進す」とあるも、開進命令もなかつた。

第五中隊のみを本道東側に展開した。該中隊長は牧澤大尉で、壯烈なる戦死を遂げられたので有名である。此中隊は後に第十中隊の左側に進出し勇戦奮闘して多大の損害を蒙つた。

午後二時頃になるや、敵砲弾が、何處より來れるか不明であるが、猛烈に落下する。聯隊は再び混淆したが、中隊毎には能く纏まつて居た。午後二時半頃、敵歩兵は蛤蟆塘東南高地の斜面及び西の高地側に現出し得意の一斉射撃を爲した。又其砲兵及機關銃は蛤蟆塘東南方鞍部及高地に放列を布き我が前進する歩兵を射撃し、戦闘は漸次猛烈となつた。時に本道東側高地に在つた第十、第五中隊は其占領せる高地稜線上に多數の國旗を翻へしつゝあつたが、忽ち敵の熾烈なる歩砲火の彈巢となり、次で國旗は稜線の後方に低くかくした。

午後四時前、敵は漸次我が左側を包圍し約一大隊の敵は逆襲に轉じ來り喇叭や太鼓を打ちウララの喊聲を擧げて突撃し來つた。第五中隊及第十中隊は若干動搖の色があつたが、能く之を支持し、惡戦苦闘遂に之を撃退した。彼我の死傷相重りて算を亂す。牧澤大尉、高石、堤兩少尉は戦死、特務曹長は負傷し伊木小隊長一人のみ生残つて殘兵を指揮し現地を固守した。

我が山砲兵第二中隊は藤室山に放列を布き敵砲兵及機關銃を射撃した。此時始めて我が山砲の實力の貧弱さを見た。敵の速射野砲に比して誠に微弱で情なき感を生じた。然し間もなく山砲兵大隊が到着し一齊に射撃を開始したので、志氣大に振ふを覺えた。

敵の逆襲功を奏せず午後四時過から其隊伍大に動搖し始め、鞍部の敵砲兵も漸次沈黙した。爾後我が軍の前進と共に敵は潰亂して殆んど全滅し、武器を投じて降を請ふ者も多數に上つた。

聯隊は蛤蟆塘にて隊伍を整頓した。此附近一帶は彼我の死屍、傷者を以て埋められ、殊に地隙内は死傷者と敵の降參者とを以て満たされた。敵砲車十門、彈藥車、マキシム機關銃八、其他銃劍、裝具等は鞍部及道路に横はり、光景壯絶、萬歳を三唱し志氣は大に振うた。

小評論 平時の教練、演習の時の通りに號令、命令が下されず、亂雜、不統一に流れ易きは此蛤蟆塘への前進及戦闘の有様を考へても能くわかる。併し之は決して等閑に附してはならぬことである。勝手に射撃を開始したり勝手に前進したり、前後の連絡など御構ひなくやりたがるのが寧ろ多い。嬉しまぎれに、稜線上に大なる目標を表はして敵の彈巢となることも往々にあることである。國旗を無暗に高地上に翻すが如き、敵に故意に目標を提供するものがある。

牧澤中隊の苦戦と其壯烈なる戦死に就ては有名であるが詳細は之を省く。
平時は運動性が良いとか鈍いとかで砲種の選擇がきめられ易い。然しいざ實戦となると效力の大なるものを欲する。山砲の威力が敵に比して遙かに劣るを戦場で實見したとき、軍の將兵に大なる不愉快と不安とを與へたであらうことは、想像し得る所である。

チ 蛤蟆塘戦闘餘聞

露軍砲兵及機關銃の武士的最後 敵の砲兵陣地及機關銃陣地は、九連城方面に對して配備せられたもので、我が聯隊の方面に對しては全然側背を暴露して居つた。而して遂に其退路を遮斷せられた。彼我は進退谷すつた爲めでもあるが、野砲も機關銃も最後の一弾に至るまで射盡し砲手は其砲側に折り重なつて戦死し、藥莢も屍のそばに堆積せられてあつた。砲と共に其運命を共にした狀況を目撃し武人として涙なき能はず、敵ながら犠牲的觀念の發露を見たのである。

敵の新兵器機關銃の威力に對する感想 當時將校は士官學校にてホチキス機關銃（當時は機關銃と稱した）に就て習つて居たし、砲兵工廠では、試験射撃を試みつつあつたので、一と通りの事は承知して居たのであるが、下士官、兵は何等之に就て學びしこともなかつた。蛤蟆塘で、始めてガタガタの爆聲に對し異様な感を懷いたが、間もなく同時に數發の彈を蒙つて斃るる戦友を

見て其威力に吃驚した。爾後の戦闘に於て機關銃の爆聲を聞く毎に「又機關銃か」との恐怖的歎聲を發し、志氣に影響すること大なるものがあつた。

戰場掃除 翌二日戰場掃除に任じ戦死者を埋葬した。堤少尉は牧澤山で胸部に三彈を受け名譽の戦死を遂げて居つた。感慨無量であつた。地隙の中で露兵は擧手の敬禮を以て我等を迎へ直に食物と水とを恵まんことを哀願し、武器を投じて憐を乞ふ有様は、如何に國民性とは云へ腑甲斐なき心地した。

嗟呼牧澤大尉の奮戦 蛤蟆塘の追撃戦に於て牧澤大尉は平素の性格を遺憾なく發揮せられ、壯烈なる戦死を遂げられた。餘りに猛進に過ぎたと言ふ者もあるが、當時の追撃の情況としては斯くあるべきが至當であつて、斯の如き勇敢なる中隊長ありてこそ始めて敵の退路を遮斷し赫々たる初陣の戦勢を占め得たのである。

中隊の殆んど全部の幹部、下士官、兵の過半が中隊長の屍に折り重なり壯烈なる最期を遂げた有様は、平素の訓育、團結力の鞏固なりしを證するに足るものである。大尉は出征當時から一本の長槍を携へて居つた。朝鮮行軍中、時々之を見た。本戦闘間之を使用したか否かは知らぬが、日頃の性格と古武士的態度より推して當時の奮戦力闘の光景を偲ぶに足るのである。

小評論 實戦者の所感的記述であつて、何れも、参考とするに足るものである。新兵器が不意に現出することに依つて如何に相手方を驚かすか、志氣に關係を及ぼすかは、此所見の通りである。總て敵の不意に乗ることが戦勝の要素である。作戦上の急襲、兵器的奇襲何れも重要な注意すべき件であると同時に、此急襲の受身になりたる時、其の影響を極小ならしむることに就ては、幹部の任でなければならぬ。

二 蛤蟆塘戦闘の回顧 (摘要) (第十八圖) (第十二師團 I 小隊長)

筆者曰く 前記H小隊長手記中にも蛤蟆塘戦闘の事が若干述べられてあるが、此I小隊長の述ぶるところは詳細に互るもので、参考となることが赤裸々に言はれてある。依つて必要の部分丈けを断片的に紹介する。

イ 初陣の功名争ひ心理

(前略) 中隊は命を受けて勇躍しつゝ前進した。抑、當中隊は、此日(五月一日)拂曉攻撃準備に就いたときには大隊の豫備であつたが、饒河渡過後石頭城の戦闘で第一線となつた。然るに隊伍の混亂した爲復た豫備隊となり遂に聯隊の最後尾に残された。中隊長以下憤慨抑へ難く、内心

大に不平であつた。處が旅團長から「アノ山を占領セヨ」との命を受けたので、全員雀躍し、遮二無二前進又前進で無茶苦茶に急いだのである。

これは確かに初陣の功名を争ふ心理に支配されたもので、隣の第十中隊も亦出鱈目に急いだ。つまり兩中隊の競争であつた。其中隊長F大尉は豪傑で、平素は奇人の名を以て通つた人であつたが、戦場に出ると強いこと天下無類であつた。此前進中敵の二弾を受けても更に屈せず左手を繃帯し首に吊つた儘、而かも右足の貫通銃創にも構はず中隊を指揮して居つた。其後沙河戦で頭をやられたが剛情を張つて遂に戦線を去らず、戦役間終始鐵の如き意志を發揮し、部下の心服の中心となり、聯隊將校の敬慕して措かぬ人であつた。

其中隊は射撃しては前進し止つては射撃するので、戦闘終了後「實際敵を見て射撃したか」と尋ねたるに、第十中隊は石頭城の戦闘であまり射撃をしなかつた故、此處でうんと射撃せざれば射撃が少いから部下の功績に關係すると思ひ實はよく見えなかつたが撃つたのだと大笑された。其時敵を見ようと望遠鏡を取り出したが、饒河徒渉の爲望遠鏡も時計も砂だらけとなり役に立たず、第十中隊が第十八圖の圖示の高地を占領したので、當中隊は所命の如く一九二高地に前進せんとて、後より考へれば地形を誤りEの高地を所命の地點と思ひ、之に向ひ前進した。其後二十

二年前の古戦場を弔うて感慨無量であるが、其當時はEの高地が如何にも高く見えたのは全く中で戦闘した結果であつたらう。中隊がGの高地牧澤山に出るや、前面の凹道に敵の砲兵の先頭発見し、直に四百米の照尺で射撃をした。敵砲兵は豫期せざる射撃を受けて狼狽し、砲八門を砲車間隔もなく凹道の兩側畑地に放列を布置し將に射撃せんとしたが、中隊との距離餘りに近く、忽ちにして我が小銃火の爲砲手の斃るるもの算なき有様であつた。

小評論 初陣に於ける功名争ひ、之は古今を通じて常に見る所であり、而も精神に於ては頼母しきことである。若し之が反對に互に先きを譲り合ふ様では困つたものである。然し此記事にある様に、所謂敵情に構はず無茶苦茶に前進を競うたのでは、現今及將來の戦場では、敵に突合せざる以前に肉弾は全滅するであらう。要するに操典の教示する所に従ひ、敵弾、敵火を顧慮しつつ損害を極減するに努め、突入時に於ける肉弾を優勢ならしむることに注意せねばならぬ。

F中隊長が告白せる濫射は、無邪氣で愛すべき性格の發露とも見られるのであるが、將來の戦闘に於て敵を確認せずして發射する如きは嚴に禁ぜられある所で、勿論該中隊長の言うた所が眞實であつたとすれば嚴戒すべきであり、大害がある。濫射、亂撃は如何なる場合に於

ても嚴禁である。日露戦當時は、尙ほ所謂粗剛者流が指揮官として少くなかつた、其勇敢なる點に於ては敬服に値するも、其行動には往々に戒むべきものがあることを含んで置くべきである。

ロ コサツク來襲の恐怖

間もなくE高地上の密集部隊が斜面を下り來つた。望遠鏡は使へず、肉眼では敵か味方が分り兼ねる。其時敵砲兵の附近から妙な兵器が現出するや、我が死傷瞬時に多數に上つた。之は敵の機關銃であつた。士官學校で紙の上で一寸學んだことはあるが、現場を見ず咄嗟の場合機關銃とは氣が著かなかつた。

兵の一番信頼するものは小隊長 最初の負傷者清水清吉が左顔面をやられたとき、第一分隊長が「小隊長清水がやられました」と叫んだ故「注意しろ」と答へ、自分は隣小隊に連絡して歸るや、清水が如何にも怨めしげに自分を見つめたので、如何にも氣の毒になり、稜線の後方に退けて緋帯してやると、左翼分隊長は小隊長が負傷したものと誤り、「小隊長殿がやられましたか」と大聲にて尋ねた。處ろが銃聲騒がしき修羅場裡でもこの事は徹底したと見えて、一時に銃聲は止み物凄く一種の空氣に掩はれ、あはや戦線の動搖を來たさんとしたとき「小隊長じゃない、しつか

りやれ」と怒鳴り、清水を棄て早速稜線に駆け上ると、不思議にも小隊の射撃は復活した。戦場では一番兵の信頼するのは小隊長で、其の間柄は密接なものである。

小評論 新兵器に對する恐怖に就ては前回の記述にもあつた通りであり、又小隊長と兵との關係に就ては將來は尙ほ一層深いであらう。従つて信頼し難き小隊長を有する小隊の戦闘能力も低下すべきや必然である。實に小隊長の一舉一動は小隊全員を支配する。率先躬行、身を以て範を示すとき部下之に従ふものである。又上官の負傷や戦死を大聲で報告する如きは一般の志氣に關すること頗る大なるものがある。戦闘の高潮時に於て特に然りである。戒しむべきことである。

斯くて死傷は漸次多さを加へ、日の高地に出してあつた戦闘斥候は四名共全部やられて仕舞つた。日露戦前からコサツク騎兵の名は日本人の誰れ彼れにも恐ろしいものとして宣傳され、小學校の兒童すらもコサツクの獐猛を知つて居つた。繪や寫真で騎兵が馬上射撃をする有様や馬を寝かせて小銃を之に依托する射撃の様子など、今尙ほ印象に遺されてあるが、この感想が戦場にて随分禍ひした。各兵の頭にも此のコサツク騎兵を懼れる觀念潜在し、危急に瀕するや此潜在意識が勃發して「コサツクの襲撃」なる聲を耳にし、一犬虚に吠えて萬犬之を傳ふる心理は、さらでだ

に神経の尖つたときには鋭敏に活動するものである。「コサツクの襲撃」なる聲が右小隊から誰れ言ふとなしに聞こえる。「誰れだ」「うそだ」と分隊長が叫ぶ。すると又反對に左翼から「コサツクの襲撃」と怒鳴る。見ると松林から事實露兵が逆襲して來た。

I 高地(筆者曰く此高地は所在不明)の分隊は奮戦して居るのが見えるが、悉くやられたらしい(後にて一名負傷他は全部戦死と判明した)。小隊の左翼分隊長は豫備上等兵であつたが、沈著したもので、「守勢鉤形をとれ」と大聲で號令して居る。實に立派な態度である。(中略)此の逆襲は辛うじて喰ひ止めたが、我が損害甚しく、將校以下戦死三十八、負傷六十八、流石の中隊長も「こゝやられては後の稜線までさがらう」と言はれたが、「G 稜線北側の地隙中に負傷者から先きに運搬することしよう」とて、其處置をなした。其頃火線からは彈藥を射盡したとの報告が頻々として來つた。第十中隊の方向に向つて大聲で「小行李は何處か」と連絡すれば、第十中隊も亦「俺のところも彈藥がない」との返事があつた。斯くする間に中隊長牧澤大尉は眉間に敵彈を真正面に受け壯烈な戦死を遂げられた。此戦闘間、中隊長の態度こそは眞に軍人の龜鑑とするに足る。實に惜しいことをした。

小評論 「コサツク騎兵」なる買ひかぶられたる威名に最初は恐怖を感じたことは、必ずしも第

十二師團に限つたことではない。「敵を知り己を知る」は大切な事であるが、真相を掴むは困難である。「死せる孔明生ける仲達を走らす」も此心理から由來す。吾人は敵の眞價を實驗し體驗せざる前には決して之を恐れず、又決して之を侮らず、以て先づ全力を盡すの覺悟が肝要である。

彈藥射盡、之は一面に於て激戦を想はしめると同時に、初陣でもあり何んでも打て式に必要な以外に濫射したであらうことも察せられる。一彈一敵主義に徹底し、彈藥の尊重に就ては、兵が夢中で亂射したがるに鑑み、幹部が沈著して特に心懸け置き善處すべきことがらである。

ハ 砲兵協力の價値

砲兵は此頃漸くB高地の陣地に進入し、第一發を我が中隊の正面の敵に見舞つたので、中隊全員の志氣振々一同蘇生の心地がした。何故、砲兵が斯く遅れて到着したかと後で聞いたところ、石頭城の戦闘後、宿營準備に着手して居たとのことである。然るに大樓房南方に銃聲が盛んになるのを聞き「サテハ」と驚いて急ぎ歩兵に追尾して來たのである。若し前衛に砲兵が附けられてE高地の我に面する斜面を密集部隊で降りて來る敵を集中射撃でやつつけたら、如何に効果があつたであらうと、實は地團太踏んで口惜しく思つた。追撃戦の原則として前衛砲兵の必要位は士官

候補生でも知つて居るところであるが、

小評論 砲兵の協力が、友軍歩兵の爲め、有形よりは寧ろ無形上に効果ある場合が少くないことは、此の例でも雄辯に物語つて居る。

前衛砲兵の必要は、茲に述べられてある通り士官學校教の程に明示されており、誰しも熟知して居る。然るに初陣の際に於ける有形上の混雜と無形上の作用とで忘れられて仕舞ふ。之は單に一例で、其他にも之に類することが澤山ある。幹部たる者は亦平素の演習で喧しく注意される事を省みなければならぬ。

小隊の退却 後を顧みると、敵の機關銃彈が大樓房に通ずる道路西側の畑地に砂煙をあげてゐる。其中を第七中隊のA中尉が増援の爲駆歩で前進して來るのを見受けた。一同勇氣百音し、「如何にしても此高地は棄てまい」と決心を堅くした。然るに暫くすると左翼方面から「コサツメ襲撃」を叫ぶ者がある。遺憾ながら今度は右翼部隊の方から崩れて戦線著しく動搖し、小隊は全く孤立となり、且高地方面より優勢なる敵の突撃を受け、我が左側面を突かれ如何ともする能はず遂に逐次後退して後方の稜線に退ると、第七中隊方面から有效なる掩護射撃を受けたが、GF兩稜線間の谷地は彼我入り亂れて混戦亂闘中で、勿論後方稜線よりする味方の掩護射撃の爲に同志討され

た者も多数あつた様である。此谷間の地點で戦死した者の中で身に二十三の彈痕を受けた死體を後で見た。如何に苦しい戦闘であつたかを想像されるであらう。

小評論 此露軍の逆襲は、オクチン大尉が二箇中隊を以てしたる勇敢なる動作で、露軍側の記事によると、此逆襲によつて日本軍を後退せしめ血路を開いたと示されてある程激戦であつたのである。又此日本軍小隊が後方の稜線まで後退するの已むなきに至つたのは、よくよくのことであつたであらう。然し此の如き苦戦の場合に、一度其嚙りついて居る線を捨てたら最後、其部隊は總崩れとなり潰走に陥るを例とする。然るに該小隊が能く秩序を保ち得たのは、指揮官の沈著剛勇能く部下の信頼を得て居たことを證するものである。然し斯の如き場合は通常何とかして晝間丈けでも現地を頑守するに努むべきであることを、青年將校諸官は心得て居られることを要する。

都合ニヨリ抹消

敵の第二次の勇猛なる逆襲も第十中隊の猛射で敵も退却した。負傷者が心配になるからG稜線北側に進出しようとする、第十中隊の左翼方面に進出した第六中隊長から「出るな出るな」と帽子を振つて制止する。何故ならんと周囲を見ると髭の露兵が前の地隙に半分顔を出して手を振つて居る。之はてつきり降参するのだと直感したので、部下に向ひ「若し自分がやられたら仇を取つて呉れ」と言ひ置き其露兵の處に行くと、果して降参人で、一等大尉以下二十六名が、のそのそと武器を投じて降参の意を示した。

予は武士の禮を厚くする爲、帽子を取り、髭の一等大尉と握手するや、第十中隊方面から萬歳の聲が一時に起り、何んとも筆紙に盡し難い涙ぐましい感情となり暫く無言で居た。

同じ地隙の中に中隊の模範兵某一等卒が負傷して進退谷まり自殺せんとして脚胖を解き靴下を脱いで、將に銃口を咽喉に當て足の指先で引鐵を押へんとする所を見た。「コラッ」と思はず叫んだ。時に其兵は我が方を見て「ニコッ」と淋しい笑ひを洩らし、危き一命を取り止めた。

中隊の兵は興奮して敵愾心に燃え、特に某上等兵が地隙の中で敵の爲に腹を刺された死屍を見るや武士の禮儀もあらばこそ憤激抑へ難く、どうしても俘虜を塵にすると思氣巻いて下らぬ。之

を制止するに大に骨が折れた。

小評論 武士の禮を以て敵を遇することは我が大和魂の發露であり、我が武士道の教ゆる所宜しきを得て居る。然し冷静なる時に於て而かも自分が直接關係少き時に於ては、之を實行するに比較的容易であるが、本文にある如く激戦の後興奮の極に達したとき、戰鬥力を失へる敵を見て直に之に危害を與へんとする心理は能く幹部たる者の心得置くべき事である。此小隊長が自分の憤激もさこそ思はるるに能く部下の激情を抑へたことは敬讃に値する。

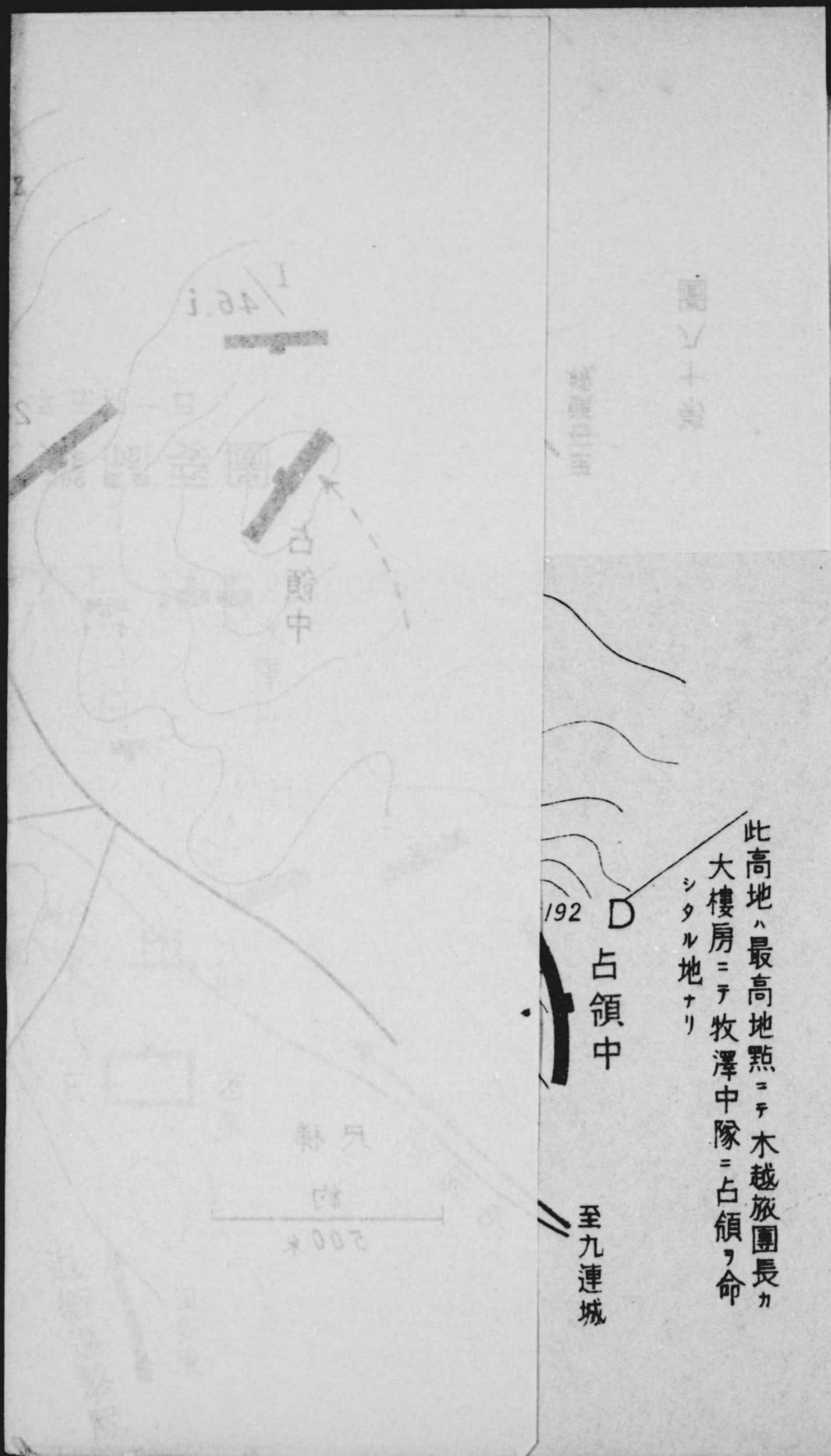
之が支那軍の様なものであつたら、先づ掠奪、而して慘殺にしまつて居る。北支事變に於ける通州の慘劇は餘りにも悲痛の極みであり、公憤を禁じ得ないものがある。然し我が將兵は徒らに之が復仇などは考へない。又日本在留の支那人が安全に居住して居れるのは、我が國民の襟度が上下に行き互つて寛裕、博愛なるを示すものである。

武士の禮と功名争ひ 茲に思ひ出したから序に附け加へるが、最初中隊がG高地に進出すると出合頭に敵の砲兵を射撃し之に大損害を與へたので、彼等は照準機、閉鎖機などを要部を携へて砲八門を遺棄して退却した。我が中隊は其後之が鹵獲の處分手遅れいたした。事實中隊長は戦死、第二小隊長も第三小隊長も戦死し、特務曹長は重傷、曹長輕傷、分隊長の多數も死傷したのであ

るから、鹵獲品の處分の如き餘裕はなかつた。前記の俘虜二十六名も一軒家の庭に雨曝にされた次第である。之が爲砲八門、機關銃七門は近衛の某中隊の鹵獲となつたのである。然し此邊は互に考ふべきことである。

小論評 戰場では功名争ひが動もすれば起り易い。是れ功名は互に譲り合ふべき武士道の本義を忘れるからである。之が爲感情の衝突乃至對立状態となり憂ふべき結果を惹起せぬとも限らぬ。心すべきことである。

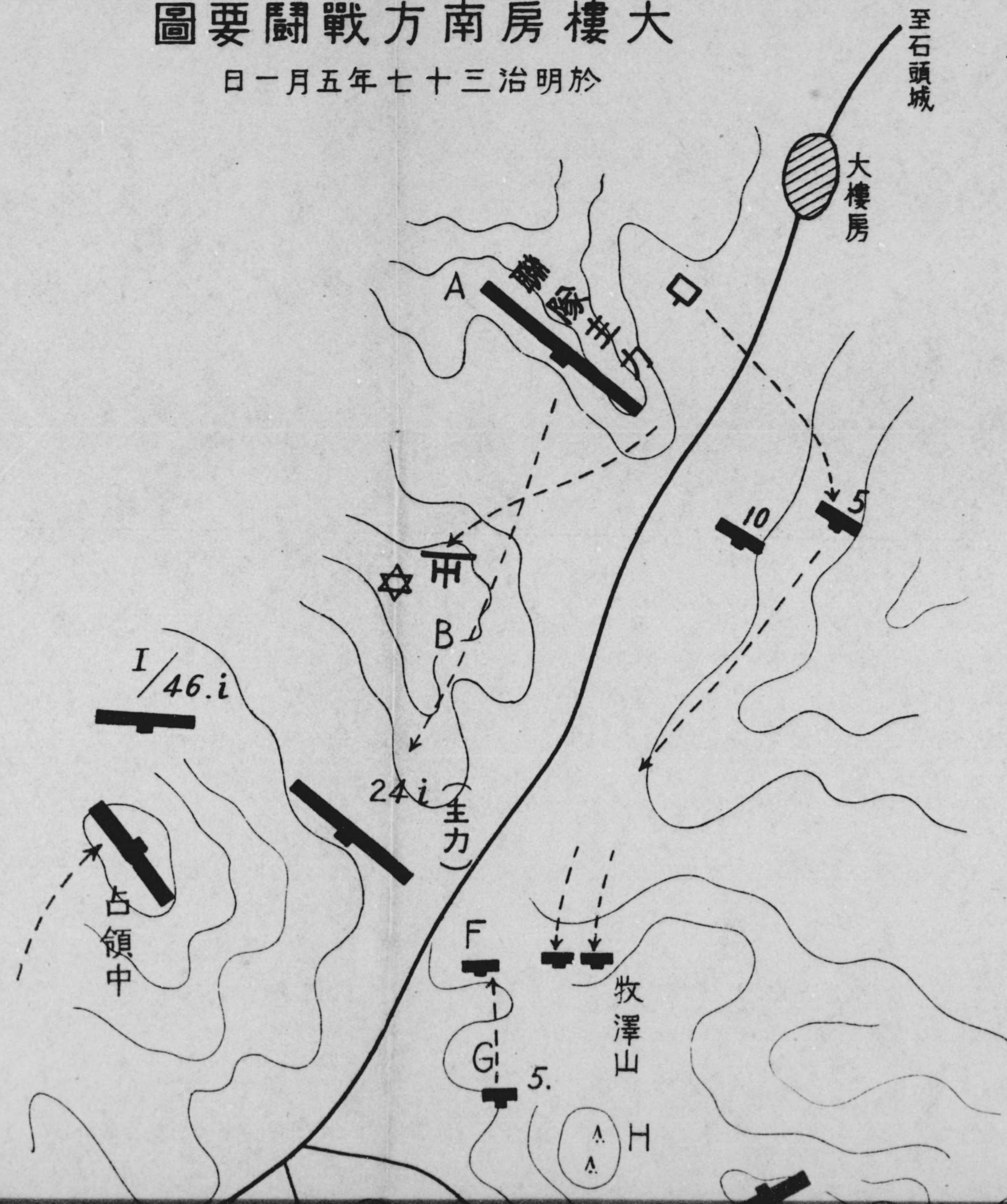
生存者が戦死者となる 参考にまで述べるのであるが、近衛師團に連絡する爲五名の兵を出したことがある。出發に方りては「此方向に居るだらう」と極めて曖昧な命令で、甚だ的確を缺いたが、當時はそれ以上に方法がなかつたのである。そこで遂に一名の行方不明者を出した。これを戦死として報告し金鵄勳章まで賜はり郷里では戦死の處置をした。ところが後に至り安東縣の病院に入院して居ることが判明した。其經歷を調べて見ると、其兵は哈蟆塘附近で敵の援兵に遭遇し負傷したので、戦友の介抱で附近の支那人家屋に依頼された。戦闘後該戦友は該支那人家屋を捜索したが見當らず、更に下士以下若干を以て附近を調査したところ、該兵は自から手當をなして出て行つたが、途中で再び斃れて居たのを支那人が同情して戸板に之を乗せ安東縣に運搬せる次

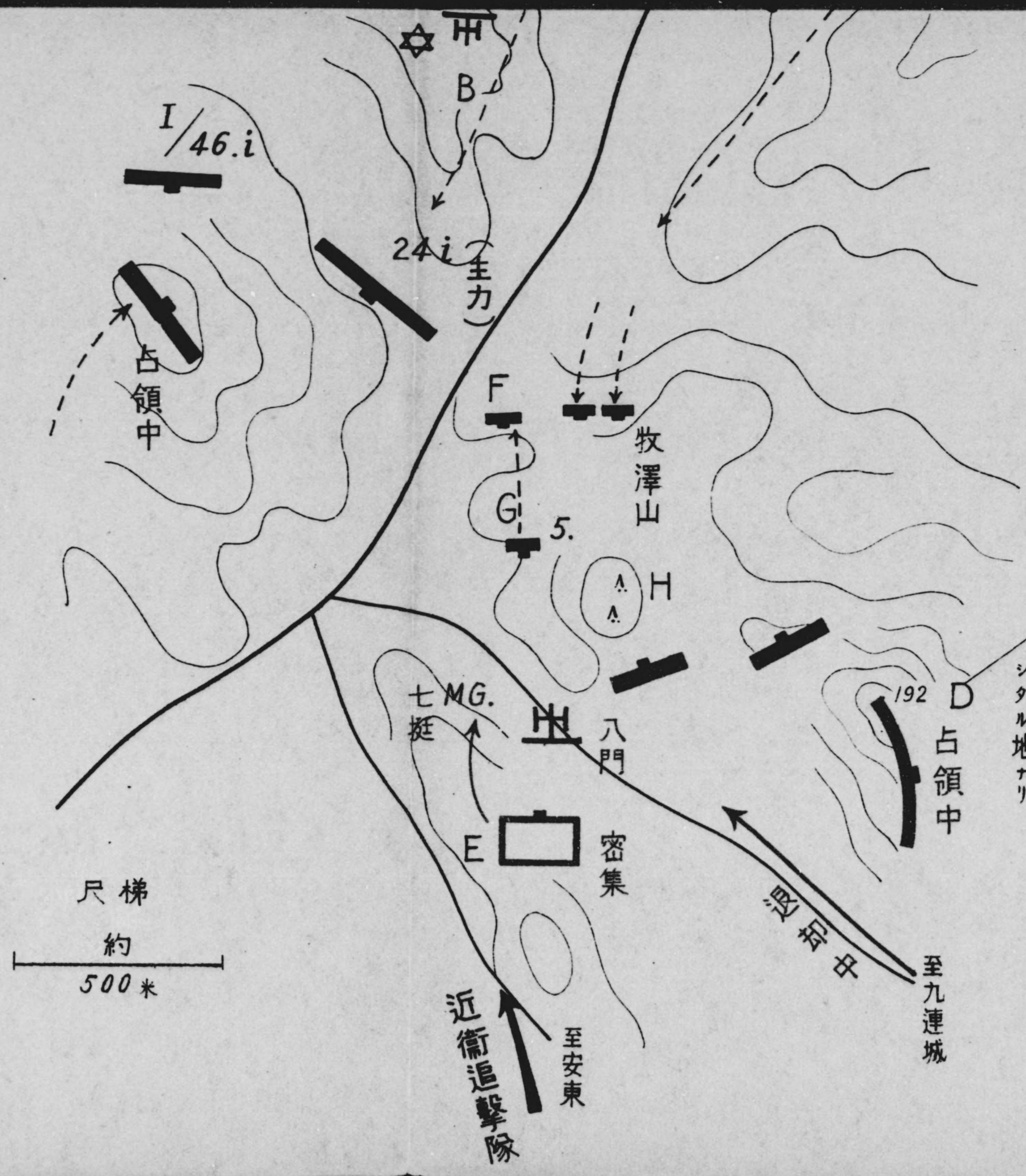


大樓房南方戰要圖

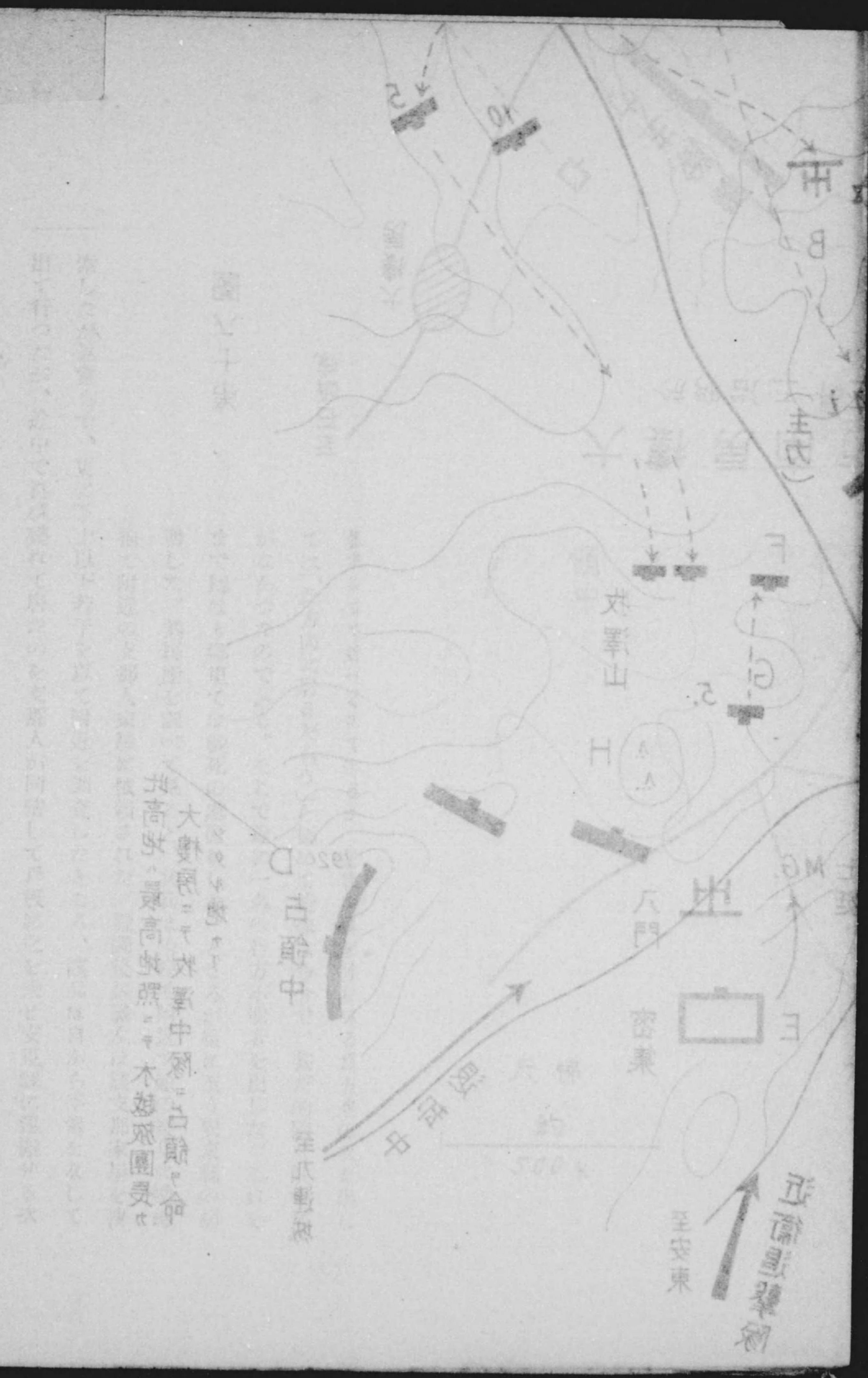
於明治三十一年五月一日

第十八圖





此高地ハ最高地點ニテ木越旅團長カ
 大樓房ニテ牧澤中隊ニ占領ヲ命
 シタル地ナリ



第である。兵馬徳控の巷では、斯かること少なからざるべきも、行賞せられるまで不明の儘に打ち過ぎたのは、中隊として手落ちであつた。

小評論 本文にある通り此種の事は起り易いが、要するに行賞にまで預るのには相當の日子がかかるのであるから、萬手落ちなき様執務者の注意すべき例である。

三 断片的實例の一

以上は實戦者の經驗を一戦闘の終始に互つて総合的に考察の資となしたのであるが、以下は多少戦場心理學の理論から其適例を見出すの形式によつて研究して見る。併し之れとても其の一端を窺ふに過ぎぬのは勿論である。

イ 感覺の鈍麻

戦場に慣れるまでは興奮のあまり知覺は鋭敏となるものであるが、其程度を越えると却て之が鈍麻されるものである。能く彈丸雨飛の中で睡眠をした例などを實戦者から聞かせられるのがそれである。一例

一 私は直ぐに熟睡した。爆裂榴弾が私の頭から七、八米位の所で爆發した、そして地に大きな弾痕を印したのであるが、私は少しも知らなかつた。

二 或る兵は朝呼び起されて始めて前夜睡眠中に足部に貫通銃創を受けて居たのに氣が著いた。此事實は上陸後、各種の輸送に従事し二晝夜に互つて連續活動をした後の出來事であつた。

ロ 知覺の鋭敏

空間知覺の鋭敏は距離の誤認となり、著しく近く誤るを常とする。苟くも射撃指揮に任ずる者は、先輩の苦き此經驗に注意を拂ひ此の如き誤を極減するに努めねばならぬ。

一 日清戦役に於て予は工兵小隊長として混成第十二旅團に屬して出征し旅順攻撃に参加したのであるが、明治二十七年十一月二十日翌日の總攻撃に關する命令を受け工兵小隊長を率ゐて旅團の右縦隊に屬した。翌日二龍山攻撃部隊に屬して前進したが、此時は予の初陣であり初めて敵弾の下に立つたのであるから、餘程平靜で居た積りであるが、決して其様には參らなかつたものと見える。其證據には攻撃間予の小隊も散兵線に加はつたが、敵線まで七百米位と考へ戦闘直後に出した戦闘報告にも其通り記したが、後に實測すると實際千二百米であつた。誠に汗顔の至りであつた。其後此事を友人に語つたが皆敵が近く見え過ぎたと云うて居る。(某中將)

二 日露戦役中遼陽の戦闘で夜間敵の砲彈が前方百米位にて曳火破裂し頗る危険を感じた、所が落付いて考へて見ると不思議なことには附近に少しも彈子の落下する模様がなく、信管や被筒の飛散する音も聞えないので、或は相當に遠いのではないかと感付き、時計を出して煙草の火を以て音響測量を行つた所、三秒内外もあるので、始めて千米も前方であると分つて安心したことがあつた。夜間殊に暗夜は破裂點を餘程近く感ずるものである。これは丁度夜の火事を近く感ずると同一理由である。(某少將)

三 一躍進毎に、無意識に照尺を百米宛下げた。然るに照尺が三百米で、敵との距離は六、七百米あつた。其差の大なるに驚いた。(某大佐)

ハ 錯 覺

之も知覺の一種であるが、戦場では錯覺は枚舉に遑あらざる程である。例へば

一 積雪中の大樹の切株を融雪後、人影と誤つたこと。

二 雪中の鳥群を散兵と誤つたこと。

三 鐵道線路の堤防を敵の工事と誤認して突撃したこと。

四 友軍の斥候が歸來せるを見て友軍の退却と考へ全部隊の混亂を來せしこと。



五 明治三十七年八月六日旅順總攻撃の準備中、斥候となり出かけたのは午後八時であつた。途中一軒家の内部を搜索してから出て來ると待つて居る筈の斥候が一人も居ない。之は大變と思つたが暗さは暗し方角も判らず駆歩も出來ないので拔足、差足と云ふ有様で土壁を廻り始めた。處が突然十米許り前に人影がある、暫らく敵か味方かと思つて居たが其中にてつきり敵の歩哨と思ひ込んで、一生懸命になり腹這ひで前進し、四、五米位の處から突然身を躍らして拳も通れと夢中に刺突した。所が異様な音がしたので始めて我に歸り熟視した所が、土人の放置せる等身大の味噌甕であつた。

ニ 錯 聽

之も錯覺と同性質のもので、所謂風聲鶴唳に驚く平維盛の富士川に潰走せるものが適例である。例 明治三十七年七月十八日長途の行軍後、老房山嶺現在の橋頭驛の東南方に達して小哨を配置した。中隊が飯盒炊事の實施中に、前方の歩哨が「敵襲、敵襲」と連呼して來た。そこで取り敢へず、炊事を中止して部署につかせた。其内に高粱畑の中を右往左往する者がある。之を見たり一兵は獨斷射撃をなすや、中隊は亂射に陥つた。翌日調べて見ると、それが支那の野飼の牛馬であつた。

筆者曰く、此種の失敗は其例に乏しからざるを遺憾とする。然し何とかして此危険を防止するに努めねばならぬ。多くは戰場に不慣れた臆病者に多い。補充兵などが初めて戰場に臨んだとき、就中、歩哨に立たされて淋しく恐ろしく感ずるとき疑心暗鬼の本能が發展するのである。故に幹部たる者は、其都度兵等に注意を喚起せしめて自己反省の餘裕を得しむる如く心懸くべきである。

ホ 記 憶

疲勞によつて記憶力は減退し、場合によつては消失せしむるに至るものである。然し又戰場に於ける事象の種類は比較的單純であるので、同一事象の反復出現が記憶を容易ならしむることもある。

一 明治三十七年六月三十日佐々木支隊に屬して北分水嶺の敵を攻撃する爲前進した時、敵は戦を交へずして退却した。此時に面白い話がある。恰も二十九日夜半から運動を起して五、六里も前進したが、終始雨であり加之前夜の睡眠不足もあり皆非常に疲勞した。敵兵が退却したので皆民家に入りて宿營し熟睡の後翌朝に至り中隊長以下同宿の將校四名は其日中隊が如何に行動すべきかを知らない。依て大隊本部に問合せさんと相談して居ると、從卒が「本日は前々日

の宿營地に歸還する様に命ぜられてあります」と言ふので、「誰が命令したか」と尋ねた所「昨夜部隊日直下士が大隊本部から命令を受けて來まして中隊長殿に御覽に入れ、中隊長殿は他の將校と御相談の上、出發時刻等を日直下士に命令されました。」と答へるのであつた。此明確なる始末を四名の將校が誰も記憶して居なかつたのである。其如何に疲勞して居たかと察せられる。要するに疲勞の極點に達するときは、精神も緩み、記憶力も失はれるものである。(某少將)外國の軍隊でも同様な事象がある。無論人間だから同じ様なことがあるのが當然であるが、左に米軍の實戰記を参考に紹介する。

二……大隊は疲勞の極に達し若し此の上、敵から襲撃されたら一たまりもなく全滅したであらう。九挺の機關銃は僅かに二挺丈けが役に立つ、然し銃手も彈丸もない、小銃の彈丸も盡きた、手榴彈もない、身を守る武器としては銃劍より外には何にもない。間もなく日は西山に沒した、寒氣と飢餓との一夜を迎へなくてはならぬ。生き残つた兵は今では、誰も救援隊のことなど考へない様になつて仕舞つた。實に十月三日の朝から、五日間食物を口にした者は一人も居らぬ。水を飲んだとは言ふもの、それは名ばかりで、量も少く質も不良であつた。

周圍から聞える重傷者の呻吟の聲は如何に剛毅な者でも胸を刺される如く、剝られる如くに感じられる。然るに、此時敵の攻撃は頓挫し敵の戦闘群は撤退し之に代つて我が僚友達が我等に向つて、斜面を登つて來るのが見える。昨夜まで敵が夜間前哨を出して居た所の斜面を友軍が敵を驅逐しつゝ前進して來るのである。

「我師團の主力と左翼の佛軍とは既に我が大隊の側方に進出した」との通報は、元來何よりもうれしき吉報でなければならぬ、死地より救出されたのであるから。然るに、大隊の兵等には何等の歡喜も喜色もない、全く無表情的態度を以て「最後の墓場」と覺悟をさめた掩體から這ひ出で、唯黙々として出來るだけの力で負傷者を勞はるべく、死傷者の間を往來して居た。(一九一八年十月アルゴンヌ森林に於ける敵圍の五晝夜ホルダーマン大尉手記)

～ 恐 怖

「戰爭に於ては總ての人が恐怖と云ふ共同の敵を有する、而して此恐怖に對抗するものは、各種の觀念、先天的の性質、感情及習慣であり、換言すれば長上に對する信賴、愛國心、團體心、軍紀等である。尙ほ其外に信仰、人種に特有の性質等も之に關係する。」とは佛國コレン大尉の戰爭進化論中、恐怖に就て述べある一句である。筆者をして更に添加せしむれば、恐怖を撃退する要素

中、「各自の責任」が重要な役割を占めると言ひ度い。下士官は兵より、又將校は下士官より勇敢にして率先するの概あることは各、其自己の持てる責任の輕重より來るものが少くない。但し之に例外のあるのは勿論である。

特別の人を除き戰場では時として恐怖に襲はれ、時として人に卓出せる勇氣を現はす、其場合によつて不同であるを常とする。又戦闘の初期に於て戰鬥員の心を支配する恐怖の原因は死に對する顧慮、心配のみが其全部ではない、多くは事實の不確實と未知の狀況に對する不安が即ち恐怖である。故に戦闘前若干時間を割きて兵等に事實の大要を豫告して置くことは大切な事である。

恐怖が一兵に止まるときは大害なきも、此の兵の恐怖が往々にして全隊の恐怖を誘起するに至ることが最も危険であり、其例も少くない。

一 明治三十七年九月二日夜の出來事である。遼陽會戰の初期に於ける首山堡東方陽寺附近の攻撃は從來順調に戦闘せる第五師團が初めて遭遇したる惡戰苦闘で、從來になき夥しき損害を受けた激戦であつた。九月二日首山堡一帶の敵陣地第一線は我が軍の手に歸し第四軍は右より第十、第五師團の順序を以て近く本陣地の敵と對峙した。此夜予が中隊は第二線となり遼陽南方東八里庄に位置し他の一中隊と共に圍壁を有する支那家屋の庭内に露營した。夕陽遙に高梁

の畑に没し秋氣徐ろに迫つて肌身寒く時計は將に十時を指さんとす、時に彼我の銃砲聲は既に止み士卒の耳語、足音も何時しか絶え疲れ果てたる兵等は張り詰めた氣も緩み今や假眠の境に入り四面澹暗寂として聲なし、唯だ聞くものは村遠く犬の長吠する聲と雲間に漏るゝ雁の聲、真に大風一過後の静けさであつた。此時突然闇を劈く奇怪の叫聲、ハツと思ふ間もなく、兵等は、スワ敵襲と喚き叫んで跳び上り寝ぼけ顔にて狂奔し手當り次第に銃を解き、中にも氣早の連中は壁を乗り越え躍り出すなど極度の寂莫は忽ち變じて極度の喧擾と化し、四百の兵等が狭き圍壁内で喧々囂々右往左往する有様は宛ら蜜蜂の巢を投げ付けた様である。幹部は叱咤怒號聲を囁らして鎮制に努むるも、あはてふためく彼等には馬耳東風、些しの効果もない。已むなく拔刀の非常手段に出で遂に一、二の犠牲者を出してやつと鎮壓した。然るに殆んど時を同うして第一線の一部にて射撃の音を聞いたが間もなく仕掛花火の如く全線に傳播し、猛射を續けること約一時間、其後自然に鎮靜した。直に其原因に就て調査したが所謂夢幻泡影遂に要領を得ず恰も狐狸に撮まれたる感がした。而かも此の現象は唯予等が宿營地に止らず、師團全體に互りて演出せられ、單に敵襲ありと稱して全然情況不明の裡に闇に鐵砲を盲射すること約一時間互り、尙ほ此狂態は右翼第十師團に波及し、同師團も約二十分殆んど無意味に亂射した。

當時敵襲があつたと稱するも二箇師團の全正面に互るが如き夜襲は稀有の大規模なる夜襲である。然るに軍中一人として敵襲の正體を見た者がないと云ふに至つては啞然たらざるを得ぬ。其真相は今日に至るも尙ほ不明で、戦史を繕ひても「午後十時半頃敵襲ありしもの如く」云々と記載せられあるに過ぎぬ。

筆者曰く此種の例も少くない。然し斯く大規模の亂射が長く繼續されたことは誠に遺憾であつて、幹部としての責任や軽くない。

ト 敵兵に對する同情

一 明治三十七年五月九連城の戦後歩兵第四聯隊附の將校が捕虜將校に砂糖水を與へた。彼れ感謝の餘り其軍刀を取りて之を贈つた。他の將校之を戒めて曰く、「刀は軍人の魂なり之を失ふは宜しくなし」と。昨日迄美食に飽きたる露軍將校も一戦敗れて今や砂糖水の惠與に感泣するに至つた。勝敗は兵家の常である吾人も亦此の如き境遇に陥ることがあるであらうと、同情禁ずる能はず、部下を諭して捕虜を輕侮することなき様戒めた。(某少佐)

二 同じく鴨綠江の戦鬪で捕虜將校に握手し禮を厚くした事實は前述した通りである。

チ 味方に對する同情

生死を共にしつつある戦友が互に現はす同情心は平時に於ては到底實驗し得ざる程濃厚である。指揮官たる者は此間の實情に通じ誠實に部下を愛する心を以て之を遇するに於て、其發揮する威力は超人的となり得る。統帥上最も緊要大切な事である。

例 明治三十七年六月鹽大澳附近上陸直後の頃なりしならん、露營地を發して約一里、この僅かな行軍里程に於て既に疲勞し將に落伍せんとした。上官は定めし意氣地なしと怒ると思ひの外、小隊長は優しい言葉で銃は俺が持つてやるぞ、最少し歩けば露營地につく、共に奮發して行かねばならぬ、氣付藥を服ましてやると手づから口の中に入れて呉れた。其藥は氷砂糖であつた。此情けある小隊長の心盡しに疲勞も靴傷も打忘れ「現役三ヶ年の在營中教へられた軍人精神を發揮するときに今來たのだ、斃れるまで堪へて進まねばならぬ。」此決心は遂に終日行軍に打勝つた。是れ即ち小隊長が部下に對する精神的感化の偉力である。(某歩兵上等兵日記)

リ 宗教心

宗教心を廣義に解釋すれば誰も之を持つて居る。故に戰場での宗教心は、より濃厚になる傾向がある。即ち從來多少なりとも宗教を事實に於て信仰した者は熱烈なる信者、寧ろ狂的信者になるものも少くない。又平素其の方面には極めて冷淡なる人々でも苦難に逢ひ、危険に直面する様

な場面に立つたとき多くの者は神佛に頼る心が出るものである。所謂苦しい時の神頼みである。或は「人事を盡して天命を待つ」ことも一種の宗教的觀念である。

一 明治三十七年八月二十一日午前四時三十分頃東盤龍山砲臺に向つて突進した、時に彈丸雨注、光彈續發、砲丸土を飛ばし進出瞬間にして死傷續出し南無阿彌陀佛の唱聲頻々として起り、我が進出と共に其所在を知らしむるの已むを得ざるに至つた(中略)。我北國人は宗教心厚く爲めに一方に於ては良き點あるも負傷の時に念佛、唱名は大なる不利を來した。(某中隊長)

二 明治三十八年奉天會戰の時、午洪屯の夜襲に失敗し敵前五、六百米の支那墓地に殘留して居た某中尉は、敵の猛烈なる射撃と動もすれば出撃し來らんとする模様なので、絶えず動搖せんとする殘存の部下十數名に對し、自己の重傷の苦痛を忍びながら、「人は死んでからは其生前の行によつて地獄か極樂かに行くものだ、極樂とは美しい蓮華の花が咲いて居て何の苦痛もない、實に楽しい所であるとの事だ。我々は護國の爲に死ぬのであるから聽ては皆極樂淨土に行ける事であらう。」と話して聞かせた。それから何れも安心立命して怖がらなくなつた。

筆者曰く、平素なら、小兒に言ひさかす夢の様な話を、死生存亡の際には特別の感じを以て聞くものである。つまり兵等が小兒になつて居るのである。又指揮官が死生の瀬戸際に於て沈著して

安心立命的示唆を與へたことも看逃がすべからざる偉力である。左に掲ぐるものは外國の例であるが、死に直面せる場合に於て宗教心が如何に發動するかの尊き犠牲心は必ずしも日本人の專賣でないのである。

三 英國の驅逐艦が遭難して、救世軍の一人の水兵ブランドンが波間に漂つて居た。その時僅に一人を支へ得る小なる材木が流れて來た。彼は之に頼りながら泳いで居た。其中に他の一人の水兵が同じ様な運命の下に波間に漂つて居るのを見た。そこで一の材木を二人で交互に利用して漂流して居た。其中に寒さと飢とで疲勞した。最早如何んともすることが出来なくなつた。

そこでブランドンは後から來た水兵に向つて「二人で此材木を利用して居たのでは逆も助かる見込はあるまい、此材木は君にやる、僕は救世軍だ、死んでも行く先が定つて居る、然し君には死後の行先がまだ定まつて居ないから、今死んでもこまるであらう、助かれるものなら助かつてくれ、そして上陸したら、早速「靈の救ひ」を求めて呉れ給へ、それでは左様なら。」と言ひながら其材木を彼の水兵の方に突放して其姿は波間に見えなくなつて仕舞つた。後に残つた水兵は、感謝の涙に咽びながら其材木に縋つて居る中に助けられて、軍港に著くや、直ちに救世軍を尋ね此次第を語りながら教を請うた。

四 斷片的實例の二

イ 迷 信

迷信に關する心理學的研究は之を略し、實際問題に就て若干の注意を述べる。

一概に迷信と云うて馬鹿にしてかかるのもあれば、一生懸命に其所謂迷信を確信尊崇して疑念を挿まぬもの等兩極端に走る人々も少くないが、現在に於て行はれつつある所謂迷信なるものは一朝にして之を無にすること恐らく絶對不可能であらう。故に其甚だしき愚昧にして危険なるもの、極めて有害なるものに就ては、それを除去し得る如く考察工風を廻らすことが必要である。然し又然らざるものを或る意味に於て之を利用することも武人として有益なることである。殊に戰場に於て群集心理上巧みに之を指導するときは、大に志氣を振起する原動力ともなるものである。以下實例によつて教訓を求めて見ようと思ふ。

一 師團は愈、八月二十六日未明を期して弓張嶺の敵陣地に向ひ夜襲を決行すると云ふ命令が下つた。(中略) 飯野少尉は中隊長始め小隊長三名の石碑の繪を描いて巫山戯てゐた。飯野君はかう云ふ事には至極無頓著で人生の最も嚴肅なるべき「死」と云ふものを取扱ふに非常に輕易な

考を以てする癖がある。鳳凰城滯陣の時分にも、手帳の端に「多門二郎之墓」と書いた墓標を描いて見せたから私は嫌な氣持がして「縁起でもないよして呉れ」と云つたら「さうですか、それじゃ書き直す」と云ひながら私の名前を消して其跡へ自分の名前を書き入れたことがあつた。今日も亦始めたなと思つたが、中隊長や村井君が平氣な顔で笑つて居るから、私も致し方なしに抗議を持ち出すことを止めた。しかし心の中では「これはひよつとしたら皆死んで了ふ前兆かも知れない」と思つて私かに御幣を昇いだ。(中略)

中隊長と村井中尉の遺骸は既に白骨と化し終つたけれども、飯野少尉の冷き骸は尙假に埋めた儘になつて居る。若しいつまでも放置して置いたならば、必ずや腐敗して仕舞ふから私として亡き战友の靈に對して相濟まん。せめては私の手で火葬してやつたら、飯野君の忠魂も浮べるであらうし又之が私の同君に對する最良の同向にもならうかと思つたから、背囊監視に残つて居た中隊の兵二人と支那人三名とを連れ九月二日の朝現場に出かけた。ささやかな土饅頭の上に小さな木で飯野少尉の四字が鉛筆で認めてある。之を見た時私は直ちに同君の墓標のいたづら書を想起した。

弓張嶺の夜襲の前日、同君が紙片に中隊幹部の墓標を描いて一々名前を書入れたのは「蟲が知

らせた」と云ふのであらうか私一人を残して其他は悉く亡き人の數に入つてしまつた。今其墓標の前に立つに及んで萬感胸に迫り涙は更に新たなるものがある。(多門少將著彈雨を潜りて)。

二 日露戦争の時、重燒麵麩(ジウセウパン)と云はずに「オモヤキパン」と云ひ重傷に似た讀み方を避けた。(某談話)

三 日露戦役旅順攻圍の際乃木軍司令官は一夜夢に其次男保典氏の來るを見らる。肩章も附けずボンヤリした風にて來りたるを以て、「今時分何しに來りたるか」と叱せられしに、忽ち見えすなりたり。後に思合はさるれば恰も其時刻に二百三高地に於て戦死を遂げられたるなりと云ふ(乃木隊長紀念録)

四 明治四十三年の夏予等夫妻は打連れて將軍邸(乃木邸)に拜趨した。(中略)話題は何時しか家庭の事に移りしに、静子夫人は遂に一言も御兩子の事に及ばれないから、失禮をも顧みず左の質問を發した。「元來婦人は涙脆く往々にして死兒の遺骸を數へらるる癖あるに、令夫人に於てのみ未だ嘗て此事なきは何故でありますか。」と。此時夫人は容を正し微笑を湛へつつ「能く尋ねて下さつた。實を申せば長男戦死の通知を受けた時は少々驚きましたが、次男の場合には、もう一週間も以前から承知してゐましたから、少しも驚きはしませんでした。」と。仍つて予は

其事由を詳細に拜聽せんことを懇請したるに、夫人は諄々として説かるる様、「實に忘れも致しませぬ明治三十七年十一月十七日の朝妾は家人に先だつて起床し二階の兩戸を開きました、偶、制服を著けたる一青年將校は門前の中央に立ち軍刀を杖にして妾を仰視し高聲を以て痛罵して申しますには、「乃木のノロマメ、何を間違付いて居るか、我々が兵隊を作つてやれば片端から殺してしまふ。然るに自分では武士であるとか侍だのと傲語する癖に今尙生存して居るではないか。若し眞の武士であるなら、我々に申譯の爲めに潔く切腹するが好い。若し亦腹を切るのが痛ければ辭職するが當然である。一體家族共も何を愚圖愚圖して居るかい、少しは考へて見るがよい。」と餘りに暴言にて聽く他人の手前も恥かしく、特に此事が軍服を著けた將校の口から出たかと思へば、乃木家の武運も最早之れまでであると思ひ、急に階下に降り自室に蟄居して、女中には病氣と稱して終日飲食せず日暮るるを待ちました。

午後六時頃に至り約三十年間使用した舊女中の一人が他に嫁ぎ近所に住する者があつたから、之を招き、態々臺所用の粗服に變じ侍女を伴うて三等切符を求め新橋驛から乗車して伊勢の山田に直行して、十八日未明目的地に著きましたが、人目を避くる爲、特に旅館に入らずして直に内宮に參拜して、身を淨むる爲裸體となり手洗の鉢水を頭から浴して其儘廟前に跪き一心に神

威を以て何卒旅順を陥落せしめて下さる様祈願しました。然るに其内恍惚たる心地と爲つたが恰も其時である涼しき御聲にて「汝の願望は叶へてやるが最愛の二子は取上げるぞ」と仰せられたが、御詞の終る交本氣に復したから「更に二子のみでなく夫婦の生命も差上げますから、何卒旅順だけは取らせて下さい。」と哀願しましたが、此時東天は白み身體には少し冷氣を感じたから、急に衣服を纏ひ復た人目に立たぬ様停車場に到り同じく三等切符で歸京しました。妻は妾の心願が神明に通じ畏くも天照皇太神宮が正しく御神託を授け給うたものと確信しました。斯くて十八日夜になつて自宅に著き始めて白粥一碗を戴きました。夫れ故、三十日の出来事（次男の戦死）は既に十八日朝から承知して居ました。（下略）

五 九月四日、五日の二晩續けて身内の者が死ぬ夢を見た。いくら擔がない者でもちつとは變だ何か悪いことがなければよいがと思つた。越えて十月四日起きていろ／＼と仕事をして居ると手紙を紐で束にしたのが二十ほど来る。其の内に弟の手紙を見ると「面白き事と面白からぬ事」とある、船で二晩續けて見た夢の事を考へて、ビクツとしてだん／＼読んで行くと、「父上は先月の五日に死去されし」とのこと。夢だとして馬鹿には出来ぬ。（某中尉日記）

以上述べた様な例を擧ぐれば世の中には澤山ある。之れが果して眞の迷信なりや、それとも自

然科學の力が未だ其の域に達せぬのであるかは斷定の限りでない。筆者も亦、或る程度の「擔ぎ屋」であるかも知れぬが、掲記した様な例は必ずしも全然迷信とのみ斷定し得ざるものであることを感ずるものである。筆者個人としても三、四、五の如き經驗を持つもので、今でも誠に不思議に思つて居ることがある。所謂蟲が知らせる事は屢あり、今日から考へればラヂオ的作用の一種とも思はれる。要するに、廣き意味に於ける迷信事情を一朝一夕に破らんとしても無駄であるばかりでなく、却て有害な結果を生ずることが多い。即ち之を嘲笑したり輕々に反駁したりすると却て相手の感情を害し益、固く之を信ずるの念を増大するものである。

要は吾人としては戰場に於て志氣を興奮振起せしめる様な迷信は之を助長し、之と反對に阻喪せしめる様な事項に關しては巧みに之を轉導する如くすることが必要である。例へば次の實例の如きである。

六 明治三十八年一月三十日師團長も自分も轉職したので此地下室で留送別の宴が開かれた。宴中俄か拵えの机上に屋根から土が落ちて來ると云ふ有様であつた。その中でも師團長の食器へ大きな土塊が落ち込んだ。其時旅團長がすかさず昔アレクサンドル大王が印度へ入つた時蹟さ倒れた場合に土に手をついた。大王はすかさず「此土地我が掌中に入る」と叫んだとの事であり

ますが、おめでたうございます。」と食器の土塊を祝福した。(某主計中將)

又日露戦役の事ではないが、フレデリック大王が初めて奥國征討に出發したとき、某寺の大釣鐘が鐵索切れて下に落ちた。兵士等以て不吉なりとして心地悪しく感じ御幣を擔いだ。大王は直ちに曰く、「鐘の落ちたるも勢力の大なるものが凋落するの兆である。即ち大奥國が普國の下に屈服するの前兆である。」と。衆皆な氣をよくして朗かに進んだ。

ロ 死生觀

「虎は死して皮を残し人は死して名を残す」是れ我が國古來武士道を重んずる者の精神の發表であらねばならぬ。

戦時に於ては次の如き機會に於て死生觀が更生せられ、確立せらるるものである。

イ 宣戦の詔勅を喚發せられたとき

ロ 自己の應召するとき

ハ 聯隊若は内地を出動するとき

ニ 初めて敵を見たとき

其他之に類する特異の事象に遭遇したときに於て死に對する安心立命の機を求め得るものであ

る。

一 明治三十七年六月十五日午前十時頃佐渡丸は沖の島附近を航行中、浦鹽艦隊に遭遇しリュウリックから水雷を受けた。(中略) 水雷の爆發と共に沈没せんと決心せし一刹那には何事も思はず、又悲しとも嬉しとも考へず、甚だ輕薄なるが如きも遺族の如何にも思ひ及ばず、唯我が運は茲に盡きぬ、致方なしと思ひしのみ。予は此の如く從容死に就くの境遇に出會せしは今回が初めてなり。予は多分斯の如き場合は「未練にはあらず」と萬々思へども實際に當り果して如何にや、實は自ら予を疑ひしなり。併し今回の實驗によるに死を決するは案外に容易のものにして已に決死したる上は案外に心の落著くものなるを知りぬ。

然るに已に危険の去りたる後に至り、予は大に臆病者となれり。「已に斯る危険を無事に經させしかば予が武運は未だ盡きざるべし。何とかして予のみならず、本船の生存者を助けたし。」と此苦心慘膽は實に從容死に就くよりも困難なりき。「死は易く生は難し」の意味を始めて了解せり。扱て我等が生存の途は爲し得る限り長く船を浮かし置くにあるも如何にして浸水を止むべきや技術に明かならざる我等には頗る當惑の事なり。(中略) 晩に至り風雨益々猛烈となり健全なる船舶さへ難波を免れざる程の天候となれり。(中略) 時已に十六日午前三時頃なりし、予は最早

船は必定顛覆を免れざるものと思惟し、約の如く其場所に來れり。下士等は已に其處に在りて我等を待てり。最早九死の中に一生を得るの望みなかりし。約の如く準備し、生を希望しつつありし。されど到底生還の豫想は覺束なかりし。併し一人として遺言をなす者もなく愚痴を云ふ者もなく唯「今回の戦争は豫ての計畫を實行し得ざるは遺憾なり」との話のみなりき。(佐藤中將著旅順を落すまで)

右の例と同心理であらうが、戰場で勇敢に否を寧ろ夢中になつて戦闘して居る場合、負傷すると急に恐怖に襲はれるものが少くないことに注意を要する。即ち受傷の瞬間には何等氣著かずに居り、急に血の進るのを見て負傷に氣がつくと非常に驚き之と同時に危険状態の中に曝されて居ることに氣が著き危険の度を過大視するの結果臆病になるものである。然し之と反對に血を見て更に勇氣百倍するもの多しことは、今次の事變戦闘に於て我が軍勇士に其例が澤山に傳へられて居る。要するに眞の勇者にあらざる者は平素の心懸けによつて其弱點を補ひ、修養によつて立派な態度が保たれねばならぬ。故に既往の實例は之を等閑視することなく採つて以て修養の資となすべきである。此斷片的實例の研究も之を求むれば限りなき程資料はあるが、此位に留めて置く。而して之を掲げた所以のものは、今次事變に出動せらるる青年將校諸君の爲現實に直に役立つたしめんとの微衷に外ならぬ。

第十七 對露戰例

敵を知り己を知るは、戰勝獲得上肝要なる條件である。然し其真相を捕捉し、彼我の力量を正しく認識することは決して容易の事ではない。今次事變でも、國民黨政權等は日本與みし易しと做して事端を自から爆發させたが、さてやつて見ると、事志と違ひ、到る處に慘敗を喫して居るではないか。是れ彼等として其敵を知らざるに原由する。又翻つて我が方を顧みると、支那軍をあれ程抵抗力を持つて居ると判断せず、之を馬鹿にして居た人々は、なかつたであらうか。若しありとしたならば危険なることである。須らく吾人の將來の敵の秤量を誤らざる様、大に心して研究を積まねばならぬ。

他國の戦力、戦法等を、單に其戦略、戦術上の範圍(即ち國力、經濟力等を除き)に於て研究するにも、唯現時に於ける典令範や、裝備、編制や乃至演習などのみを基準として検討しただけでは、勿論不完全で誤算に陥り易い。必ずや傳統的國民性の真相を究め、古今に互り史的研究を重ね、以て其通有的強味や、弱點に就て慎重なる調査を繼續することが必要である。

今試に之を對露戦法研究を主題として古今に互り若干の戦例を摘出して參考に資しようと思

ふ。先づフリードリヒ大王時代から紹介する。

第一 ツォルンドルフ附近の戦闘(第十九圖 參照)

一 前 言

フリードリヒ大王は西暦一七四〇年より一七六二年に互る二十三年の間に所謂

第一シユレジエン戦役(一七四〇—四二年)

第二シユレジエン戦役(一七四三—四五年)

第三シユレジエン戦役(七年戦一七五六—一七六二年)

の三戦役を起し、大小幾十戦を交へ、其戦闘に於ては寡兵能く衆敵を破り赫々たる戦績を挙げ以て後世に範を垂れたことは周知の事實である。

此ツォルンドルフ附近の戦闘は一七五八年即ち七年戦中に於ける普軍對露軍の大激戦で、露軍の執拗なる抵抗により流石の大王も大に手古摺つた惨戦である。

二 戦闘前の概況

大王は本戦闘の直前、ロスバツハに數倍優勢なる佛軍其他の連合軍を迎へて大打撃を與へ、次で軍を回へして再び優勢なる奥軍に致命的打撃をロイテンにて與へ、意氣揚々たるものがあつた

が、次でオルミュッツ要塞の攻圍戦に於て奥將の爲難弄さるゝ所となり、決戦の目的を達せず、在再日を空しくしつつある間に、優勢なる反普連合軍(奥、露、瑞典其他)は各所に進軍を始め、戰略的に普軍を包圍する形勢を誘致するに至つた。大王は此の眞面目なる情況に於て、依然從來の方針に基き内線の利を發揮すべく、敢て攻勢を以て敵を各個に撃破するに決し、先づ露軍に目標を選んだ。

露將フェルモルは當時四萬四千の兵を提げ、露北境より西進し伯林東北方約百軒に在るキユストリン(一般圖參照)の北方地區に停止し少數の守兵を有するキユストリン小要塞と相對し、爾後の情況推移を待ちつつあつた。

之に對し大王は北進を繼續し、一七五八年八月二十一日マンシユノウ(一般圖西南端)に於て北方より來會せるドーナ軍を合はせ兵力三萬六千に増加したが、尙ほ露軍に比し遙に劣勢であるにも拘はらず、前記露軍をオーデル河とワルテ河とによつて成形せる三角地帯内に壓迫殲滅せんことを企圖し、八月二十三日オーデル河を下流方面アルト・ギユステビーゼ附近で渡河して東岸に移つた。之に對し露將フェルモルは一般圖及戦闘圖に示しある如くミーツェル河の南方に北面して陣地を占領した。此陣地の正面はミーツェル河及沼澤地によりて其通過は殆んど不可能であ

り、西側面も斷崖の爲大部分通過至難であり、東側面にも湖沼連なり部隊の運動は大に制限せらるるを免れぬ。知らず大王は如何にして此の堅陣を陥れんとするか。

小評論 一體露軍が優勢を持ちつつも何故に蝸牛の様な態度を採つたかを考へて見るに、當時南方からは、數に於て優勢なる埃軍が北進することになつて居り、瑞典軍は北方から協力する筈であり、別に帝國軍と稱する各小邦共同負擔の兵團も西方より攻め寄せざる約束であつた。然るに何れも大王軍に直接觸れることを恐れ敢て率先して進まない。そこで露軍も、獨りて深く進むを避け、一時堅固なる穴の中の様な地點を選んで日和見の態度に出たのである。元來露軍の通有性として積極意思に乏しいから、益々以て消極に流れたと見得るであらう。

由來連合軍は頼むべからざるものであり、他人には火中の栗を拾はしめんとし自からは危険に遠ざからんとする心理から來るのである。従つて其兵力が縦ひ優勢でも、此弱點を看破して巧みに之に乗ずれば各個撃破の好機を掴み得るものである。フリードリヒ大王戰役、奈翁戰役等に於て此の種實例を多く研究することが出来る。

四 戰鬪の情況

大王は實に痛快なる而かも冒險極まる攻撃計畫を決行した。即ち徹底的に敵の右側背に向ひ大々的迂回を試みるの決心である。恰も是れ虎穴に入つて虎兒を獲るに等しい。大王は即ち其軍を先づ二縱隊となし其一縱隊はノイダムメル・ミューレ(戰鬪圖其北端)附近でミーツェル河を渡り、他の縱隊は其東北方ケルステンブリュツゲにて同河を越え、バツロウ(ノイダムメル・ミューレ東南五軒)、ウイルケルスドルフ(バツロウ西南四軒)を経て其西方ツォルドルフに向ひ、全然敵の背後に進出すべく急進した。此の思ひ切つた迂回運動は恰も義經の鴨越に於けるが如く冒險な行動であつたが、故障なく遂行せられ、其縱隊の先頭がツァーベルンゲルンド(露軍の西翼に沿うて南北に通ずる斷崖地)の線に達するや、一齊に右に旋回して露軍の背面に展開した。

此の豫期せざる行動に露軍が驚いたのも無理はない。然し逃げるにも逃げられず、全く囊の鼠となつたのであるから、窮鼠遂に猫を噛むの擧に出づるか、或は其儘失神して兩手を擧げるかの二途たるのみである。露將フェルモルは其前者の決心に出でた。乃ち急遽其陣地線に廻れ右を命じ、從來の第二線を第一線となし、後方に位置した騎兵や行李などを第一線と第二線との中間に配置し、今や到底免る能はざる一戰を交ゆるに決した。斯くて露軍は自から背水の陣を布くの餘儀なきに至つたので、其抵抗力も増大せらるべきは判斷し得る所である。

是に於て大王は概ね次の部署を以て攻撃を敢行することとなつた。

判 決

ガルゲンダグランドによりて分離せられある露軍を先づ其西翼に重點を指向して一舉に之を壓倒した後其中央及左翼を西方から逐次に崩壊せしむるを要す

部署の概要

- 一 マントイフェルの指揮する歩兵八大隊(舊前衛)を第一線として露軍右翼に向ひ攻撃せしむ
- 二 カニツツの指揮する部隊は第一線に歩兵九大隊、第二線に歩兵六大隊を排列しマントイフェル隊に重疊して三百歩の距離に在つて前進し、ツアーベルンダグランドとガルゲンダグランドとの中間地區から攻撃せしむ
- 三 ドーナの指揮する部隊は第一線に歩兵十一大隊、第二線に歩兵四大隊を排列しガルゲンダグランド東側に位置し先づ露軍の中央以東に對して軍の右側掩護に任せしむ
- 四 ザイドリツツは騎兵三十六中隊を以て最左側より敵の右側を攻撃せしむ
- 五 ショルレーメルは騎兵二十七中隊を率ゐて敵の左翼を攻撃せしむ
- 六 マルシャルは騎兵二十中隊を以て豫備となり左翼後に續行せしむ

小評論 大王が一瞬の視察を以て此壯圖を決行したことは凡將の敢てし得ざる所で、實に放膽なる戦闘行動である。小部隊ならば兎も角、數萬の大兵力を擧げて、通過容易ならざる地區を敵に側面を暴露しつつ迂回する如きは、須らく決斷力の強きものでなければ出来ぬ事であり、又恐る恐るやつたのでは、途中の一障礙に遭遇しても忽ち決心が鈍るものである。大王は其初陣には敵を正面から攻撃して平凡なる結果に終つたが、爾後戦闘を経る毎に新機軸を廻らし、側面攻撃乃至迂回を試み、殊に迅速果敢なる行動によつて敵を制した。此ツオルンドルフに至りては全然背面に進出するの動作に出で、敵膽を寒からしめたのである。其新機軸を案出して巧みに、果敢に之を決行する」と云ふ點に就ては、今日も其精神に於て大に學ばねばならぬ。

而して全然囊中の鼠として逃げ場を失はしめられたる敵は、前述の如く、絶對絶命の境地に立ち直に降服するか或は決然奮闘の舉に出づるであらう。而して後者に出でられたる場合敵を殲滅せんが爲には自軍は多大の損害を蒙ることを覺悟せねばならぬ。此の利害に就ては後述するが、一應腦裡に考へ置くべきことである。

戦闘初期(午前の情況)(戦闘圖其一参照) 愈々戦闘開始の幕は普戦の砲六十門によつて切り落

された。此砲兵の目標は主として露軍の右翼である。爲めに該部分は相當の損害を蒙り約二時間の砲戦の後、普軍は機方に熟せりと做し、マントイフェルは攻撃前進を始めた。歩武堂々として前進又前進咄嗟の間に敵第一線の前方四十歩の距離に迫り、次で突撃の機を窺ひつつある。然るに露軍も、活くるの途は突進するの一法あるのみ、マントイフェル隊に比して遙に優勢なる兵力が直に使用し得る態勢に在るので、其の優勢を頼み銃槍突撃を以て逆襲に轉じたのは天晴れである。忽ち猛烈なる白兵戦が展開され、兩軍入り亂れて奮闘した。然しマントイフェルは歩兵八大隊、露軍は十六大隊であつた、苦戦の下に能く奮闘を続けつつも危機は益々マントイフェル隊に迫つた。

是より先普の右翼隊は露の左翼部隊から包圍せらるるを避けんが爲めに、右斜めに行進方向を採つた。又左翼隊はマントイフェル隊に重疊して前進する筈であつたが、右翼隊が東北方に移るに連れて、左翼隊も之に連繫して右斜めに進んだ。之が爲ガルゲングランドの東側スタインブツシュを通過しマントイフェル隊と併列するの位置に進出し、露軍の中央二十四大隊の兵力と對抗し、之亦苦戦の状態に在つた。恰も此の際露軍の左翼は其歩兵十四大隊を以て普の左翼隊即ちカニツツ隊の右側を攻撃すべく出動した。同隊の危機は愈々加はつた。然るに普の右翼隊（ドーナ

隊) 及砲兵は適時之を阻止し得たので、カニツツ隊の包圍せらるる危機は除去された。然し此間普のマントイフェル隊は長く優勢なる敵の逆襲に堪ゆるを得ず、兩翼を包圍せられて潰亂して大損害を蒙り、爾後の使用を許さぬ程の打撃を受けた。普軍全線の危機は漸く眞面目を加へつつある。此の秋に方り最左翼に位置せるザイドリツツ騎兵團は敢然として出動した。通過至難なるツアーベルグランドを二箇所より通過し、今や意氣揚々として追撃中に在る露軍の右翼に向ひ襲撃を敢行した。恰も同時、豫備に在つた騎兵二十中隊も亦ザイドリツツに協力して正面から露軍に突入した。露軍は頑強に抵抗を試み、猛烈なる接戦が惹起せられたるも、力遂に及ばず北方クワルチエン方向に敗走した。

ザイドリツツ騎兵團は更に殘餘の露軍を側面より攻撃せんことを企圖した。然るに此の時普の左翼隊(カニツツ隊)は優勢なる露軍の壓迫に力支へず舊位置に撃退せられた後であつた。故に該方面の露軍はガルゲングランドの各渡過點を占領するの餘裕を得、ザイドリツツの側面攻撃をして不成功に終らしめた。第一回の激戦は之れで一段落となり、一時戦闘は中止となつた。然し全般の成績から判決を與ふれば軍扇は寧ろ露軍に擧げらるべきであらう。

小評論 此戦闘の經過に依つても露軍が其正面戦闘に於て極めて靱強なる力を發揮するを證す

るに足りる。由來正面の攻撃が困難であることは古來より然りであるが、殊に露軍が側面に弱く正面防禦に偉大なる力を發揮し、常に逆襲を以て部分的成功を收むるを例として居る。大王の攻撃方向の選定を背面よりすべきか、或は右翼に重點を置き敵の左翼方面に斜交的に攻撃するを有利とせずや兵家の論ずる所であるが、假りに此攻撃法を採るとして考察すれば、其敗因の一つに「左翼隊の行動が大王の部署せる意圖に反し斜行進をなして敵の中堅に衝突し、マントイフェル隊の危急を救ふ能はざりしのみならず、自己も亦敗退の已むなきに至つたこと」を加ふることが出来よう。蓋し當時の戦法から觀察せば、縦長配備を以て、マントイフェル隊を直接増強、支援して露の右翼部隊の逆襲を撃退するに努むべきであつた。然して敵が中央以東から出撃するに際しては、右翼隊は右翼後に梯置せる配置に在つて其包圍を阻止し、此間、普の左翼方面から逐次東方に向つて露軍を薙ぎ倒すべきであつた。此普軍の失敗多き中に在つて獨り其光輝を放つたものはザイドリッツ及マルシヤルの騎兵團である。彼等の襲撃は軍全般の危機を救ひ恢復攻撃の餘裕を與へ、其勳績は正に拔群であつた。騎兵は率ゆるに其人を以てせば、實に偉大なる働きを爲すと同時に、庸將之を指揮する場合殆んど何等の活動をなし能はざる兵種であつた。今日の騎兵は其裝備、編制、任務等が

當時の夫れと大なる差異があるものもあるけれども、尙ほ且つ騎兵の精神には變りはない。戦闘中期(午後の情況(戦闘圖其二参照)) 大王は其豫期に反した不利なる戦況に一時は驚いたであらう。然し不屈なる彼は此の頽勢を挽回すべく斷乎として決心を固めた。先づ諸隊をツォルンドルフ附近に集合せしめた。然しマントイフェル隊(八大隊)は前述の如く潰亂して爾後の使用を許さぬ。依て大王は咄嗟の間に決心を定め、敵の左翼に向ひ攻撃する如く部署を改めた。

- 一 右翼隊(長ドーナ、歩兵十五大隊)はランゲングルドに沿ひ前進し敵の左翼を攻撃す
- 二 ショルレーメル騎兵團は右翼隊の攻撃を援助す
- 三 右の兩隊は敵を撃退したる後左旋回を行ひ敵の中央部隊を攻撃す
- 四 左翼隊(長カニッツ、歩兵十五大隊)は右翼隊の左側に連繫し南方より敵を攻撃す
- 五 ザイドリッツ騎兵團は最左翼に在つて主力の攻撃に協力す
- 六 砲兵は主力を以て直に露軍の左翼方面を砲撃す

是に於て二十七門の普軍砲兵は露軍左翼に向ひ砲撃を開始し、此間右翼隊は半ば右前方ランゲングルドに近接した頃、露軍も亦デミク騎兵團を以て逆襲に轉じ、普軍の右翼に在る砲兵及歩兵に向ひ襲撃を遂行した。此の露軍騎兵の勇敢なる行動は相當に効果を擧げ、普の砲兵の一部は

奪取せられ、歩兵一大隊は潰亂せしめられ、他の諸大隊も動搖の色が見えた。然し幸にして普軍歩兵の必死の射撃に依り其前進を阻止し、次でシヨルレーメルの騎兵團は之を北方チツヘル以北に撃退した。

又普軍左翼方面は前記露軍騎兵の襲撃は蒙らなかつたが、第一次の攻撃失敗の結果志氣揚らず、爲に攻撃を強行するの氣力を缺き、其大部は露軍の眞面目なる攻撃を受くる前に、既に其位置をすら保つを得ず辛うじてウイルケルスドルフに停止するを得た位であつた。

此普軍全般の形勢が再び危殆に瀕せる秋に方り、普軍中に尙ほ其人があつた。ザイドリッツ騎兵團長の再起である。彼は此のみじめな友軍の有様を観るや、決意其の恢復攻撃を敢行するの勇舉に出でた。號令一下其の五十六中隊の騎兵團はスタインブツシュの西方から露軍の猛火を冒して突進し、暴虎の如く其の大衆の群内に爆到した。之に力を得た右翼隊長ドーナは、機に乗じて之に協力し遂に露軍をホーヘブルツフ及西北方クワルチエン方向に撃退した。斯くしてザイドリッツの勇戦は普軍を再び其累卵の危機から免れしめた。

戦闘中期は之を以て一段落を告げ、普軍は最初の敗色から脱出して纔かに勝利の名乗りを揚げ得た。然し頑強なる露軍は尙ほ對岸の高地に停止して戦力の整備に努めつつある如くに見えた。

小評論

第一次の敗戦にも拘はらず戦場の後端に普軍が集結し得たことは、其統帥力、訓練の至れるを證するものであるが、又一面に於て露軍が其戦果を極力擴張すべく萬難を排して追撃を敢行しなかつたことも普軍に幸した。然し又露軍としても慘烈なる戦闘によつて既に追撃の餘力を喪失したとも謂へ様が、要するに露軍は能く局部的逆襲を實行し部分的成功を収めるを得意とするに拘はらず、之を徹底的に實施することは彼の不得手であり、多くの場合百俛の功を一簣に虧いで居ることは、古今戦史の示す所である。

第二次の戦闘に就ては、一旦敗戦せる普軍が數時間を経ぬ内に再び攻撃を興した點に就て大王の決意の牢固たる點には争ふ餘地はない。庸將の企及し能はざる所である。然しマントイフエル隊は全然使用の見込なく左翼隊も精神的に力を失ひ、僅かに右翼隊と砲兵團の力によつて戦勝に導き得た跡を顧みると、普軍としては實に危機一髪の間有利に展開し得たものであつて、戦闘の勝敗は往々にして紙一枚の差を以て分るものあることを覺悟し、最後の五分間を頑張るの耐忍と勇氣とが必要であることを銘肝すべきである。

戦闘終期(夜間より其後に互る情況)(戦闘圖共三参照)第一次は露軍の勝、第二次は普軍の勝、第三次は愈々決勝の幕に入る譯であるが、兩軍共に損害は極めて多大、疲勞は甚しい。而かも日

は將に西山に沒せんとし暮色漸く濃からんとする。露軍はガルゲングランド西岸高地の陣地にかじりついて固守せんとする消極意思であるが、大王は尙ほ夜に入り第三次の攻撃を再興せんことを企圖した。其攻撃の部署は大要次の通りである。

一 フォルカーデの指揮する部隊(尙ほ戦闘に堪ゆる歩兵十八大隊)を以てガルゲングランドを越えて正面から攻撃せしむ

二 カニッツは其所屬諸大隊を以て露軍の右側に向ひ攻撃せしむ

然るに、午前の戦闘以來大打撃を受けたるカニッツは、最早攻撃續行の不可能なることを大王に上申した。實になさげなき具申ではあるが、流石の大王も其實情を察し前決心を翻へして眞面目なる攻撃を斷念し夜に入つて其軍を要圖の如くクアルチェンの東方から、ウイルケルスドルフに互る間に後退し警戒を嚴にして夜を徹せしめた。

小評論 午前午後互る激戦の直後に於ても尙ほ且つ攻撃續行の決意を以て部隊を部署したる大王の不撓の精神は、圖上戦術に於てのみ容易に行はるるものであり、實戦に於ては極めて至難である。此の決意旺盛なる意氣に就ては敬服に値する。

然るにカニッツ左翼隊長から、攻撃續行の不可能なるを具申して來たことは、卓抜ならざる

將帥に於ては有り勝ちの事實である。又常識で考察しても其隊兵の現状を目撃したものは、恐らく同様の悲觀的感情を禁じ得ぬであらう。然し吾人は其慘狀の如何に拘はらず尙ほ且つ任務の命ずる所に従つて部下を振起せしむるの術を心得ねばならぬ。今度の支那事變に於ても、中隊の幹部全員を失ひ、下士官又は甚しきは上等兵が一時中隊の殘員を指揮して戦闘を勇敢に續けた例を聞くことは、實に頼母敷き次第である。

不屈不撓なる大王が其軟弱悲觀的具申を容れて一時攻撃を中止したことは、概念的に考ふるとき、將帥として其既定的意思を翻したもので、何等信念なくして命令したかの如くに見えらる。吾人は能く部下の實情を察し以て適應の決心處置を定め、而して之を直後に變更する如きは避けねばならぬ。が然し大王の決心變更の裏には、又教訓とすべき一事が潜在するを看逃してはならぬ。攻撃敢行とか、夜襲の實施とか、部下に積極的行動を要求する場合に於て、部下將兵が戦勝に疑念を挿み又は實行可能なりやの信念を缺く場合には、縦ひ之を強行せしめても奏功せざるを常とする。故にカニッツの悲觀的意見を排して直に實行せしめた所で、決して成果を擧げ得ざるのみならず、或は却て不測の變を起さぬとも限らぬ。故に之を實行せしむるとしても、若干時の餘裕を與へ、あらゆる方法手段を以て自發的に「敢行の意思」

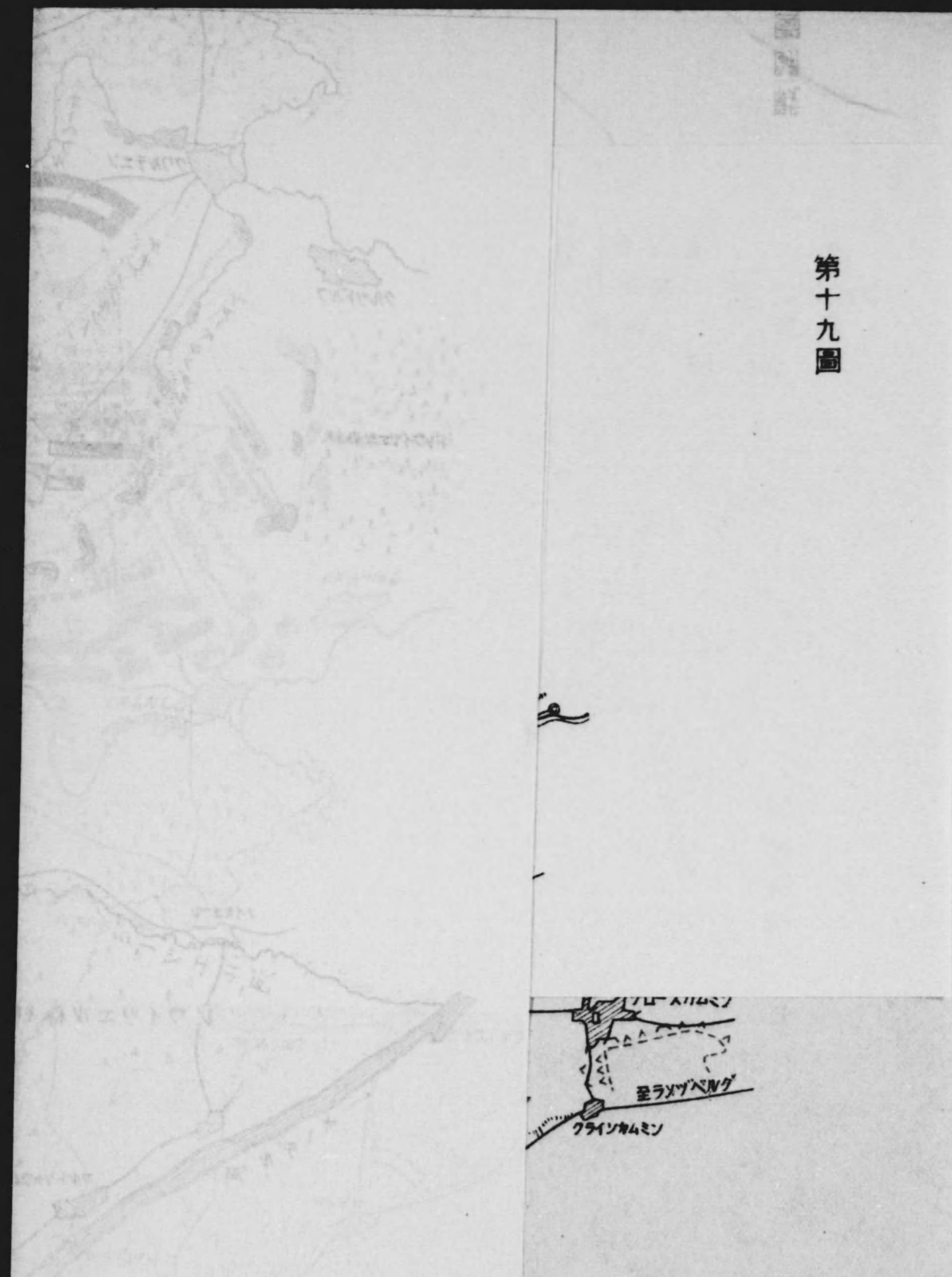
を持たしめたる後でなければならぬ。

却説翌二十六日露將フェルモルは軍使をドーナの許に派遣し、戦死者收容の爲休戦を提議した。是れは能く行はるる一種の欺騙手段であるかも知れぬ。ドーナが之を承知しなかつたのは至當である。

露軍の損害は極めて多く、過半の損傷を受けた。而して自己の背後に通過至難なる地隙があり南方十數軒のキュストリン要塞は普軍が之に據つて居る、然らば、全然囊の鼠同様の窮境に陥つたものである。従つて形の上から觀れば、大王の殲滅戦指導は今一步を以て其目的を完全に達成し得ること確實であると誰でも言ふであらう。況んや當時に於ける實兵力は彼我顛倒して、露軍は一萬九千に激減し、普軍は尙ほ二萬三千の兵力を擁して居たのであるから、更に一打撃を加ふるの勇氣があつたならば、模範的殲滅戦の完成を期し得た譯である。

然るに意外にも、事實は之に反し普軍の疲勞は甚大、志氣も亦振はず、攻撃續行の氣力が喪失し、彈藥も亦將に盡きんとする状態であつた。是に於て結果は囊中の露軍に對し一條の退路を與へんが爲、自軍をランゲングルドの後方チッヘル線に後退せしめた。囊中の鼠は其與へられたる逃路によつて二十七日朝其陣地を撤しツオルンドルフ及ウイルクエルスドルフの南方を迂回し

第十九圖



説明

- | | |
|-----------------|-------------------|
| 普軍 | 露軍 |
| ■ 夜、位置 | ■ 夜、位置 |
| 八月二十五日及二十六日、位置 | ▨ 八月二十五日及二十六日、位置 |
| 八月二十七日乃至三十一日、位置 | → 八月二十六日及二十七日、移動 |
| | □ 八月二十七日乃至三十一日、位置 |

ツオルドルフ附近、戦闘

於一七五八年八月二十五日

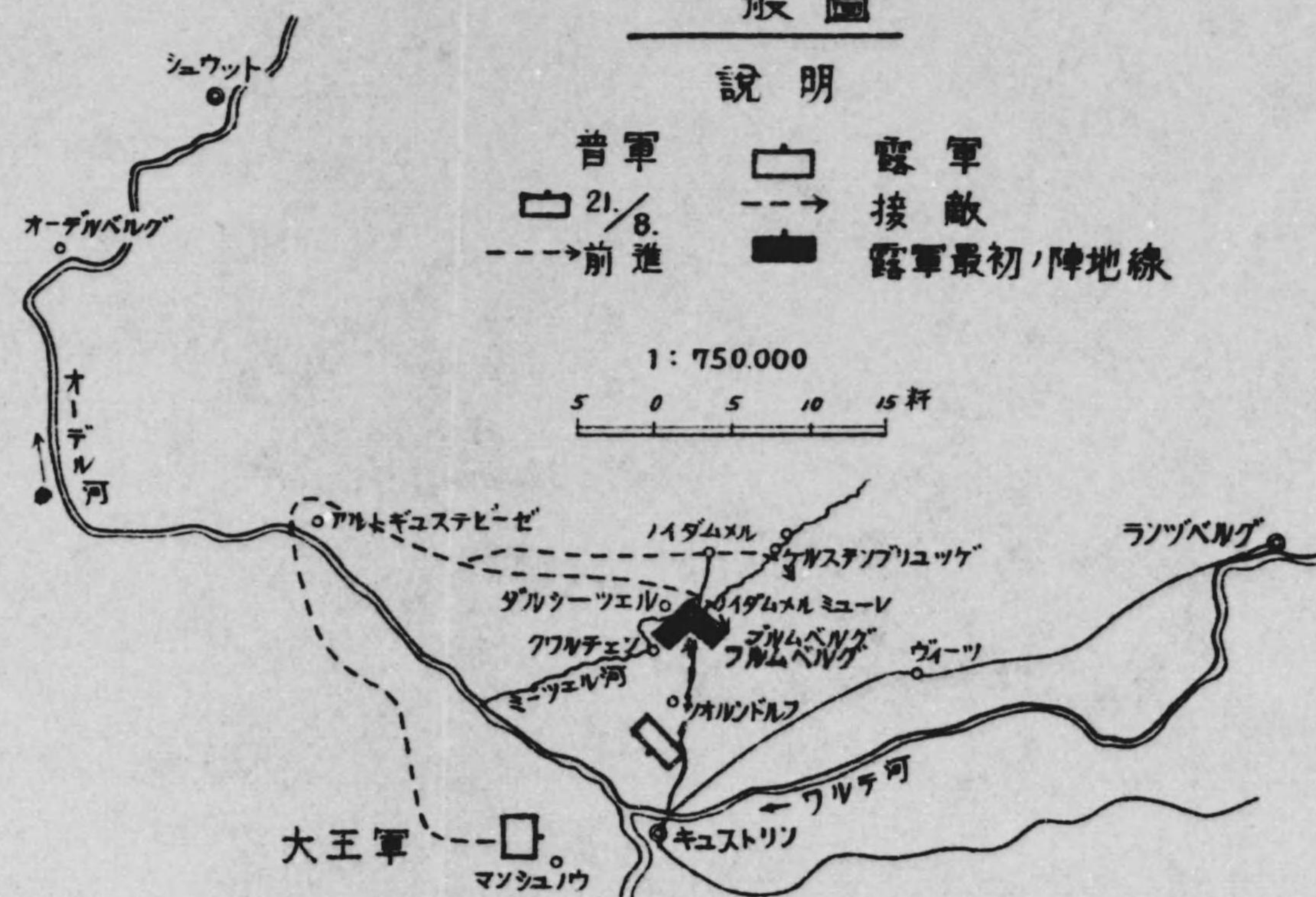
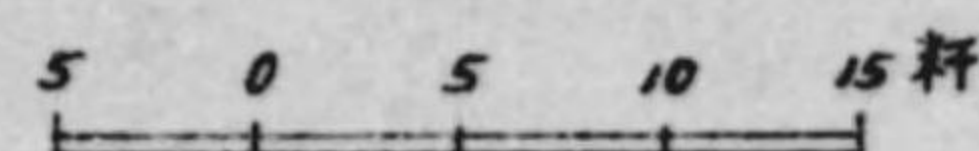
第十九圖

一般圖

説明

- | | |
|----------|-----------|
| ○ 普軍 | □ 露軍 |
| □ 21. 8. | ---> 接敵 |
| ---> 前進 | ■ 露軍最初陣地線 |

1: 750,000

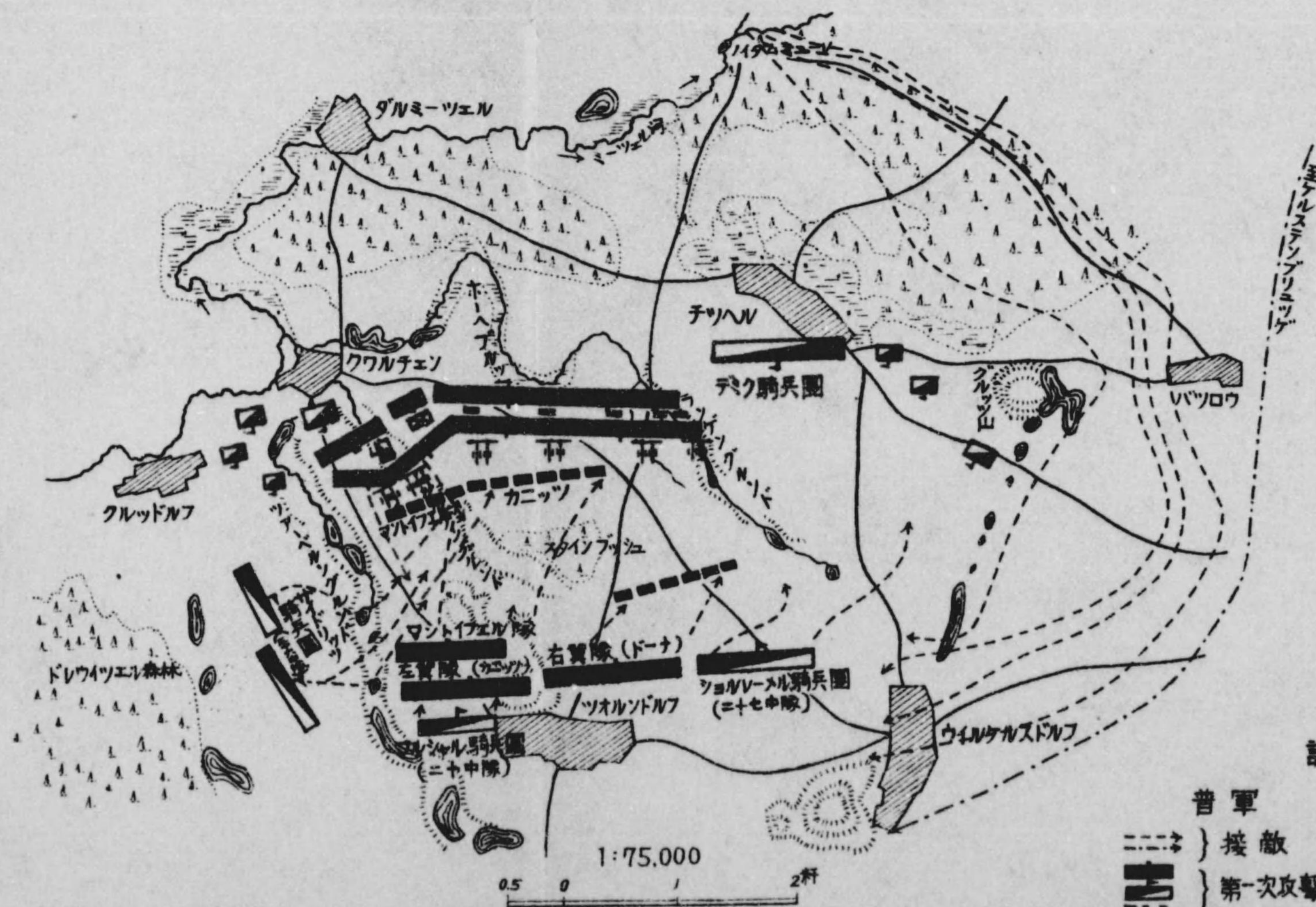
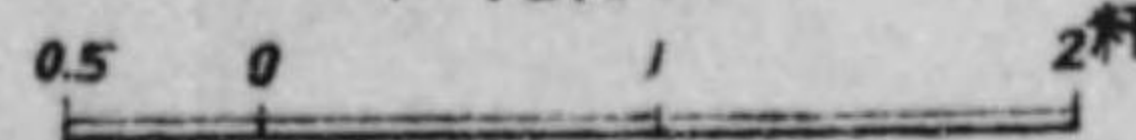


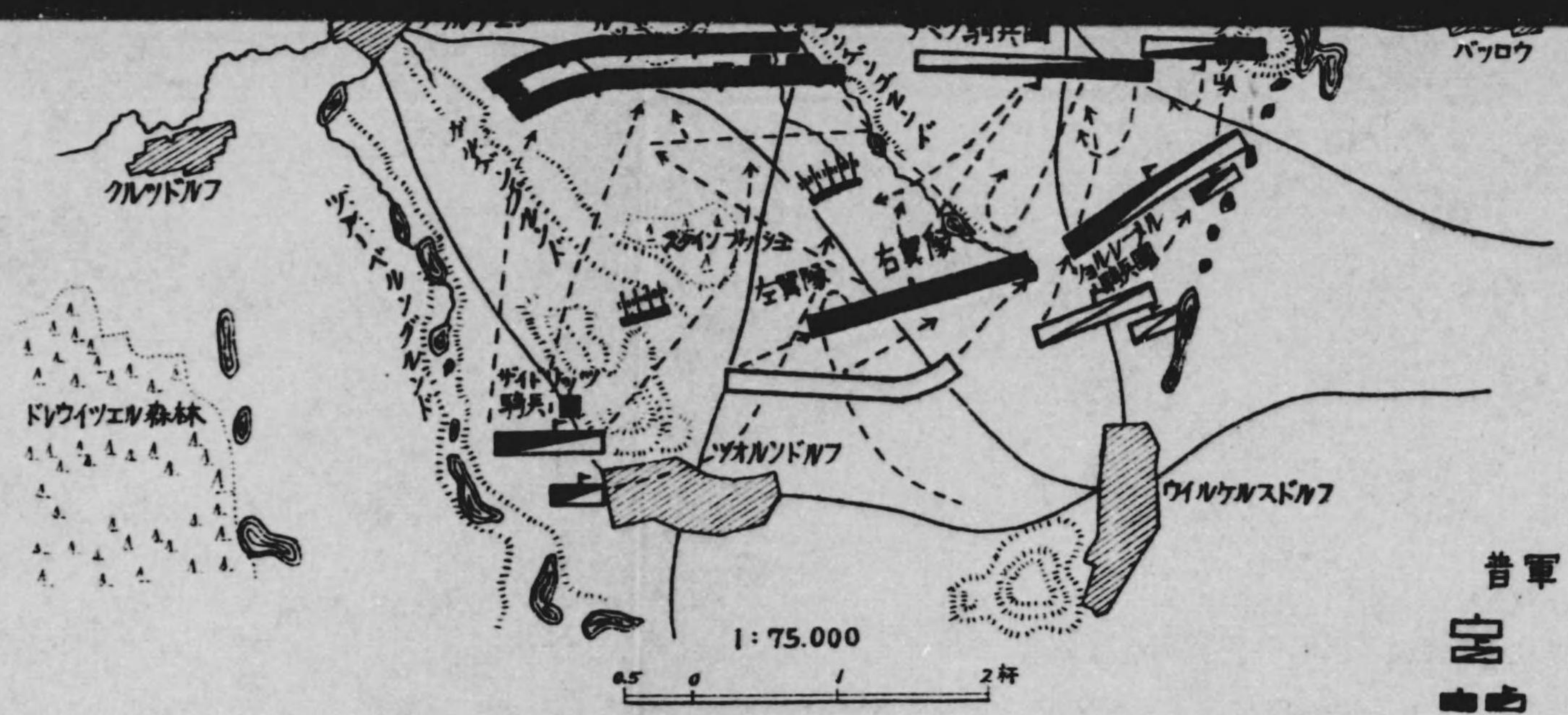
戦闘圖 其一

説明

- | | |
|-----------|-----------|
| ○ 普軍 | □ 露軍 |
| ---> } 接敵 | ■ } 午前陣地 |
| ■ } 第一次攻撃 | ---> } 進襲 |

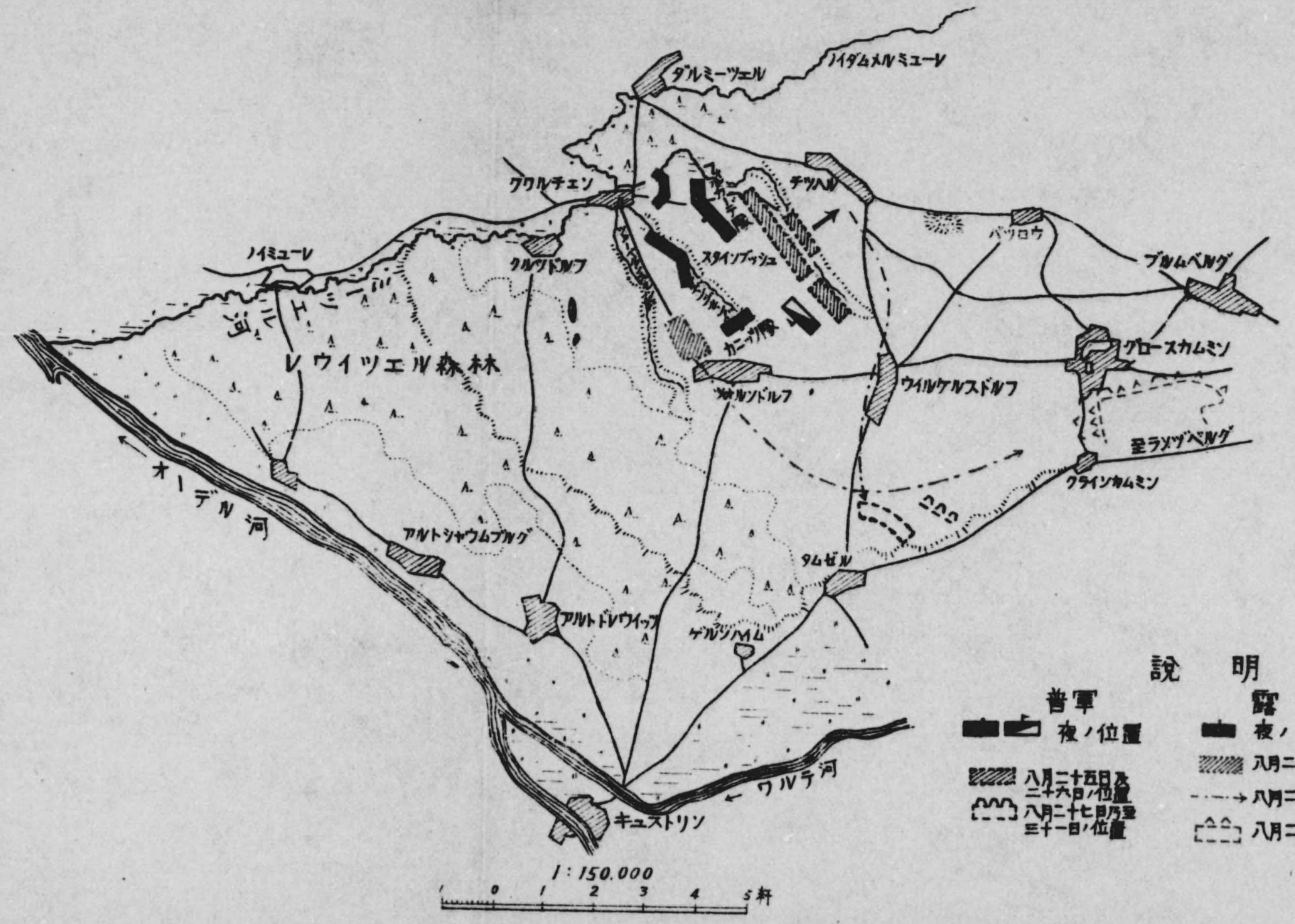
1: 75,000





説明

- | | |
|----|----|
| 普軍 | 露軍 |
| ■ | ■ |
| ■ | ■ |
| → | → |
- 第二次攻撃
第二次攻撃
第二次攻撃
第二次攻撃



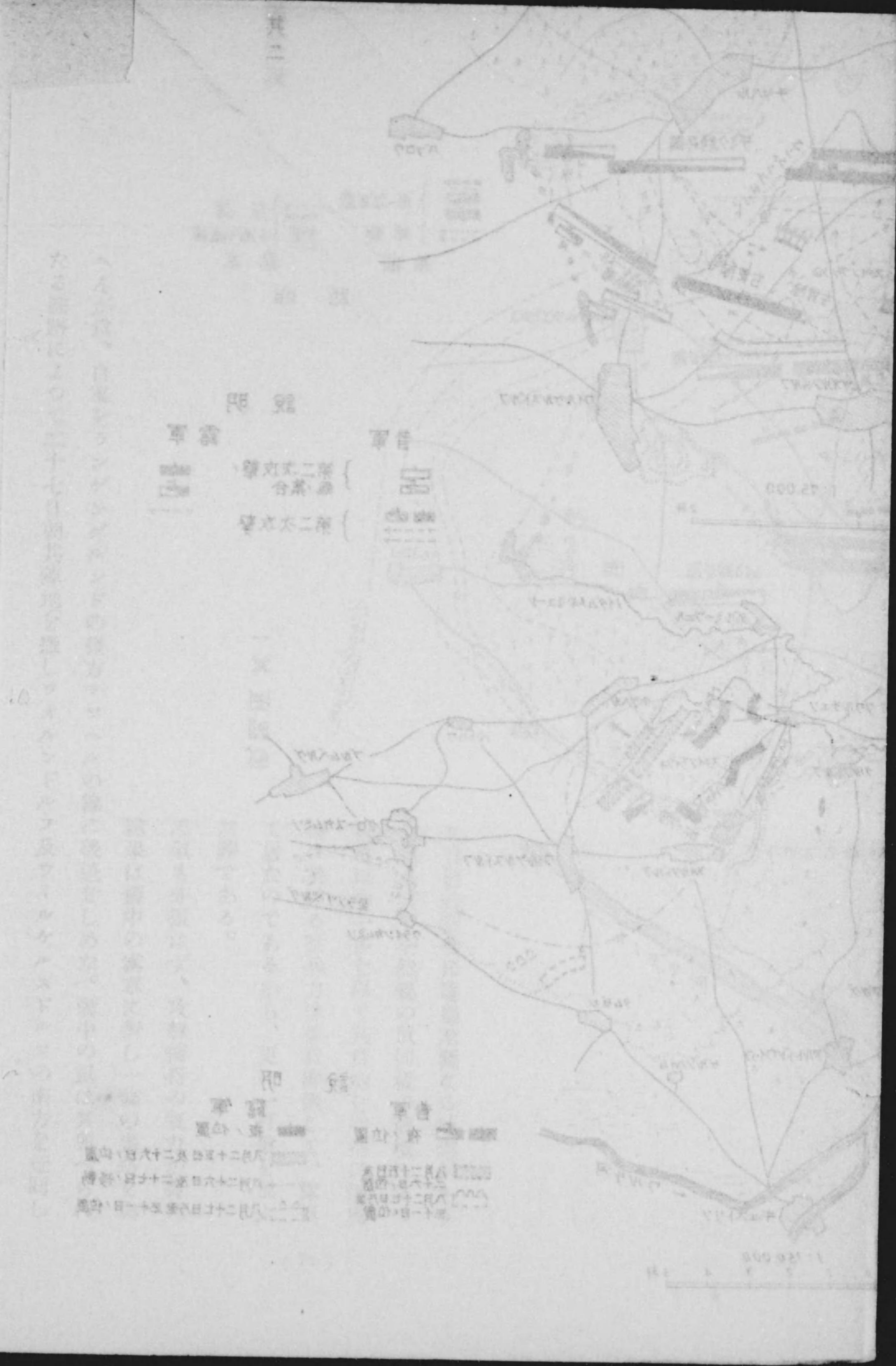
説明

- | | |
|----|----|
| 普軍 | 露軍 |
| ■ | ■ |
| ■ | ■ |
| → | → |
| → | → |
- 夜、位置
夜、位置
八月二十五日及二十六日、位置
八月二十六日及二十七日、移動
八月二十七日乃至三十一日、位置
八月二十五日及二十六日、位置
八月二十六日及二十七日、移動
八月二十七日乃至三十一日、位置

クラインカムミン附近に退却し茲に一時停止した。之に對し大王はタムゼル附近に追尾し敵と近く對峙すること數日に及んだ。然るに八月三十一日に至りフェルモルは更に東方に向ひ退却を開始し次で露女皇エリサベートの命に接し自國內に軍を回へした。

小評論 大王が殲滅戰遂行の一步手前で消極的態度をとり、可惜囊中の鼠を逸したることは、問題の種となり、後世評論家の甲論乙駁する所である。筆者は簡單に次の教訓を以て戒とするに止める。原則としては、勿論萬難を排して目的遂行に努力せねばならぬ、大王と雖之を熟知して居るにも拘はらず、之を敢行し得なかつたことを考ふるとき、殲滅戰の遂行が、非常に困難であることを裏書するものである。當時大王としては自軍の攻撃能力が喪失したとばかりでなく、若し強ひて打撃を加ふるとしても窮鼠的反撃を顧慮するとき更に多大の損害を賭せなければならぬ。然るに大王に對する他の敵は尙ほ優勢を擁して各方面に健在して居る、故に單に露軍のみの爲めに自軍を消耗し盡すべきでないと言ふ様な複雑なる諸因を考慮した結果で其苦衷を大に察せねばならぬ。

一般評論は次の大王戰例を研究してから述べるが、此戰例で露軍の粘り強い點、積極的意思に乏しい點等に就て一應の認識を得られたい。



第二 クーネルスドルフ附近の戦闘 (第二十圖)

一 戦闘前の概況

大王は、既述の如くツオルンドルフの戦闘に於て辛うじて戦場の勝者とはなつたが、激戦の結果多大の損害を蒙り、之が補充も容易でない。而も、四周の敵は依然として優勢であり樂觀を許さざる情況に在る。併し大王は飽くまで攻勢を以て敵を各個に撃破するの方針を忘れず、同年即ち一七五八年十月優勢なる奥軍をホツホキルヒ附近に攻撃すべく準備中、餘りに不利なる地形に深入したので、奥將ダウンも其優勢を恃みて攻勢に轉じ大王をして不覺の敗戦を交へしめた。爲に大王は更に著しく兵力を消耗したのみならず、反普連合軍の志氣を振起せしめ、一旦引込んだ露軍も新にゾルテイコウの指揮を以て普領に乗り込んで來た。

此眞面目なる情況に於ても大王は依然として其方針を變更することなく、所在の敵に向つて攻勢に出でんとするの意氣に炎えて居つたことは流石である。

此クーネルスドルフの戦闘は、露のゾルテイコウ軍(六萬餘)と奥のラウドン軍(一萬餘)との連合軍(兵力合計七萬九千、砲二百十門)が陣地に據れるに對し、大王は兵力四萬、砲百五十門を以て敢て攻撃を強行したが、其結果は失敗に終つた戦例であり、露軍の執拗なる力を例證するに足

るべきものである。

小評論 大王がホツホキルヒの戦闘で大敗を蒙つたことは、本戦闘とは直接の關係はないが、餘りに敵を侮つて失敗したる戦例として價值あるものである。大王は寡勢を以て不利なる地形であるに拘らず警戒も不充分的儘、敵陣近く深入りしたのであつて、部將が「此情況で敵が出撃しないとすれば當に處罰に値する」と言ひたるに對し、大王は「奥將が大王を恐れること處罰よりも甚しい」と激語した。然るに、翌日は、其目して弱敵としたる奥軍から攻勢に轉じられて大敗を喫したのである。クーネルスドルフの戦闘とは別個のものであるが、特に茲に自戒の爲め一言する次第である。

二 露奥連合軍陣地

陣地は八日間に互り工事を施して以て元來堅固なる地形を更に難攻の陣地たらしめたものである。而して其南翼はフランクフルト・クロツセン街道に接し、北翼はベツケルグンドの斷崖地に托し東南に正面せる陣地で、後方はオーデル大河の谷地を成形して、圖示の通り陣地の正面及側面は防禦に適當なる多數の砂丘を以て圍繞せられてある。其著名なる砂丘を陣地の南翼から擧げて見れば、ユーデンベルグ、ファルケンスタインベルグ、グローセンスピッツベルグ、クーベルグ、

ミュールベルグ等である。

三 大王軍の攻撃部署

普軍は一七五九年八月十二日朝、多数の縦隊を以て露軍の陣地に接敵行動を行ひ、其縦隊中の右側二縦隊即ちフィンク、シヨルレーメルの二隊は、ヒューネルフリース川（露軍陣地の北翼に沿うて流るる小川）の北岸で圖示の位置に停止して、主力の迂回運動を掩護し、爾餘の縦隊は更に其小川の上流方面に迂回してファウレン橋梁及ストロー橋梁の二箇所で小流を渡り、露軍陣地に正對してクーネルスドルフ森林に展開し、次で全隊を左に旋回せしめて敵陣の左翼に對して攻撃隊勢を整へ、然る後其砲百五十門全部を擧げてクーネルスドルフ東方に排列して先づミューベルグに向つて砲撃を開始し歩兵の突撃を準備した。

四 戦闘の情況

普軍全砲兵の砲撃に對し、露軍は優勢なる砲兵を有するに拘はらず地形上僅かに五十七門を以て應戰し得たのみである。従つて砲戰の結果は普軍に有利であり、其準備射撃の効果十分なりと認め得たので、普軍前衛であつた擲弾兵四大隊は攻撃前進を起しウワルクベルグを攀登し二重に設けられたる副防禦をも超越して勇進し、ベツケルグルンドの斷崖線に展開し、更に突進してミ

ユールベルグの敵左翼に對し其直前百歩の距離に迫つた。露軍は此時、猛烈なる霰彈火及小銃火を浴せて普軍を苦戰に陥らしめた。之は露軍の得意とする所で、正面火は中々強い。然るに普軍は更に勇を鼓して損害に屈せず突進し、胸牆を越え接戰格闘を交へ以て當面の露軍を撃退し、更に五大隊の増援を得て攻撃を續行し、斯くしてミュールベルグの全線を普軍の手に收め、露軍左翼の據點を奪取した。露軍は歩兵數大隊を以て恢復攻撃を企てたが、撃退せられた。依つて更に第二の陣地としてクーベルグの狭小なる地區を占領し強大なる砲兵の援助を以て頑強なる抵抗を試みることとなつた。此陣地は、要圖にて知り得る如く右側はクーネルスドルフ湖及其南方に連なる濕地にて大部分は諸兵の通過を至難ならしめる、従つて普軍は其砲兵を有効射程内に布陣せしむること困難なるの不利があると同時に、敵陣地の正面が狭き爲めと同地が斷崖を成せるとにより敵の抵抗を排して之を強行突破することは容易でない。又陣地の左側も森林に依托せられ此方面も攻者に便宜を與へぬ。

勝に乗じたる普軍は、更に此堅固なる正面に向つて突撃を反復した。然し其都度不成功に終つた。乃ち將官ザイドリッツは其騎兵數中隊をして敵の右側に攻撃を敢行せしめたが、之れ亦地形の關係上不成功であつた。フィンク部隊長はエルスブッシュ方面から敵の左側に向つたが、ユーデ

ンベルグ丘上の砲兵から打ちすくめられて前進が出来ぬ。

次で普軍の左翼に於ける歩兵は焼かれたるクーネルスドルフの村落を経て勇進し、グローセンスピッツベルグ丘上の砲火を冒しつつ、クーネルスドルフの左側から進出してクイーグンドの斷崖地を乗り越えて敵陣地に迫つた。然し之も露軍の頑守によりて爾後の攻撃は停頓した。普軍歩兵としては殆んど其力を最大限に發揮し最早餘力なき状態である。是に於てか餘す所のものは騎兵の攻撃參與である。兩翼に位置せる普の騎兵團は嘗てツォルンドルフに於て現したる起死回生の機をつくるべく斷乎として起つた。

右翼に在つたウエルテムベルグ皇子は其騎兵聯隊を提げ敵陣地の左翼に向ひ、自から先頭に立ち敢然として死地に入り入つた。殆んど敵陣地の高地上に達した頃後方を顧ればこはいかに、聯隊は敵の霰弾火に惱まされて續行せぬ。爲に皇子は將に生擒せられんとするの危機に瀕し、攻撃は美事に不成功に終つた。

主力騎兵は左翼に位置するザイドリッツの騎兵團である。然るに之より先、ザイドリッツは負傷して戰場を去りプラトンが代つて指揮した。其最前線に在りし一聯隊は進んで敵陣に迫つたが、堅固なる工事、超越困難なる副防禦、猛烈なる霰弾火は該騎兵をして敗退の餘儀なきに至らしめ

たのみならず、露、塙騎兵團は之を尾撃して普の後方から續行中の騎兵主力の中に投入せしめた。之が爲、普の全騎兵は其渦中に捲き込まれて仕舞つた。頼みとしたる普軍騎兵の攻撃は斯くして全敗に終つた。

普軍の次に來るべき運命は全軍の敗北である。大王は身を挺して衆を激勵し更に第二の攻撃を試みんと努力したが、大河の決する所奈何んともする能はず濁流滾々として逃走に變じた。大王は最後方に位置して軍隊の集結に努めたが及ばぬ。總司令官の身を以て、其乗馬二頭は斃され大王の上衣は敵彈の貫く所となつた。而かも尙ほ退却を欲せず、騎兵四十騎は強引に大王を拉致して危険界より離脱せしむるの已むなき悲壯なる場面に戰の幕は閉ぢた。

此戰鬪に於ける兩軍の損害は大略左の通りである。

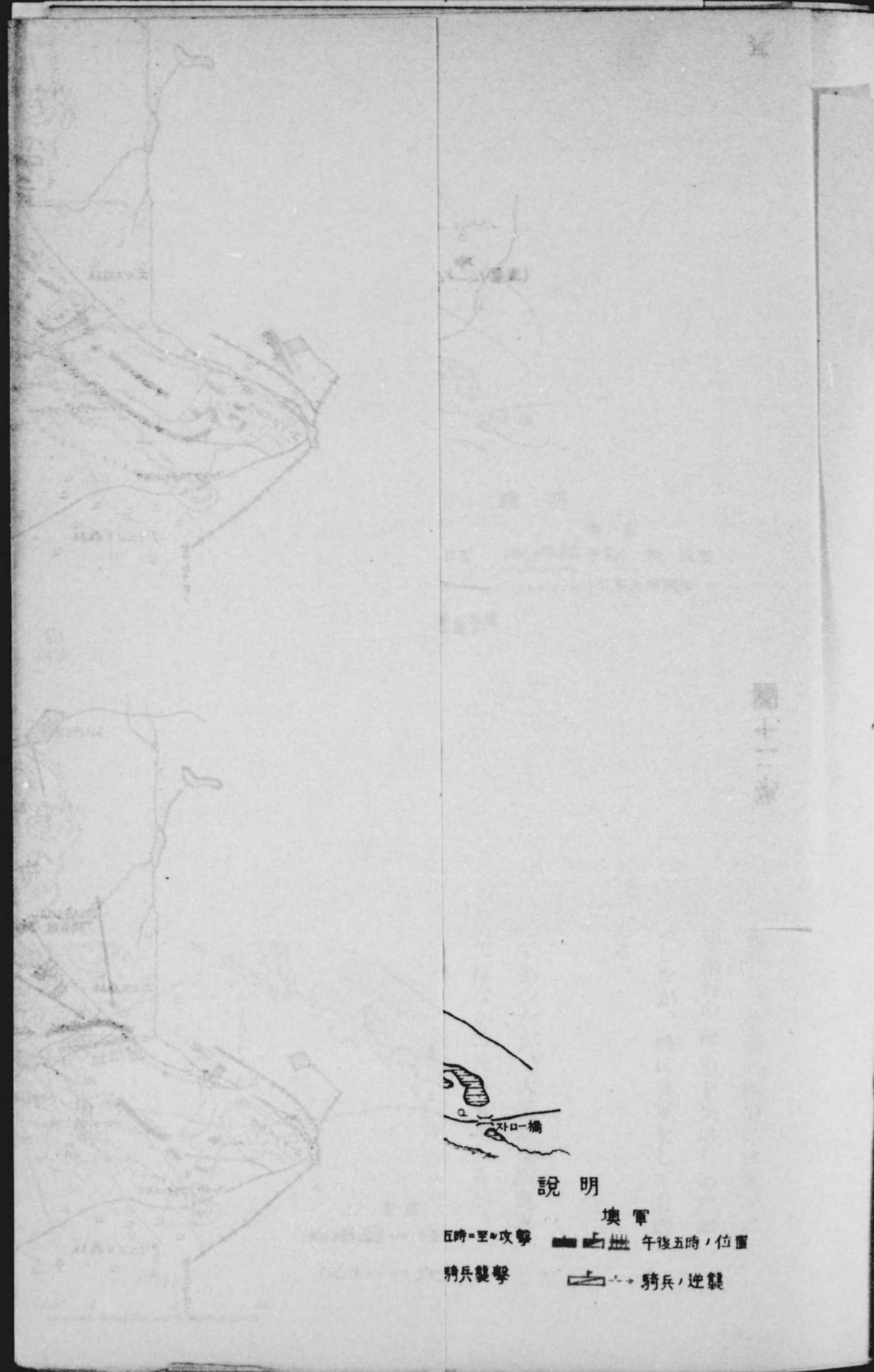
普軍	將校	五五〇	下士官、兵	一八〇〇〇
露、塙軍	將校	六八〇	下士官、兵	一六〇〇〇

流石の大王も此失敗には痛く身神に打撃を蒙り、一時は前途を悲觀し、戰爭終局の勝利を絶望なりとすら觀念した程である。然し、直に其正常の意識に還元し、更に發奮努力終に孤軍能く終局の勝利に導いたのであつた。

小評論 此激戦の経過を大観するに、普軍としては更に慎重なる態度と攻撃手段とを選び以て其劣勢なる兵力の使用に注意し、之を一舉に消耗せしめざる如く戦闘を指導し、以て地形の有利による敵の効果を可及的小ならしむるを要したることを、史的に結論することが出来る。併し普軍として特に大なる缺點があつたとも思はれぬ。従つて露軍が優勢を持して堅固なる地形に據りたる時の防禦力、粘り強い點に就て本戦闘の勝利の原因と看做し得るであらう。普軍では地形の關係上、其決勝の鍵を握れる騎兵團の行動が意の如くならなかつたことも普軍の爲大なる不幸であつたに相違ない。

四 評 論

既述の二戦闘即ちツォルンドルフ及クーネルスドルフ附近の戦闘は、大王が露軍と交へたる代表的ものであるから、兩者を總括して觀察して見ると、要するに大王は兩戦闘共に非常に苦戦をなし、前者に於ては辛うじて勝者となりしも、後者では惨敗の苦杯を嘗めさせられ、而かも兩回共に莫大なる損害を蒙つて居る。勿論露軍にも、より以上の損害は與へて居るけれども、大王としては露軍は苦手であると謂へる。其茲に至りたる原因に就ては、種々あらうけれども、其主なるものを列擧して見れば、



説 明

塙 軍

五時=至=攻撃 午後五時、位置

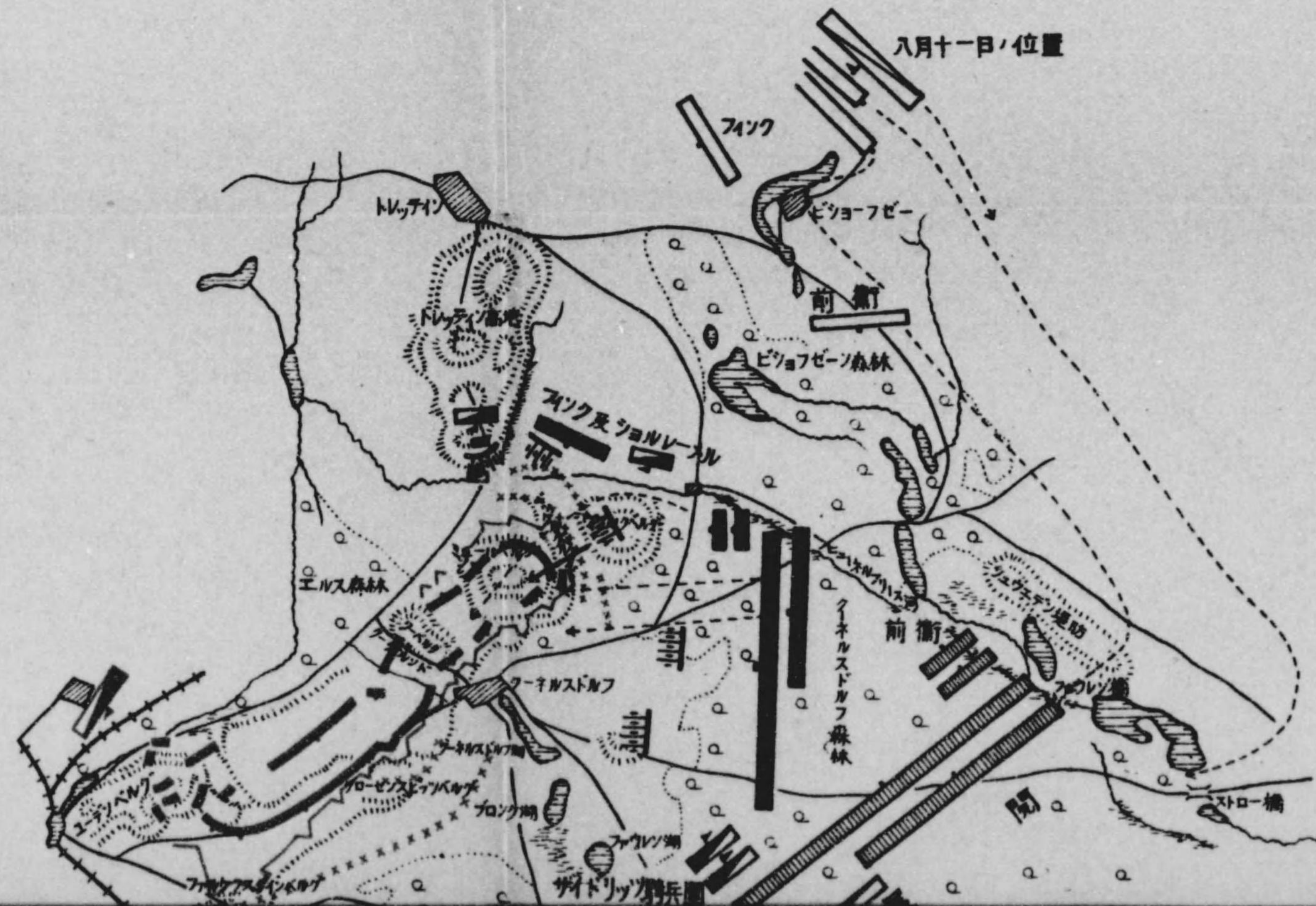
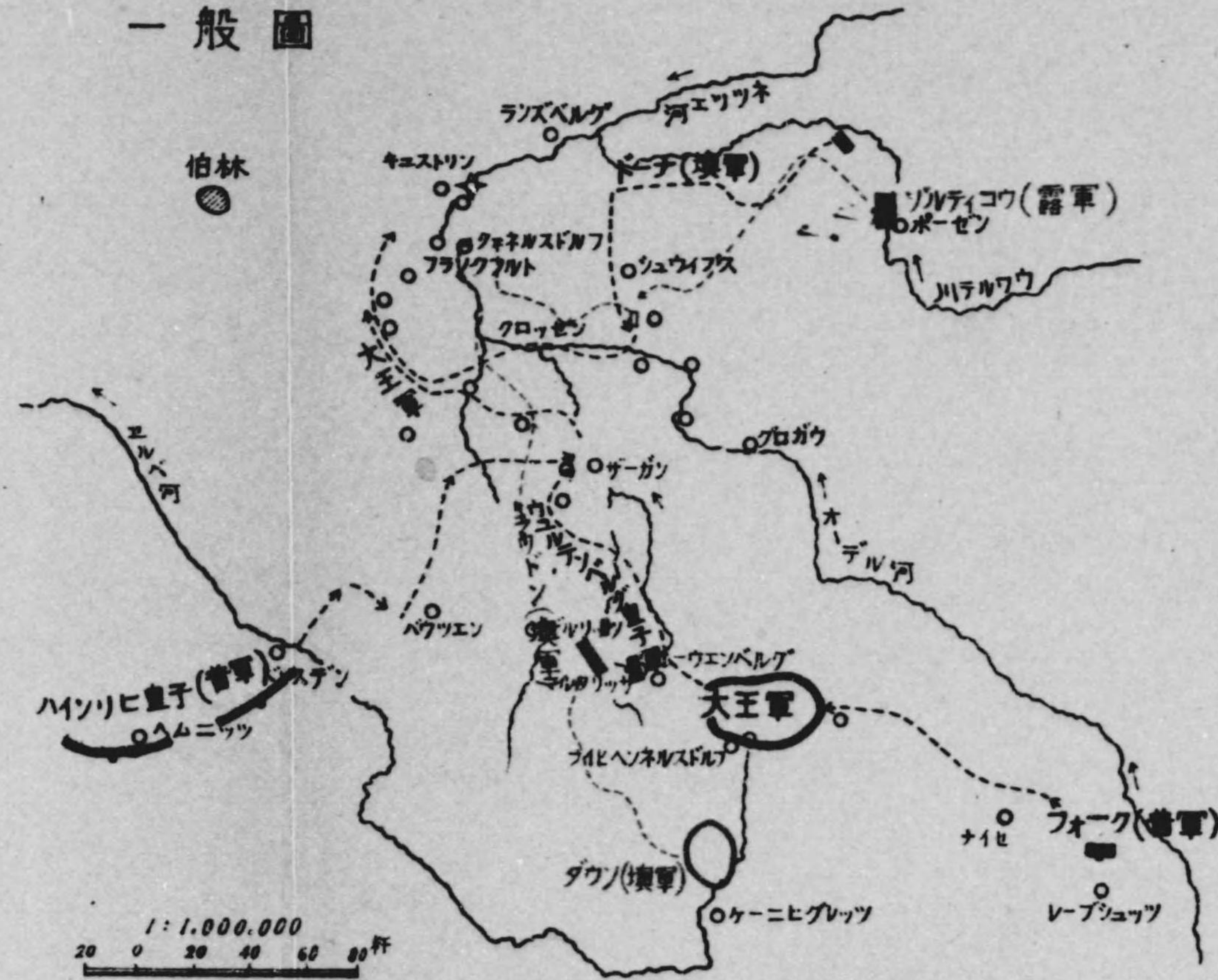
騎兵襲撃 騎兵、逆襲

クーネルスドルフ附近、戦闘

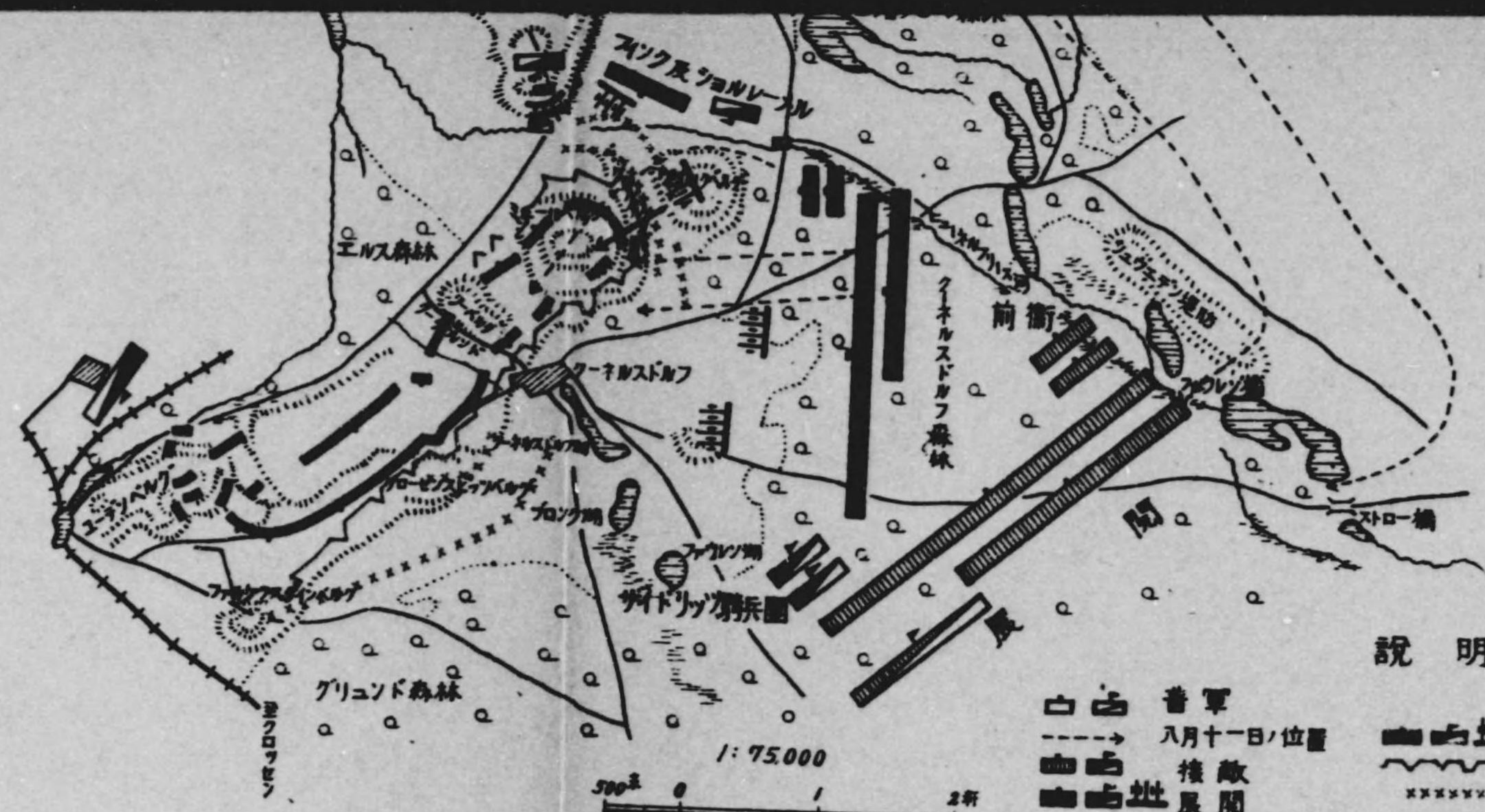
於一七五九年八月十二日

第二十圖

一般圖

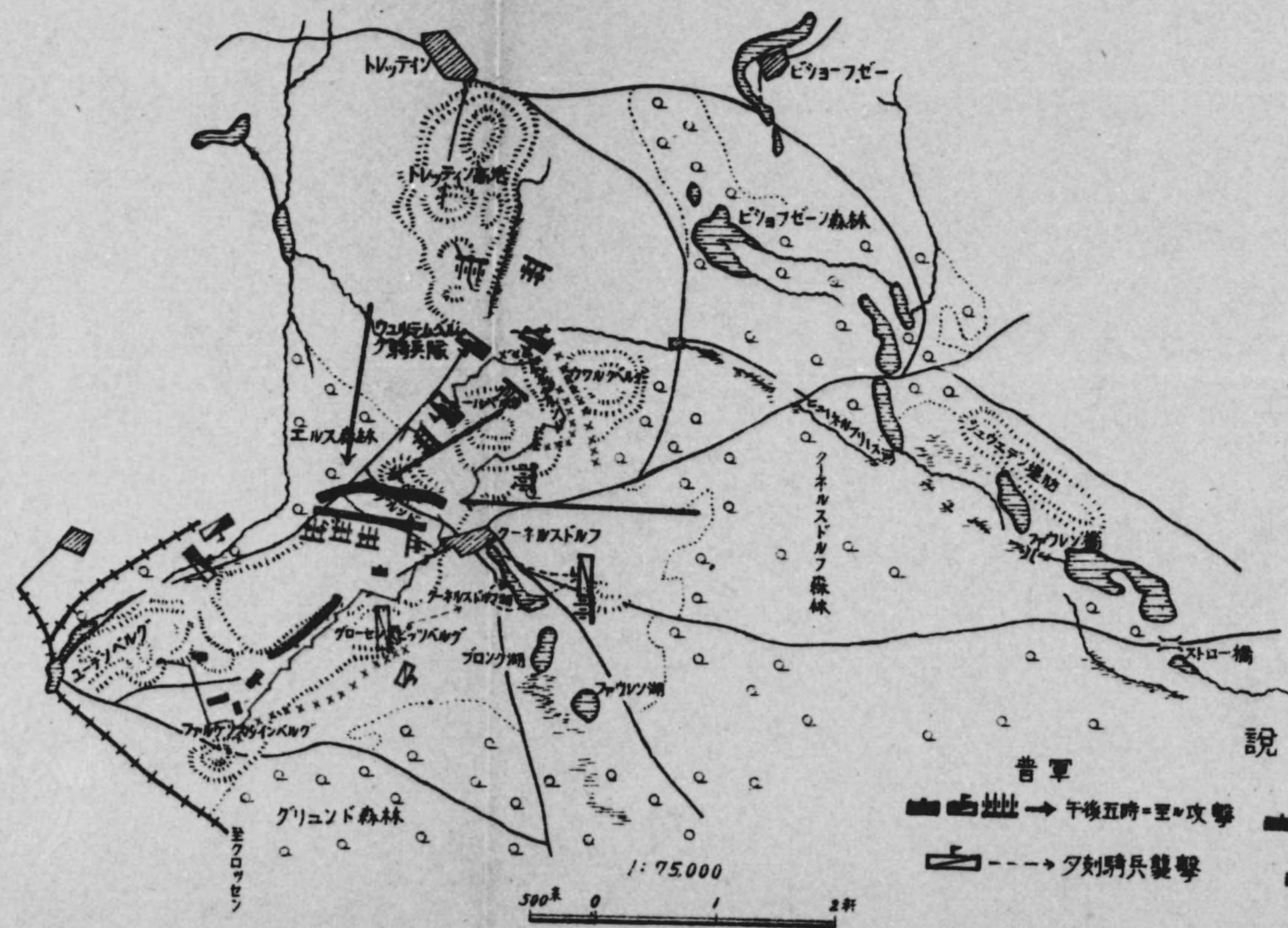


其一



説明

○	普軍	■	塙軍
-----	八月十一日、位置	■	午前十一時、位置
■	接敵	~~~~~	工事及障礙物
■	展開	xxxxxxx	
■	午前十一時、位置		



説明

○	普軍	■	塙軍
■	午後五時、至攻撃	■	午後五時、位置
---	夕刻騎兵襲撃	---	騎兵、逆襲

其二

一 露軍が如何にも粘り強き抵抗力を有すること

即ちツオルンドルフでは午前の戦闘では、寧ろ勝者の位置を獲得し、午後の戦闘には散々に普軍を惱ました後西方に壓縮せられたが、遂に普軍をして攻撃續行の餘力を失はしめた如き、クーネルスドルフでは第一回、第二回と漸次に陣地を後退したが、終に普軍をして力盡きて敗退を餘儀なくせしめた如きは之を證し得て餘りありである。

二 地形が露軍に有利であつたこと

ツオルンドルフでは、正面、側面共に通過困難なる堅固な陣地であつたが、大王が全然露軍の意表に出で背面に迫つたのであるから、必ずしも地形が有利ではなかつたとも謂へるが、實に自から背水の陣を布くを餘儀なくされた形となり、却て其防禦力を精神的に増大したことは認められる。又クーネルスドルフでは、攻者として十分の兵力を展開するを得ず而かも突撃は至難なる地形であり、特に騎兵の行動に不便なりし等防者を益することも大であつた。

三 兵力が優勢であつたこと

之れは數字的に見て明瞭である。即ちツオルンドルフでは露軍の四萬四千に對し普軍は三萬六千、又クーネルスドルフでは露、墮軍七萬九千に對し、大王は四萬を擁するに過ぎなかつ



た。後者の如き兵力の大差は勝敗に大なる原因をなした事勿論である。即ち普軍としては困難なる地形に於て力攻するを要したので、自然兵力の消耗を大ならしめた。若し運動戦であつたならば軍隊の敏活なる運用によりて勝を制する公算も従つて増大するのである。大王がロスバッハで三倍以上の敵を運動戦で潰亂に陥れたのは有名な戦例である。

次に兩戦鬪に於て露軍が暴露したる通有的傾向の主なるものを探索して見ると、

一 兵力優勢なるに拘らず常に防勢に立つこと

ツォルンドルフで防勢に立つことは他の連合軍の爲めに火中の栗を拾ふ様な馬鹿げた犠牲を御免蒙ると云ふ心理が大なる原因をなして居るとはいへ、彼等が兵力の多衆なるに拘らず積極的行動に出づるは極めて稀なる中の一例である。従つて彼が初めから大々的に攻勢に出づる如き場合には、運動戦に巧みならず、協同動作不十分で、敵に間隙を狙はれ失敗することが多い所以である。實に露軍は坐して甚だ強く、動いて弱き通有性を持つものである。

二 防戦中局部的逆襲を行ひ敵に相當の苦痛を與へるが、多くは徹底的でない

ツォルンドルフで、普のマントイフェル隊を數十歩の距離から逆襲して之を撃退した如き、又デミク騎兵團が左翼方面から出撃して普の一部を突破擾亂せる如き、又クローネルスドルフ

では屢、逆襲を敢行し、不成功ではあつたが普軍を惱まし、次で最後の逆襲で勝利を獲得した如きは其例である。然るに其出撃たるや多くは局部的であり、又勝利を利用擴張して全勝に導く如くに徹底して敢行することは殆んどない。若しツォルンドルフでも最初の逆襲の效果を利用し全線徹底的に起つたならば、更に效果を大ならしめたであらうと思はれる。併し又再考すれば運動戦に巧みならざる露軍のことであるから、餘りに深入りすると反對に失敗に終ることもあり得る譯である。此傾向は露軍の國民性的通有と見てよい。

第三 Austerlitz 會戰 (第二十一圖其一)
其二三参照

此の會戰は、奈翁軍對露奧連合軍の衝突であるが、奧軍は敗殘の少數に過ぎぬから露軍との對戦と思つて差支ない。而して奈翁の巧みなる攻勢移轉によつて露軍を殆んど殲滅的に打撃した戦例である。

奈翁は一八〇五年奧國と戦端を開き、佛國沿岸地方及和蘭方面よりライン河畔に各軍を集中せしめたる後、直に總前進に移り、遂に Donau 河畔 Ulm に奧軍主力を包圍し之を降服せしめた。此行動は八月下旬より十月中旬に互り約二箇月間殆んど連續行動した後に結ばれたる戦果であつた。之を ULM 戦役と稱する。本標題のアウステルリッツ會戰は、其後に引續きたる行動

及戦闘である。

一 Dürrenstein 附近の戦闘

奥軍と連合作戦に任ずべき露軍の第一梯團約三萬は、Kutusow の指揮を以て牛歩東進をなし、奥軍が Dürrenstein にて降服したときは、圖示の如く Tim 河畔の Braunau 附近に到着した。同時頃奥軍の打ち残されたる約二萬の兵團は Tim 河畔の Muhlendorf に退却して居た。此兩兵團は Dürrenstein の落城後、奈翁軍が大舉して東進し來るに對し抵抗するの力なきものとあきらめ、何れも東方に退却するの意思であつたが、遠く奥都維納の宮中軍事會議の決議により、依然 Tim 河の線を守るべき命に接し、奥軍は獨り劣勢の兵力を以て同線に停止した。然るに連合軍たる露軍は之にも構ひなく其翌日即ち十月二十七日同河の線を撤して退却に就いた。連合軍の頼み難き一例である。

奈翁は二箇月に互る大行軍及戦闘の後、敵主力軍を降服せしめたる將兵の勞苦大なるものあるにかゝはず、殆んど休憩の餘裕を與へず再び第二の活動舞臺に其の軍兵を驅つた。實に奈翁の威力の偉大にして殆んど超人的なる統帥力を有する一例である。

奈翁は敵が眞面目の戦闘を避け東方に退却するものと判断し、先づ Traun 河 (Tim 河東方) の線に向ひ追撃線を定め、各軍團を部署して前進した。而して奈翁の爾後の判断に依れば「敵は其

の首都を容易に放棄することなかるべきにより、維納の西方 St. Pölten 附近に於て眞面目の抵抗を試みるならん。然れども又或は直に Donau 河の左岸に退却することなしとせず、殊に露軍に於て然りである。」と。そこで奈翁は、敵の行動を搜索するの便と、要すれば自軍を Donau 左岸に移すことを容易ならしむる爲に、Donau 艦隊の編成を命じ、且つ Donau 左岸作戦兵團として Mortier の指揮する三師團を十一月六日に分遣した。

露軍は Tim 河畔を撤退後、佛軍の前進に伴ひ衝突を避けて退却を續け、奥軍も亦維納より途中停止命令を受けて一時停止することありしも、結局大なる抵抗を交ゆべくもあらず、露軍に續いて退却した。

露將 Kutusow は奈翁の判断の如く一時 St. Pölten 附近を占領したが、奥軍は途中佛軍の爲に大打撃を受けて其の敗殘兵も南方に逃走し、最早頼みにならず、而かも佛軍は堂々として前進し來るに對して眞面目なる戦闘を交ゆるの不利なるを察し、陣地を撤して北方に轉進し、圖示の如く Krems 附近で Donau を渡河し同地附近に陣地を占領した。

是に於て奈翁は主力を以て維納に向はしめ、一部を以て直接露軍に對し其の對岸(左岸)に備へしめた。而して既に左岸に分遣せられたる Mortier 兵團長は、十一月十日其の先頭の二師團を以

て敵の前哨を驅逐して Durrnstein (Krems 西方) を占領したが、他の二師團は尙ほ一日行程後方に在った。

露將 Kutusow は、佛 Mortier 兵團が直接自軍に近迫し來り爲に退路の危険を感ずると同時に同兵團の弱勢なるを知り、之を攻撃して退路の安全を圖るに決し、翌十一月十一日其の一師團を以て Mortier の退路を遮斷せしめ、優勢なる兵力を擧げて正面から攻撃に轉じた。Mortier は遙に劣勢なる兵力即ち一師團を以て勇戦奮闘し一時露軍の一部を撃退したが、終に大なる損害を受け該師團は全滅の不幸に陥り、他の二師團は戦闘に参加するの迫がなかつた。

小評論 露軍が局部的に逆襲を試み小成功を獲得するに慣れたることは、多くの例證を有する。併し、それが中途に挫折し徹底を缺くことも殆んど常態である。故に、戦線の一部に對する逆襲、分遣兵團に對する攻勢移轉を常に覺悟して之に備ふる所がなければならぬ。

此の Mortier 兵團の分遣は、結果から觀れば不成績であるが、戦略上の見地から、敵の退路を遮斷し且つ主力軍の渡河を容易ならしむる爲に有意義なる處置であると信ずる。奈翁も其の孤立の危険を顧慮し、同兵團をして常に右岸に於ける左翼軍團と連繫し其後方に梯次すべきを指示して居るのは適當なる注意である。

故に斯くの如き兵團の分遣に際しては、其の指揮官の人選に注意し、情況に適應して硬軟自在の行動をなし得る如く指導することが肝要である。

二 露軍の攻勢前進、佛軍の陣地占領

Kutusow は Mortier 兵團の一部を撃滅して小成果を收めたる後退却に就き、途中佛軍の急迫を受け、其後衛は Brünn 南方で損害を受けた。然し本國よりの増援兵は逐次増加し、十一月二十六日要圖東北端 Prossnitz 附近に停止したるとき、奥軍の一部を併せて兵力は八萬五千を算するに至りたる上に、佛軍は Brünn 附近に到着するや其前進極めて緩慢であり、兵力も著しく減少したことを察知し得たのみならず、奈翁の宣傳等により佛軍が最早攻撃の餘力なく、戦意も薄弱となつた様に感じた。そこで今迄の態度を急轉して今や攻勢の機至れりと爲し、次の如き痛快なる決心を敢てするに至つた。

連合軍は佛軍の右翼(南翼)を迂回し其の連絡線を脅威し之を Donau 河畔に壓迫せんとす

此の堂々たる方針に基き翌十一月二十七日を以て總前進に移り、二十八日 Wischau に達した。奈翁は猛追撃を續行するに伴ひ、戦闘の損害よりは兵力分遣、後方警備等の爲多大の兵力を要し、Brünn 附近に達した頃には其の手許に在る兵力が五萬位に減じた。本國出發の際には約二十

萬の大軍であつたものが斯く減じたものである。古來兵學者が「軍を遣ること百里なれば其兵力減ずること半數又は三分の一となる」と言へる如く、今日に於ても亦然りである。是に於て奈翁は敵軍の増加せるに對し兵力上爾後餘りに深入りすることの危険なるを感じ、暫く Brunn 附近に停止して敵情の變化に注意しつつあつたが、敵側は漸次兵力を増加するのみならず、普國でも國論沸騰して今にも反佛の旗を翻さんとする氣色も見え、佛軍の爲には、四圍敵の脅威を受けんとする切迫の情態に在つた。是に於て奈翁は速に敵を誘出して決戦を交へんが爲に種々計畫し實行する所があつた。

奈翁は十一月二十八日軍の一部が占領して居る Austerlitz (要圖其二東端) 西方高地上に登つて自から偵察をしたが、情況明かでない。そこで軍使を敵軍に派遣して無意味の談判を爲さしめつつ敵情を見させた結果、敵が一般に進軍中であることを知り得た。依つて奈翁は心陰かに決戦を交へ得るを思ひ之が準備に著手し、爾後奈翁は敵の動靜に注意して戰場を何れに選ぶべきやを定め、或は Brunn 附近に、或は Schlapanitz (Brunn 東南九軒) 附近に変更した。露軍が十一月三十日に Austerlitz 西方高地に其の前哨を進めたとき、其の一般の動靜に鑑み會戦が十二月二日に惹起せらるべきを判断し、圖示の如く、左翼は Bascnitz 兩岸地區、右翼は Goldbach 川の西岸に

沿うて陣地を占領し、陣地の前面には Platzen 高地があつて全戰場を瞰制する地形上有利なる地點を故意に放棄したのである。

露軍(塙軍も一部加はる)は、既定方針に基き佛軍の右翼を包圍すべく、十一月二十九日頃より其の準備に著手した。

會戦前日に於ける兩軍の位置は次の通りである。

露 軍(塙軍)

第一線は五縱隊となり概ね次の位置に在つた。

第一縱隊 (Dochturów の率ゐる八千五百) は K. Hostieradek, Augedz 間に位置し、其の一部たる塙軍 Kienmayer の率ゐる騎兵團は Telnitz に近く位置す

第二縱隊 (Langeron の率ゐる一萬一千六百) は Platzen 高地

第三縱隊 (Pscihitschewski の率ゐる一萬三千八百) は Platzen 東側

第四縱隊 (Kollowrat の率ゐる二萬五千四百) は Krzenowitz 西側

第五縱隊 (Lichtenstein の率ゐる塙軍四千六百) は platzen 東側

總豫備(本營) 八千五百は Krzenowitz 前衛 (Bagration の率ゐる三千) は Rausnitz、總指揮官

Kutisow は第四縦隊の位置に在り。

兵力合計八萬五千四百

佛軍

一師團を以て南方 Tellnitz, Sokolnitz 間を占領

主力を以て Puntowitz 附近より以北に位置

第三軍團 (Davout) は約一師團を以て Raigern (戦闘圖西南端) 附近に到着

兵力合計七萬五千 (戦闘開始後 Davout 軍團の主力戰場に到着せるを含む)

小評論

此の佛軍の配備を概観するに、右翼を後退して Goldbach 及沼澤地に托し極めて少數の兵力を以て守備に任せしめ主力は中央以北に集結したるものである。而して前述の如く陣地前面の Platzen 高地は附近に於ける最高點なるにも拘はらず之を故意に放棄した。蓋し此要點を確保して右翼を Litawa 河に托するときは、敵の迂回を妨げ敵をして止むを得ず正面攻撃を行ふの外手段なく、従つて普通の戦理より推考すれば、兵力の不足を地形によつて補ひ勝利を得るの公算を大ならしむる所以である。然るに超人的なる奈翁は特に敵をして其の欲する迂回を

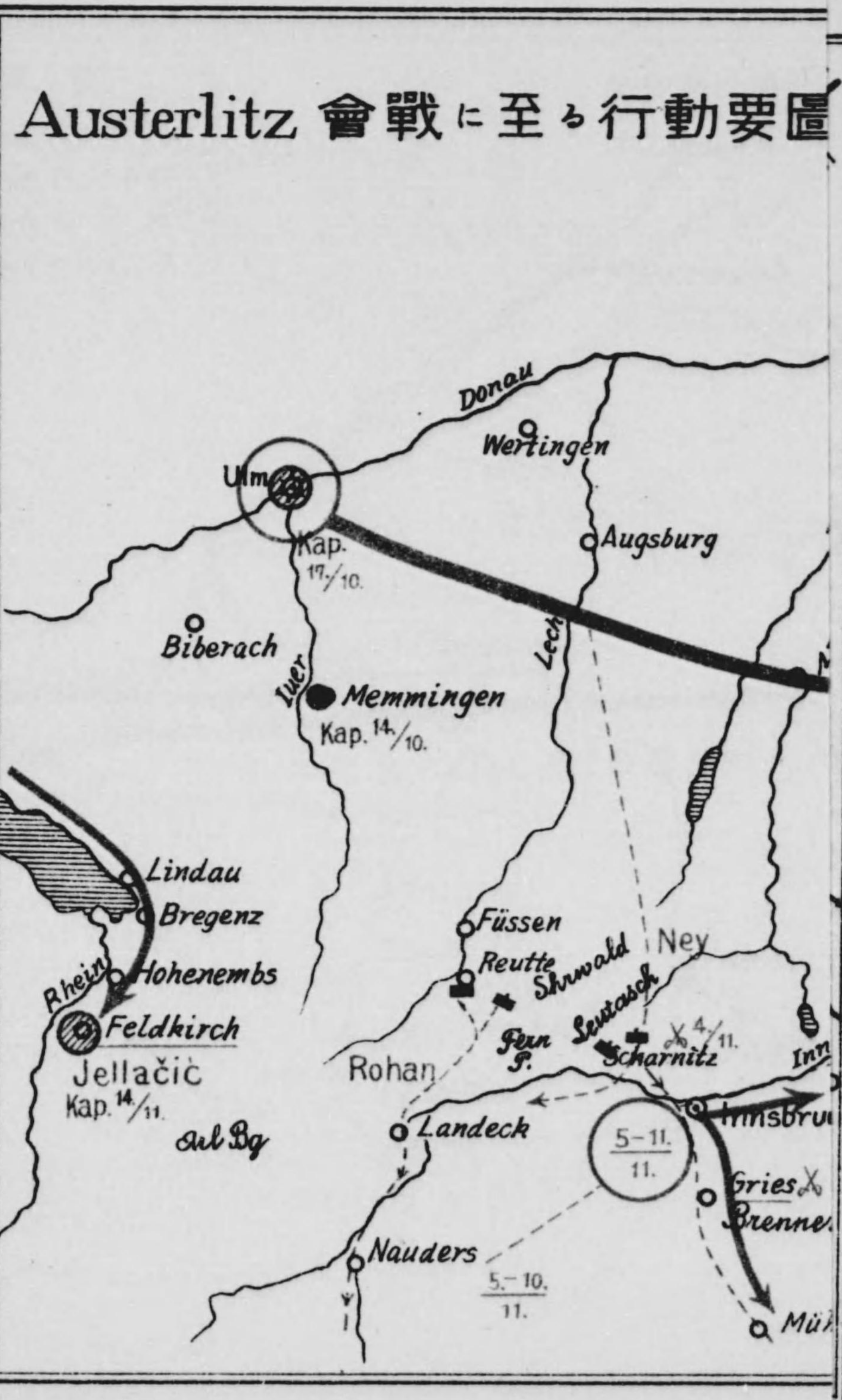
實施するに便ならしめ、其の運動中に之に乗ずるの變法を採つた。敵の價値を正當に判斷した際此の種變法も考慮すべきであるが、敵を過度に侮り、爲めに不測の失敗に陥らぬ様注意を怠つてはならぬ。

三 會戰の概況

十二月二日露墮連合軍は早朝より攻撃行動を開始し、主力を以て Tellnitz, Sokolnitz 方面即ち佛軍陣地の右翼に迫り、Platzen 高地附近は其の兵力微弱なるものに過ぎぬ。

佛軍は早朝から敵の攻撃を待ちつつあつた。然るに最初は濃霧の爲展望を妨げられ、不愉快なる時期もあつたが、午前七時過ぎには霧霽れて旭光東天に輝くを見るに及び、志氣大に振ひ、佛軍は其後此の好日和を以て戦勝の前兆とするに至つた程、印象深きものがあつた。所謂「Austerlitz の太陽」の言葉は永く佛軍の間に傳はつた。

午前七時三十分頃奈翁は Platzen 高地に敵兵を認めざるに至るや、第四軍團長 Soult に命ずるに今より十五分の後攻勢に轉ずべきを以てした。命を受けたる Soult 軍團は勇躍して Puntowitz 以北の地區より Platzen 高地に對して猛然なる攻撃前進を開始し、之に次で第一軍團 (Bernadotte)、第五軍團 (Lann) 及 Murat 騎兵團等其左翼に連なつて攻勢に轉じた。



第二十一圖 (其ノ一)

露軍總司令官 Kutusow は、佛軍の出撃を知るや始めて Platzen 高地の重要なことに氣著いた。そこで一部隊を急派して同高地の確保に努めしめた。斯くて全線に互る戦闘は漸次激烈となり就中連合軍の左翼方面では、絶對優勢の兵力を以て佛軍の微弱なる一部を攻撃したのであるから、間もなく之を突破して Goldbach を渡つた。然るに午前九時頃 Davout 軍團が此の方面に到着したので激戦が惹起せられ、爾後露軍の主攻撃方面の進捗思はしからざるに至つた。

正午前彼我の戦闘は絶頂に達し、其の兵力配置は南方面に於ては露軍の四萬餘に對し佛軍は一萬餘、中央以北に於ては露軍の四萬に對し佛軍は六萬餘を算する状態であつた。

正午頃 Platzen 高地の維持に努力したる Kutusow の最後の奮闘も、Soult 軍團の爲に撃破せられ、此の最重要地點に佛軍の旗が樹立せられた。茲に勝敗のバランスは急轉して佛軍の勝利に歸した。露軍主力は Soult の出撃によりて其の背後は遮斷せられ、Satschan 池附近の狹隘なる地域に追ひ込められ混亂、潰亂の極に陥り、多大の損害を蒙り逃走した。北翼方面も同時刻頃佛軍の勝利となり露軍は東方に退却を開始した。

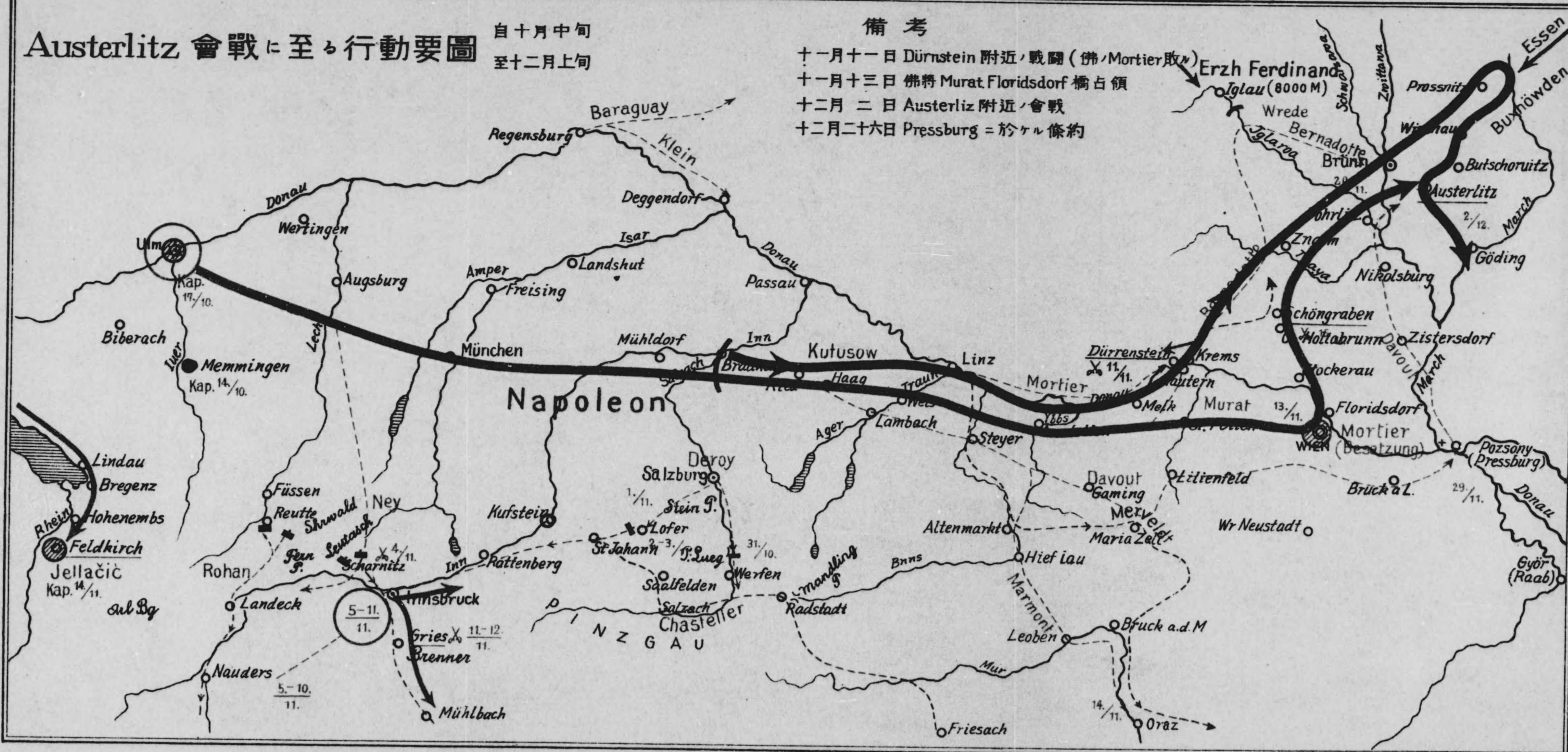
斯くて露軍連合軍の敗殘兵は東南に向つて敗走し、佛軍は殆んど全力を擧げて追撃に移つた。然るに翌々日の四日に奥國皇帝は親ら奈翁の陣營に來り、和を請ひて對敵動作を終り、露軍は其

Austerlitz 會戰に至る行動要圖

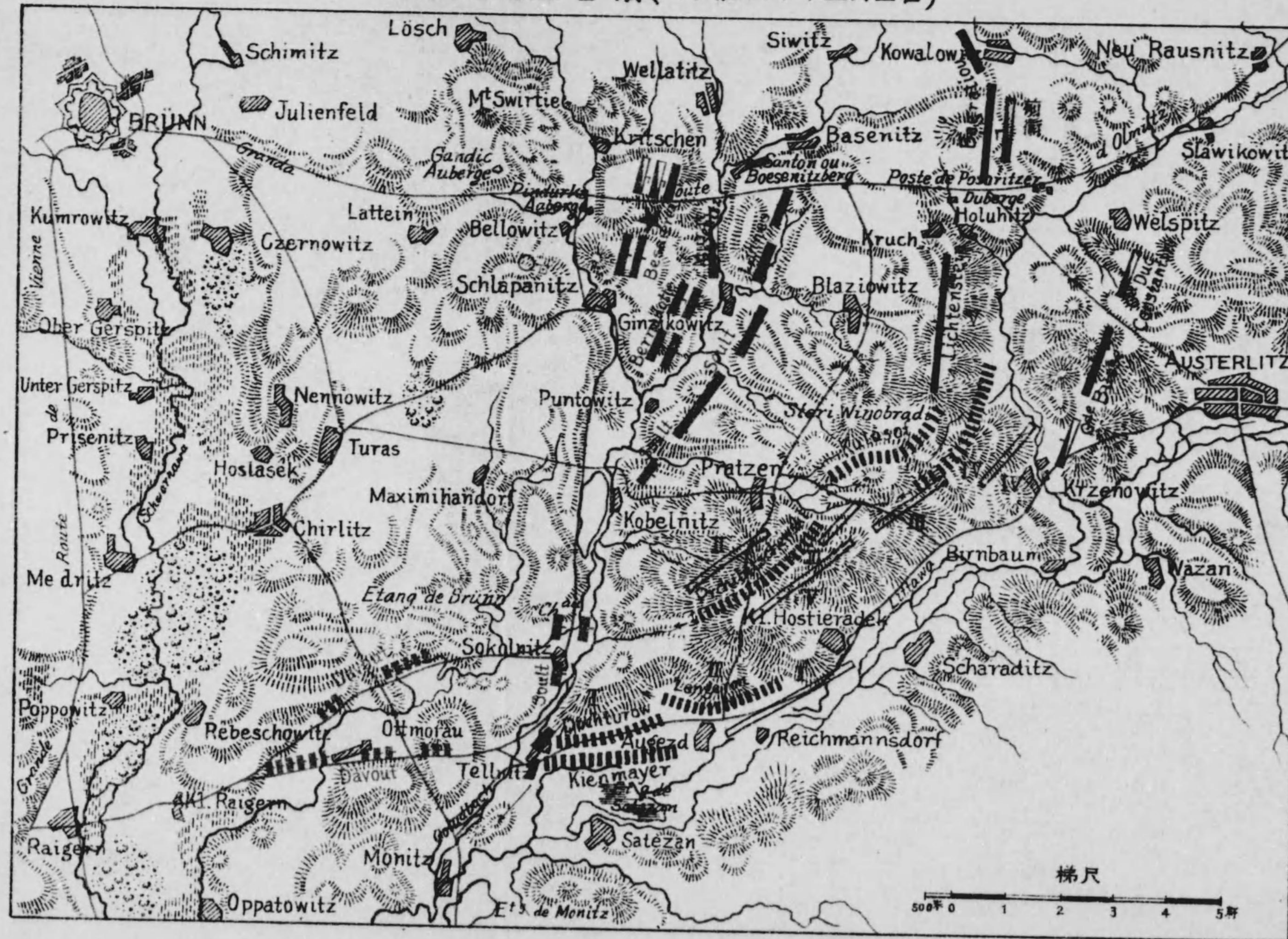
自十月中旬
至十二月上旬

備考

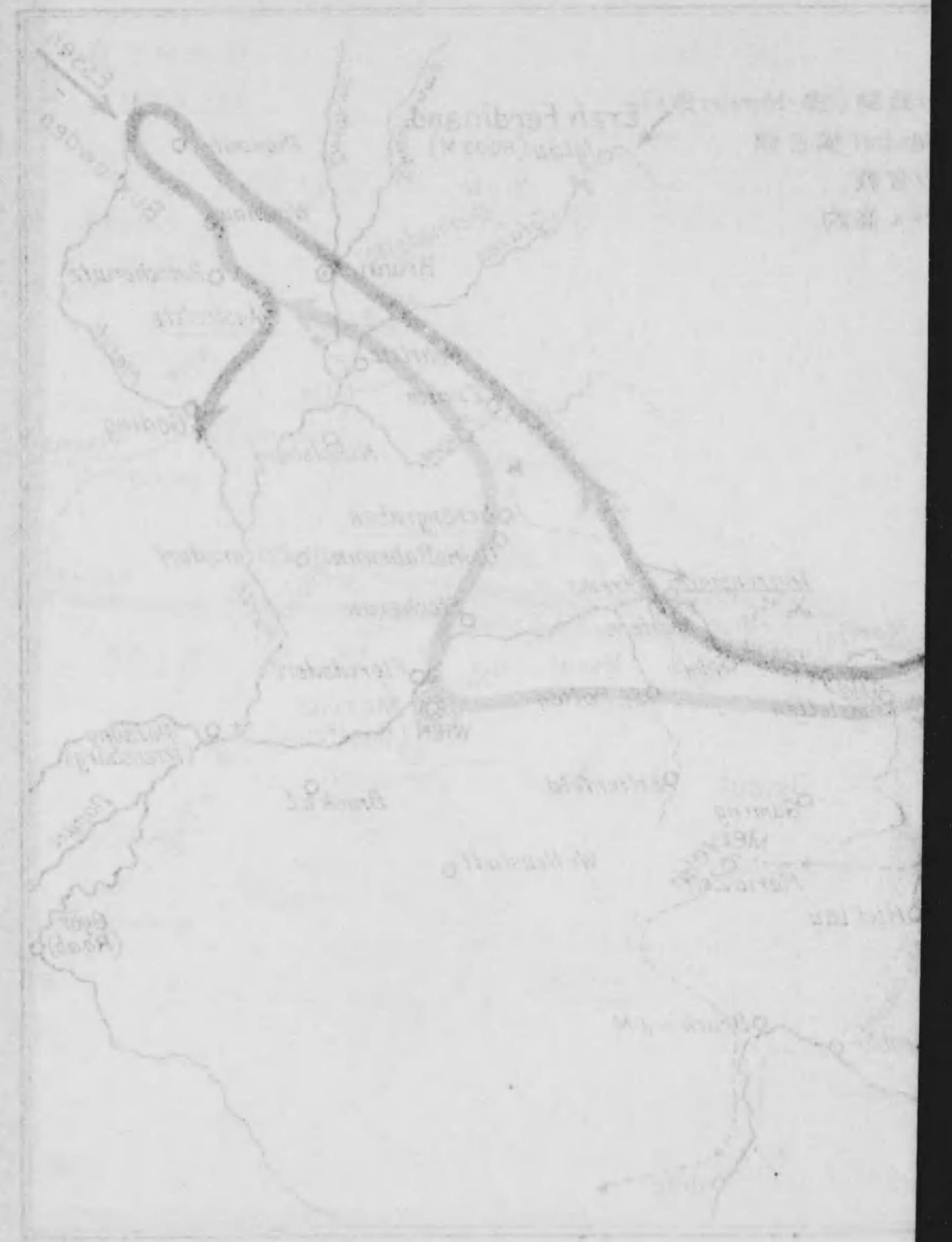
- 十一月十一日 Dürnstein 附近、戦闘 (佛・Mortier 敗)
- 十一月十三日 佛將 Murat Floridsdorf 橋占領
- 十二月二日 Austerlitz 附近、會戰
- 十二月二十六日 Pressburg = 於ケル條約

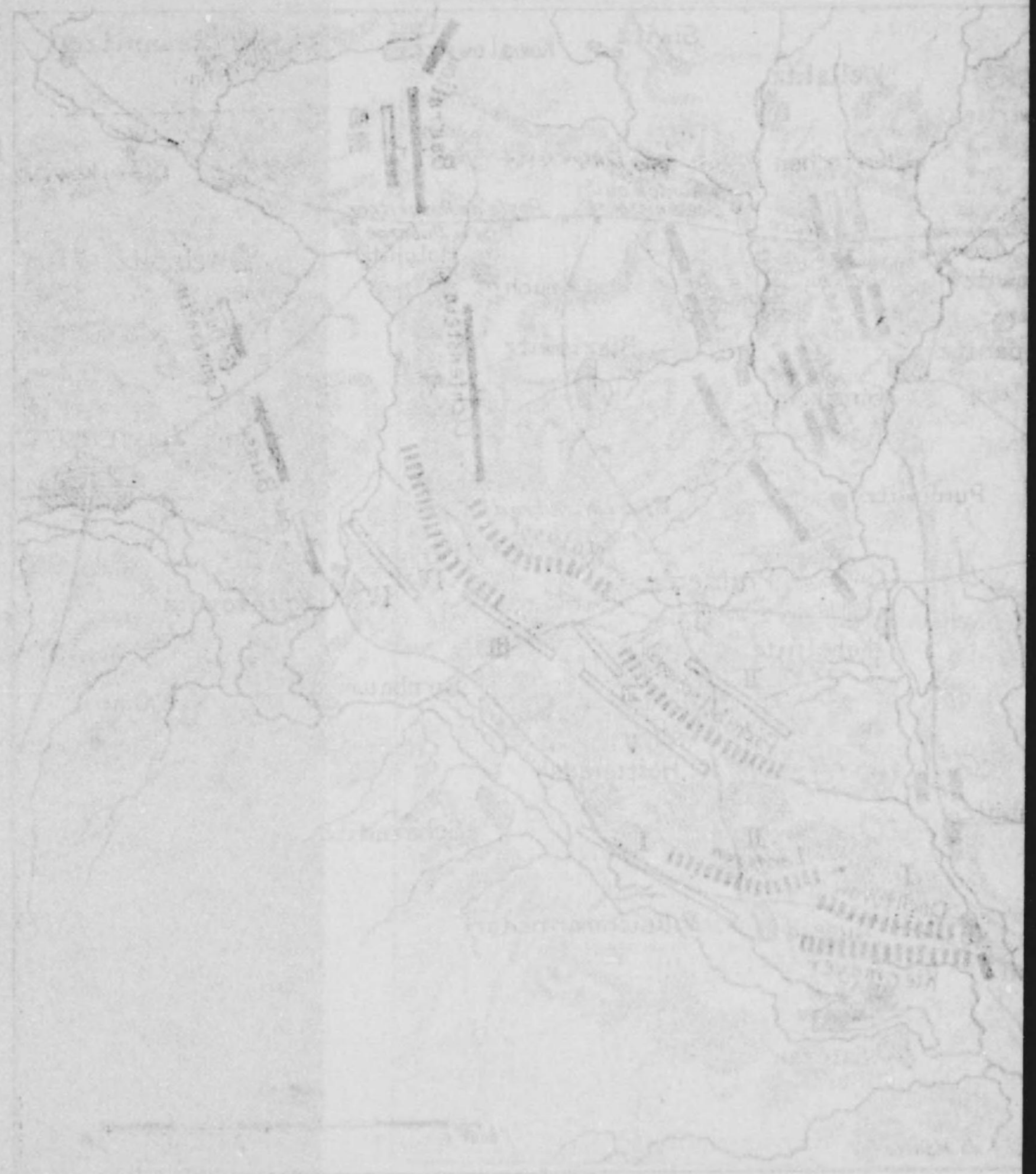


Austerlitz 會戰 (千八百五年十二月二日)



第二十二圖 (其ノ二)





の儘本國內に逃げ去つた。

此の會戦は佛國、埃國、露國の三君主が戰場に在つたので、世に之を三帝會戦とも名づけてある。而して此の會戦に佛軍は七千の損害に過ぎなかつたが、連合軍は二萬五千に上る大損害を蒙つた。

四 評 論

此の戦役に於ける露軍の行動中注意すべき件は次の通りである。

- (イ) 佛の分遣兵團 (Mortier) に對し優勢を以て攻勢に轉じ其の一師團に全滅的打撃を與へたこと。
 - (ロ) 退避作戰を續行しつつあつた露軍が優勢を信ずるに至るや攻勢に前進せるのみならず、奈翁を眞似て徹底的打撃を與へんとし却て全敗せること。
 - (ハ) 露軍が長時日に互り長距離間佛軍の急迫を受けながら大河を渡り、又局部的に逆襲をなして小成功を收め、自軍は兎も角も大損害を受けずして退却を完了したことは、其の退却に巧妙なるを證するものである。
- 一八一二年に奈翁軍を全滅したのも主として退却作戰に依つたものである。吾人は此の點に

就て特に注意を要する。

以上イ、ロ、ハ共に露軍の通有性として他にも其の例が少くない。イの如きは殆んど各戦役につきものであり、ロの如きも敵が弱しと信じた場合に起ることが多い。世界大戦當初に於ける Tannenberg の會戦で露のサムソフ軍の全滅せられたのも此の類である。ハに就ては特に説明を加へる必要もあるまい。日露戦役に於て我が軍は殆んど常に敵を安全に退却せしめたことは將來の爲大なる戒となすべき要件である。

次に攻勢の頂點を誤らざることの要、攻勢前進を續け得る最大限の地線を誤らざる様慎重なる研究をしなければならぬといふことである。奈翁は Austerlitz 會戦では能く其頂點を誤らず、敵を誘出して決戦を遂行し赫々たる成功を収めたが、一八一二年のモスコウ遠征では其の最大限を誤り、過度に進入したる爲全敗に歸した。露國領土の大なるに鑑み吾人の作戰指導も慎重に此の點を考慮することが必要である。

日露戦争に於ては、我が軍の攻勢前進地域が此の意味に於て能く其の終末點を誤らなかつたものと概評し得るであらう。當時に於ける彼我の實情を察すれば、我が軍にして更に大に深入した場合、極めて大なる危険に遭遇したであらうことは、史的に觀察し得る所である。

第四 ブルツスク戦役(第二十二圖)

此戦役は、一八〇六年の普佛戦役に於ける普國大敗に引き續いて其年の末期に行はれたる露軍(普の敗殘兵を含む)と佛軍との作戦行動を稱するもので、結局は奈翁軍の勝利に歸したのであるが、佛軍は廣地域に互りて行動したる爲、各部將の獨立して作戦する機會が多かつた、従つて他にも多くの例がある様に、部將の作戦上判斷宜しきを得ずして失敗せる事件も多く、其軍事上に關する限り佛軍は大なる効果を擧げ得なかつたのである。而して露軍も亦此の短期間の作戦経過中に於て其得意の行動と不得意の方面とに各其特質を暴露して居る點に教訓を見出し得るから、左に其大要を紹介する。

一 佛露兩軍の對進

露國は佛國の勢力がワイクセル河邊にまで及ぶことは自國の脅威となるのみならず、波蘭は之を機として奈翁の援助の下に獨立を企圖するであらう、さうなつたら自國の安危に懸る一大事であるとなし、當時土耳其古方面に大兵を待機せしめねばならぬ情況にあつたに拘はらず、佛軍と一戦を交ゆるの決意をなした。

奈翁も普國と交戦して相當疲勞はして居るものの、此際露軍との衝突を避け難きを察し、政略

上土耳其をして露國と事を構へしめ該方面に露軍を牽制せしめた。其結果作戰初期に於ては露軍總兵力十四師團の内約五師團を該方面に準備すべく餘儀なくされた。

斯くて露軍は普軍を増援すべく前進し、十月二十九日を以て普露國境を越えた。然るに時既に遅く普軍主力は其前日にブレンツラウ(普國オーデル河下流の一要塞)で佛軍に降服したことを知つた。依て露軍は孤軍前進の危険を顧慮し一時ワイクセル河の右岸に停止して暫く佛軍と河を挟んで相對した。

爾後約三週日の後、即ち十一月二十日に於ける大要の位置は次の通りである。

(イ) ベンニグゼン將軍は四師團を以てワルシャウ及其北方に在り兵員約六萬
(ロ) 普のレストック軍團(約一萬五千)はオステローデに在り、其一部がトールン附近ワイクセル河岸を監視す

(ハ) ブックスヘウデン將軍は四師團(約四萬人)を以て目下續行中であり、戰場附近には十二月中旬に入らざれば到着せず、又エッセン將軍の指揮する二師團は土耳其方面より召還せられ轉進中である

佛軍のワルシャウに向つてする前進 奈翁は冬期作戰を避け明春を待ちて行動を開始するの意

圖を以て露軍に休戦を提議した。然るに露將ベンニグゼンは健氣にも之を拒絶した。そこで奈翁は直にワルシャウに向ひ前進するに決し、第三、第五、第七軍團をして同地に向ふ前進を續行せしめた。

當時ワルシャウ對岸のブラーガを守備せしセドモラツキーは、佛軍がワイクセル上流奥領内から渡河し來るとの情報を信じ、其師團を率ゐてナレフ河上流に退避した。是に於てベンニグゼン軍主力も亦オスロレンカ(ワルシャウ東北百軒ナレフ河畔)に向ひ退却を命じた。

此の露軍の誤れる行動によりワイクセル河の直接防備は撤去せられた譯である。従つて佛軍の先頭第三軍團は、何等の抵抗なしにワルシャウに入り、次でナレフ河口を占領せんが爲め渡河の準備に着手するを得るに至つた。依て奈翁は各軍團の渡河點を概ね次の如く選定し各渡河設備を急がした。

第三、第五軍團及びミュラー騎兵團を以てワルシャウ附近

第七、第四軍團を以て其下流ツアクロチン及びプロツク附近

第一、第六軍團及びベツシエール騎兵團を以て更に其下流の要點トールン附近

ワイクセルは勿論大河であり、季節は冬季に入り流水の盛んなときであり、爲めに架橋は破壊

せられ易く作業は極めて困難であるばかりでなく、材料も船舟も共に不十分であつた。従つて架橋の完成には單に技術的に見ても長時日を要することを豫期せねばならなかつたのである。

小評論 露軍が虚報を信じて大河を解放したことは、大なる失態と謂はねばならぬ。さなきだに、大河の架橋乃至渡河には技術的に大なる困難が伴つたのであるから、露軍にして若し適當なる手段を以て實力的妨害を試みたならば、佛軍の渡河を相當長期に互り不可能ならしめ得たであらうし、又決戦の目的ならば、敵の半渡に乗ずることも、左程困難ではなかつたであらう。

又佛軍側では其渡河點が二百軒に互る廣大なる正面に隔離されて居るのは、有爲なる敵に對しては危険である、奈翁も之を察知したのではあるが、各方面の兵力は其の一を以てしても優に露軍の主力に對抗し得べしとの自信の下に敢行したのである。奈翁なるが故に敢て之を非難せざるも、通常の場合に於ては、甚だしく危険なることを知らねばならぬ。現に渡河後に於ける佛軍は露軍の不統一なる行動に拘はらず、部分的には失敗せる事實に鑑みるとき、思ひ半ばに過ぐるであらう。

二 露將帥間の軋轢

ベンニグゼンは四師團を率ゐて既にワイクセル河畔に在り、老將ブックスヘッデンは之に後ること一箇月、四師團を提げて戰場附近に到着した。然るに兩將相争うて圓滑なる作戰の進捗を妨ぐることも甚だしきものあるに鑑み、新に總司令官としてカーメンスコイ元帥が任命せられた。然るに此の七十六歳の老將は全軍統率の意氣と材能とを缺如し、任地到着後、其複雑なる難件の裁決に苦しみ自ら辭表を皇帝に捧呈するに至つた。

此の無能なる總司令官が十二月二十日ブルツク(ワルシャツ北方五十軒)に到着したときは、佛軍に對する攻撃の好機が將に去らんとする秋であつた。つまり佛軍が廣正面に分離せる態勢から合一せんとする時機であり、之に反し露軍は兩集團が尙ほ遠く分離せる實情にあつた。然るに總司令官は之を合するに努めず、單に其一軍を以て佛軍に向ひ攻撃するに決し、其五師團を以てナレフ河口でワイクセル河を渡れる佛軍を攻撃することとなつた。其決心や壯烈なるが如きも、事實は殆んど無策であつて、確信を有せざる恰も風船の如き心持ちであつたのである。

故に露軍の先鋒隊が佛第三軍團からウクラー河畔で攻撃を受け撃退せらるるや、カーメンスコイ老將は、大に狼狽して最早萬事休すと悲觀し、早くも二十四日に總退却の命令を下した。然るに幾何もなくして其の命令の過早であつたことを悟り、再び其の意思を取り直し、却てブルツク

クに向ひ攻勢に出づべきを命じた、ところが其の實施の間に至り急に恐怖の念に襲はれ三度決心を翻して總退却に還元し、自から遠くロムツア(オストロレンカ東北三下村)に先行した。「朝令暮改」の熟語も之には當てはまらぬ程の早業である。

意氣揚らざるブックスヘウデン老將は、退却の命令に直に服従した。然し一と癖あるベンニグゼンは考へた、今退却しては却て全滅か潰走かの悲運に陥る、若かず、此處に踏み留まつて一戦を交へんにはと。其部下四萬を擁してブルツスクに停止した。

小評論 露將の軋轢、統率力の缺如、服従心の薄弱、決心の不確等々、惡模範を能くも集め得たものである。此種の事項は各國軍にも往々にして存在することは周知のことに屬する。併し、之は戰の勝敗に大なる素因を有するもので、危険之より大なるは莫しである。露將間には殊に此種現象著しきものあるは、日露戰役中にも證明せらるる所である。將來戰に於ては必ずしも之を過大に豫期するは危険であるが、彼等の既往に於ける事實であり、又目下に於ける國內相争ひつつある不安なる實情を顧みるとき、吾人の參考とすべきものがある。

三 ブルツスク附近の戦闘

ブルツスクに停止せるベンニグゼン軍は、十二月二十六日佛ランヌ將軍の率ゐる第五軍團から

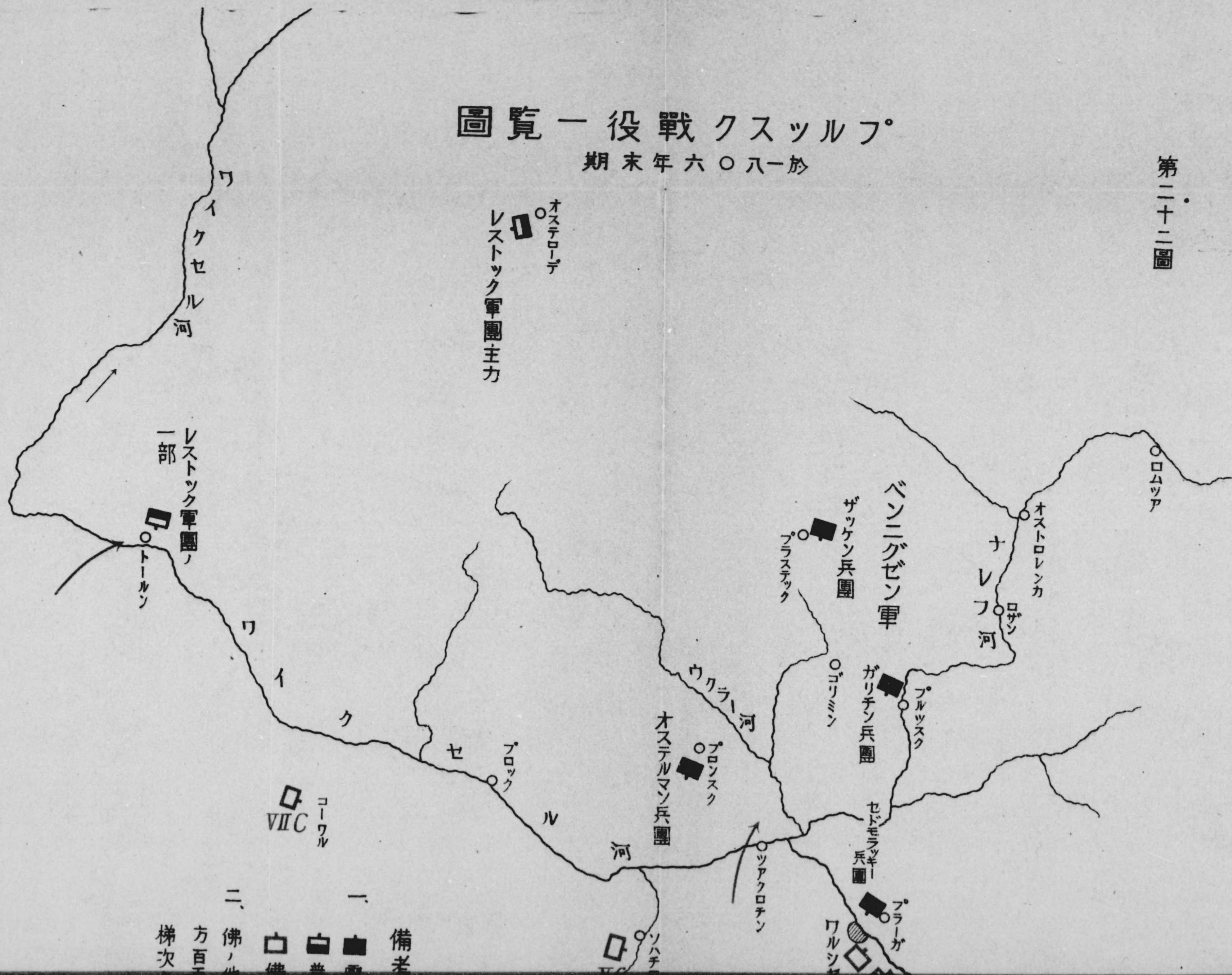


二、佛ノ他ノ多クノ兵團ハVIIノ西方百五十乃至二百五十村ノ間ニ梯次シアリ

プッスルク戦役一覽圖

於一八〇六年末

第二十二圖



オステローデ
レストック軍團主力

レストック軍團ノ一部
トールン

ベンニグゼン軍
ザツケン兵團
プラストック

オストロレンカ
ナレフ河
ロザン

○ロムツア

プルスック
ガリチン兵團
○ゴリミン

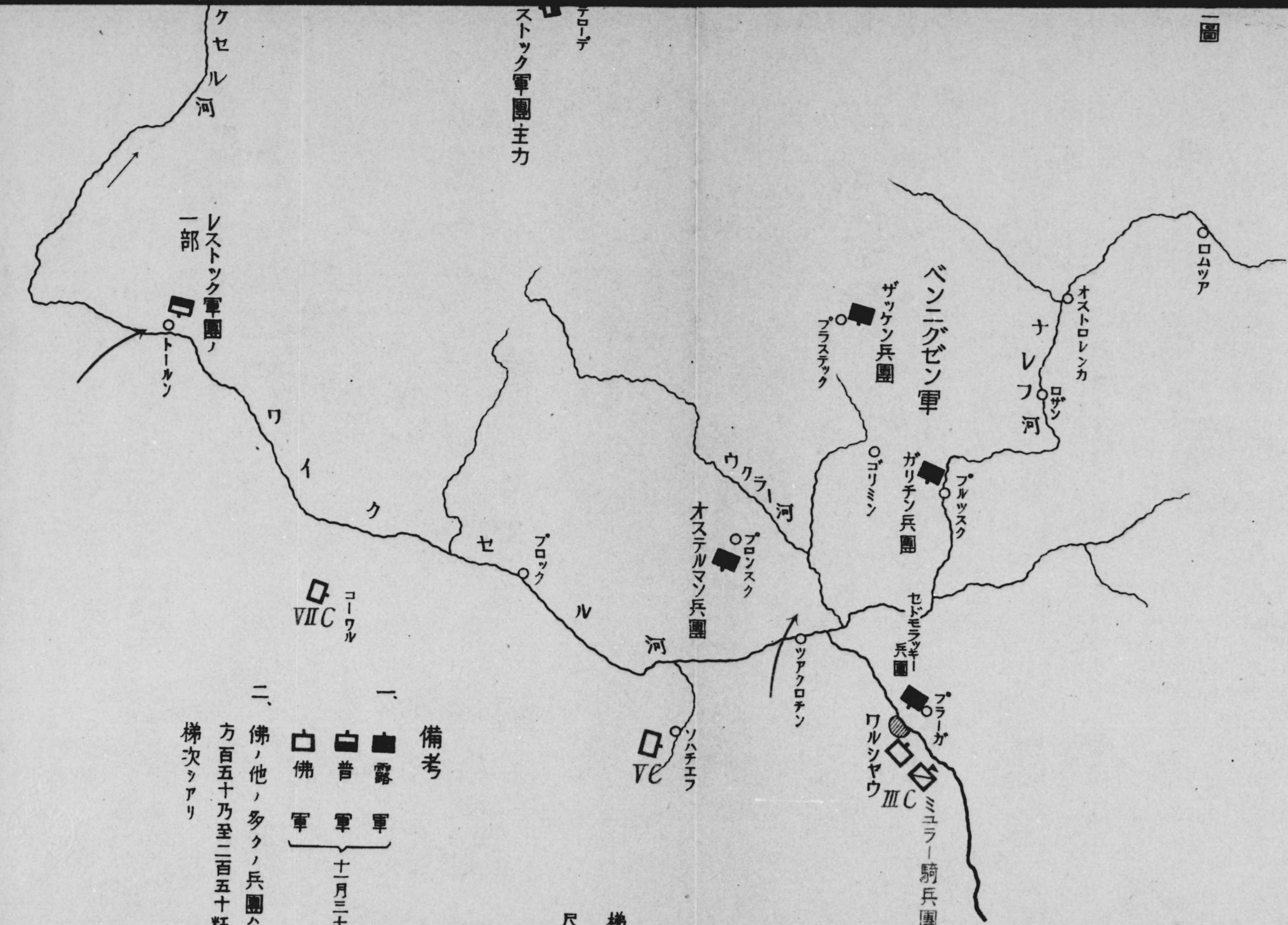
オステルマン兵團
プロンスク

コワル
VIIIC

セドモラツキ兵團
プラーガ
ワルシヤ

ツアクロチン

一、備者
二、佛ノ方百梯次

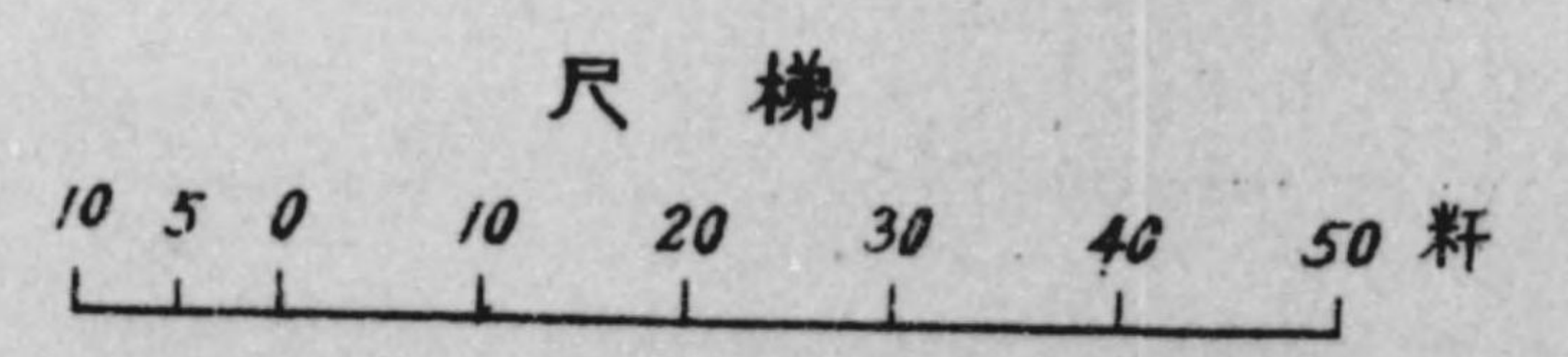


備考

一、
 露軍
 普軍
 佛軍

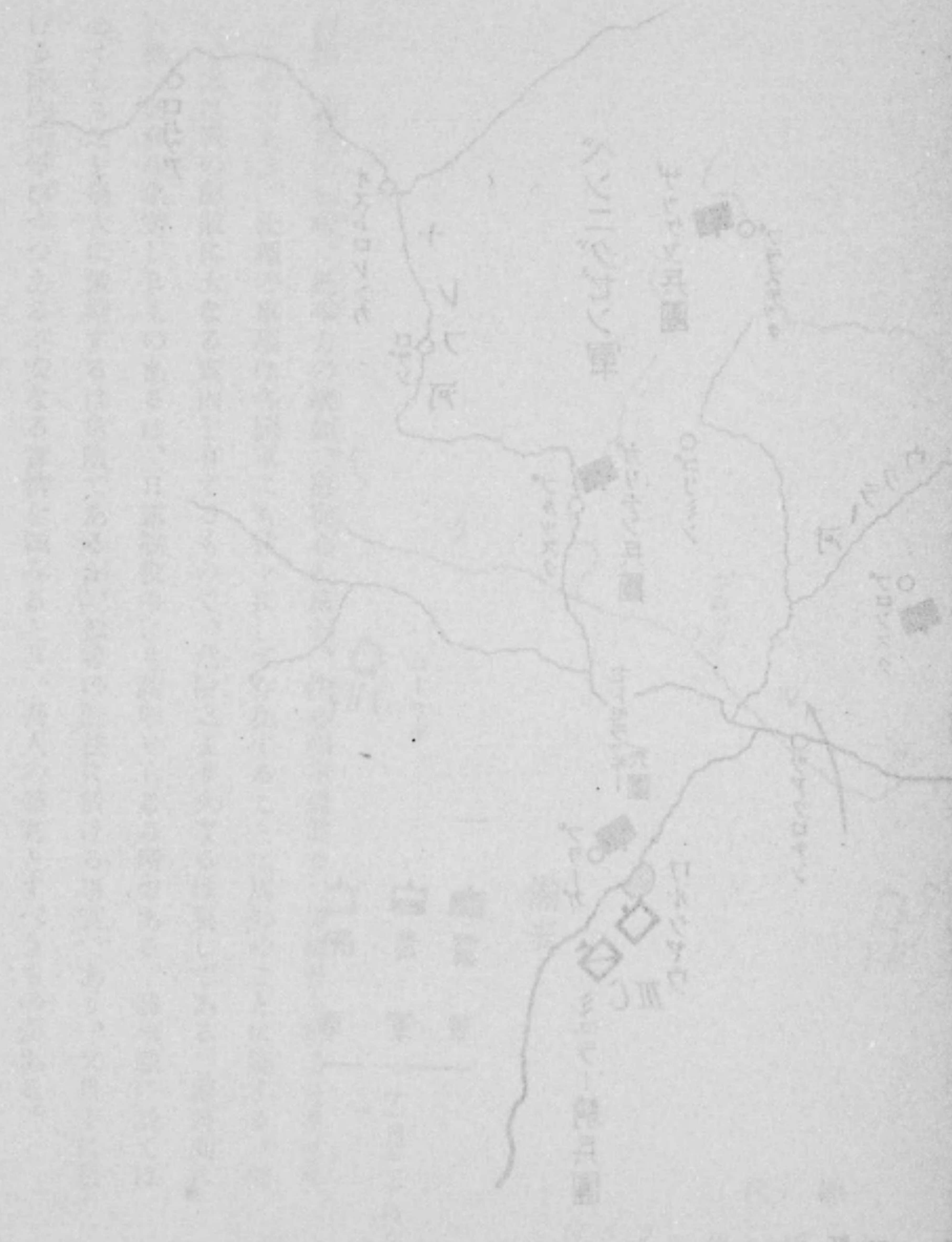
十二月三十日ノ位置

二、佛ノ他ノ多クノ兵團ハVIIノ西方百五十乃至二百五十軒ノ間ニ梯次ツアリ



攻撃を受けた。之に對しベンニグゼンは勇敢に抗戦し、激戦終日に互り、終に佛軍の攻撃を阻止し、佛軍をして攻撃を中止して若干其の戦線を後退するの餘儀なきに至らしめた。つまり此の日の戦闘は軍扇を露軍に揚げねばならぬ。然し此の戦果を利用し擴大することは、露軍の不得意とする所で、此の場合には、露軍主力が既に退却した後でもあり、ベンニグゼン軍も非常に激戦した後でもあるから、勿論、戦果の擴大の如きは思ひもよらざる所で、彼は退却の好機を得たりとして、得意満面、勝報を誇大にし夜に乗じて堂々と退却を開始した。而して曰く、「ブックスヘウデン軍は戦場附近に在りたるに拘はらず何等戦闘に加はらず」と誣告的報告をもなした。然し事實はブックスヘウデン軍もゴリミン(ブルツスク西北二十軒)附近で佛軍の壓迫を受け之を阻止しつつ夜に入り辛うじて退却したのであつた。

小評論 ベンニグゼンは露將の中では比較的元氣ある勇敢な指揮官であつた。然し其の人格的見地からすれば將帥としての價値に缺くる所多きは前述の諸事實によりて知ることが出来る。而して、ブルツスク戦闘を客觀的に觀察するとき露軍が局部的攻勢に小成功を收むるに慣れたる一例として、又同時に其の成功を擴大するに不得意なる一面として算へることが出来る。



此の戦役に就ては小評論に述べたことで露軍に關しては盡きて居るから、總評論は之を省略する。又佛軍に就てルベルナドット第一軍團長の失態などもあるが、直接露軍の特質に重要な關係がないから之をも省いた。結局、露軍は斯くして總退却に移り佛軍は敵を捕捉し得ずして停止したのであつた。

第五 普領アイラウ戦役(第二十三圖其一、其二 照)

此の戦役はブルツスク戦役に引き續いて起りたる露軍と佛軍との作戦行動及戦闘を稱するもので、「露軍に對する佛軍の苦戦」に就て主なる教訓を見出す。蓋し其の慘烈極まる激戦は、奈翁をして勝利を信じ得ざらしめたる程であり、且つ辛うじて戦場の主となれる奈翁軍も爾後戦勝者としての價値を發揮し得ざりし程で、露軍の執拗なる一面を物語るものである。

一 ベンニグゼンの攻勢

露將カーメンスコイは、ブルツスク戦役後退職し、ブツクスヘウデンも亦罷免せられ、ブルツスクの勝者たるベンニグゼンは、總司令官の榮職に任ぜられ、同時に敵をワイクセル河左岸に撃退すべき重大なる命令を受けた。ベンニグゼンたるもの、徒らに防勢に甘んずる能はざるは當然である。是に於てベンニグゼンは嚴寒を冒して一月中旬佛軍の左翼に對して前進せんことを企

圖し、主力たる七師團を以て十五日北進行動を起した。總司令官の意圖に依れば、自軍の右翼を普のレストック軍に依托しハイルスベルグ(要圖北端にあるケーニグスベルグの南方六十五軒)を経てバツサルゲ(ハイルスベルグ西方を北流す)に孤立したる佛第一軍團を急襲し、次でワイクセル河畔に前進し佛軍主力の背後連絡線を遮斷せんとするに在つた。其の企圖や痛快であるが、然し其の實行は然かく容易ではない。

斯くて露軍は、エツセン兵團を殘置して主力の行動を掩蔽せしめ嚴寒積雪を踏破しつつ、一月三十日ザールフェルド(ハイルスベルグ西南八十軒)、グットスタット(ハイルスベルグ西南二十軒)間の地域に達した。然るに佛第一軍團は露軍の銳鋒を避けてレーバウ(ザールフェルド南方四十軒)方向に退避した。

二 奈翁の攻勢移轉

奈翁は最初露軍の前進を以て小規模のものと判断したが、其の眞面目なる行動であることを知るや、一月二十八日先づ其の軍の正面を北方に變換し、二月一日アルレ河(ハイルスベルグ附近を北流す)右岸より敵をケーニグスベルグ(要圖北端の要塞地)方向に壓迫して捕捉殲滅するか敵若し同河の西方に在つたならば更に西面して之を徹底的に打撃せんと企圖し、大要次の部署を以て

迅速なる機動を開始せしめた。

- (イ) ワルシャウ掩護の爲第五軍團を殘置す
- (ロ) 主力即ち第三、第四、第七、第六軍團を以てアルレ河上流地域及アルレンスタイン（ハイルスベクグ南方四十軒）方面に前進す

(ハ) 第一軍團は已むを得ざればトールン（ワイクセル河畔 中流の要點）方向に退却す

小評論 露軍が攻勢を執つたことは、皇帝の命令であり、又ベンニグゼンの性格からしても、當然である。然し名將奈翁に對する計畫としては著しく冒險に過ぎたるの觀がある。自己の連絡線を殆んど解放して敵の連絡線を脅かさんとするものであるから、其の軍や精銳であり、行動は敏速果敢でなければならぬ。此の自信を缺ける將帥は決して企つべき策ではない。奈翁は流石である。嚴寒廣地域に冬營中に在りながら、敵の眞面目なる出撃を看破するや、咄嗟に其の軍の正面を變換し、且兵力を集結し、直ちに逆に攻勢を以て敵を連絡線外に壓迫するの部署を整へた。而して自己の連絡線は縦ひトールン方向を脅かされても尙ほ且ワルシヤウ方面に連絡線を保ち得る如く部署を整へた點に就きて、賞歎に値するものと謂ふべきである。

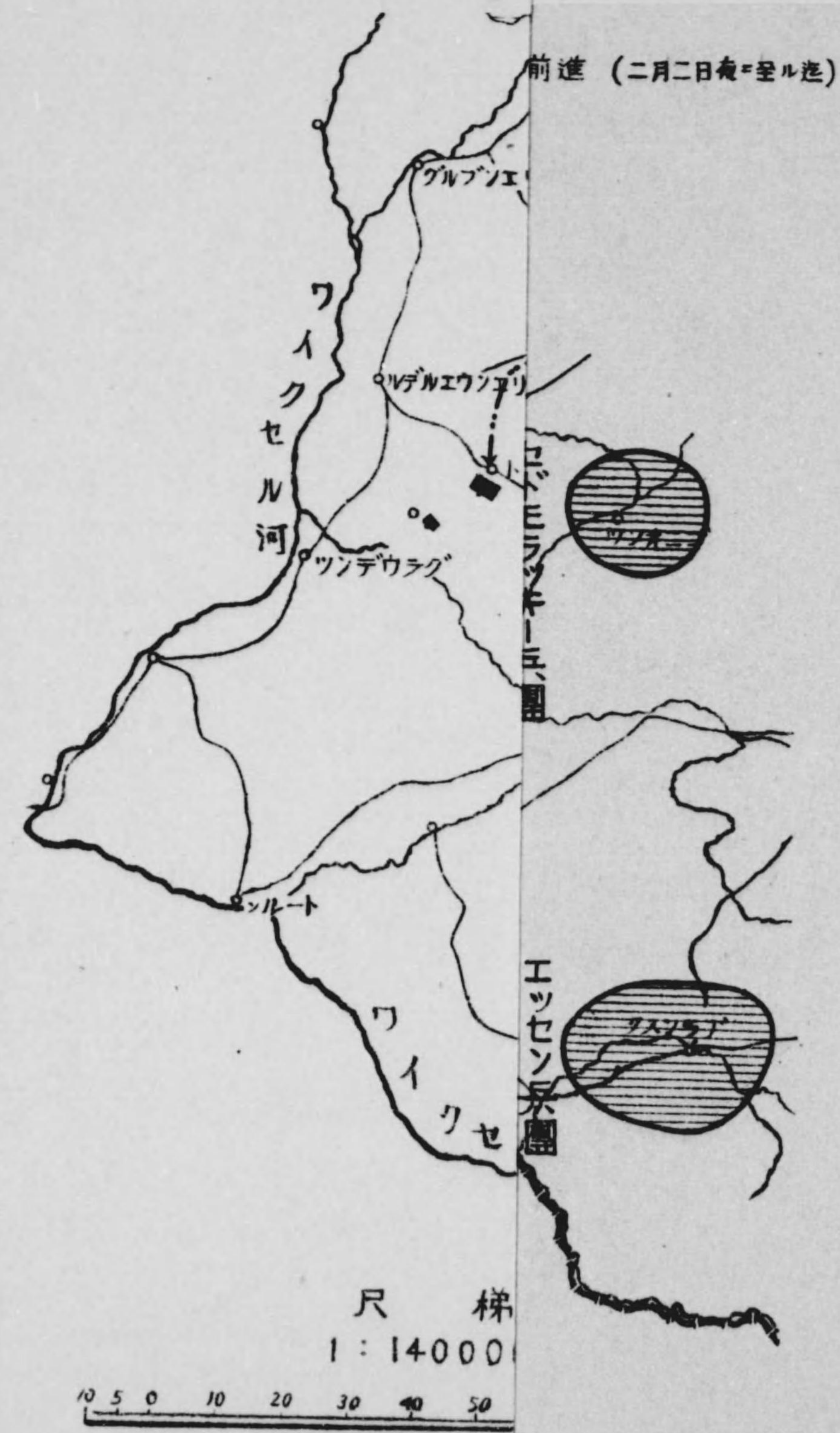
三 ヨンケンドルフ附近露軍の集結及總退却、佛軍の追撃

佛軍ではミュラー騎兵團及第四軍團が軍の先鋒を承はり二月二日アルレンスタインに達し露軍の後衛を撃退した。

ベンニグゼンは曩に勇壯なる決心によりて堂々と前進したに拘はらず、奈翁の下せる攻勢移轉の命令がコサツク騎兵によりて奪はれベンニグゼンの掌中に入るや、急に危険の切迫を感じ、今迄の攻勢意思は爲に頓挫し、前進は中止せられ、意中は既に退却に決したものの如く、取敢へずヨンケンドルフ（アルレンスタイン西北十軒）に其軍を集結すべく決した。

奈翁は未だ的確なる情報を手せぬが、敵は退却するならんと判断し、各軍團を夫々部署してアルレンスタインに向ひ前進せしめつつあつたが、二月三日に至り敵がヨンケンドルフ附近に停止せるを知るや、軍主力の到着を待ち四日を以て之を攻撃すべく命令を下し、以て敵を包圍捕捉せんことを企圖した。然るに露軍は三日夜暗を利用し得意の退却を開始し三縦隊となりて西北方向に向つた。

露軍の退却は二月七日迄續けられ同日夜普領アイテウ（ケーニグスベルグ東南四十軒）附近に兵力を集結した。



奈翁は一度長蛇を逸するや直ちに三縦隊となりて之を追撃し、二月七日普領アイラウに於て露の後衛に追及した。ベンニグゼンは更にフリードランド(普領アイラウ東北二十軒)方向に退却を續行する意圖であつたが、疲勞甚だしきと、部隊の混乱状態とに鑑み、之をして續いて退却せしむることは却て潰亂に陥るを顧慮した。加之佛軍の一部は既に自軍の側背に迫るの状況に在つたので、已むを得ず、茲に佛軍と一戦を交ゆるに決した。

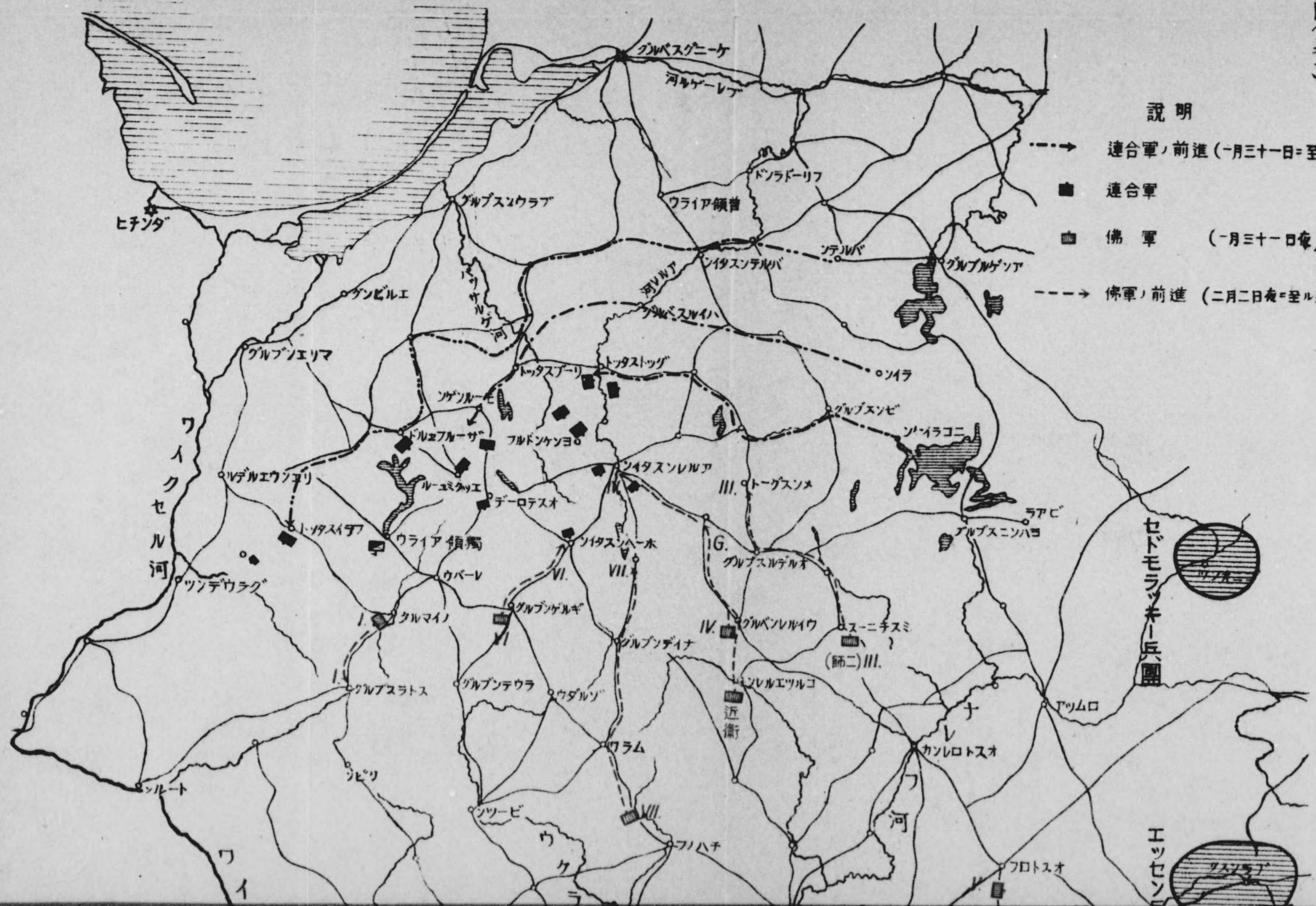
小評論

露將が初め脱兎の如く而かも其の行動未だ中央ならざるに、忽ち處女の如き退嬰に陥りたるは勇らしからざる振舞であるが、要するに自信に缺ける將帥は得て斯くの如き矛盾に陥り易きものであり、露將帥に多く此の現象を見るは其の國民性の然らしむる所大なるものありと思はれる。

之に對し奈翁が、急襲を受けつつも、直ちに之を利用して積極的行動を敢行するに決し、咄嗟に其の軍を動かすこと手足を使ふ如き跡を見得るは流石である。然し又、露軍が退却に巧みなる、奈翁が躊躇なく行動せるにも拘はらず、其のヨンケンドルフでは遂に長蛇を逸するに至つた。然るに不斷の追撃敢行は終に普領アイラウに於て流石の露軍も最早退却を續行し得ざるに至り不本意ながら一戦を交へざるべからざるに至らしめたる奈翁の活動は鮮やかで

一〇七市普領ウライア戦役行動要圖

第三三圖(其二)



説明

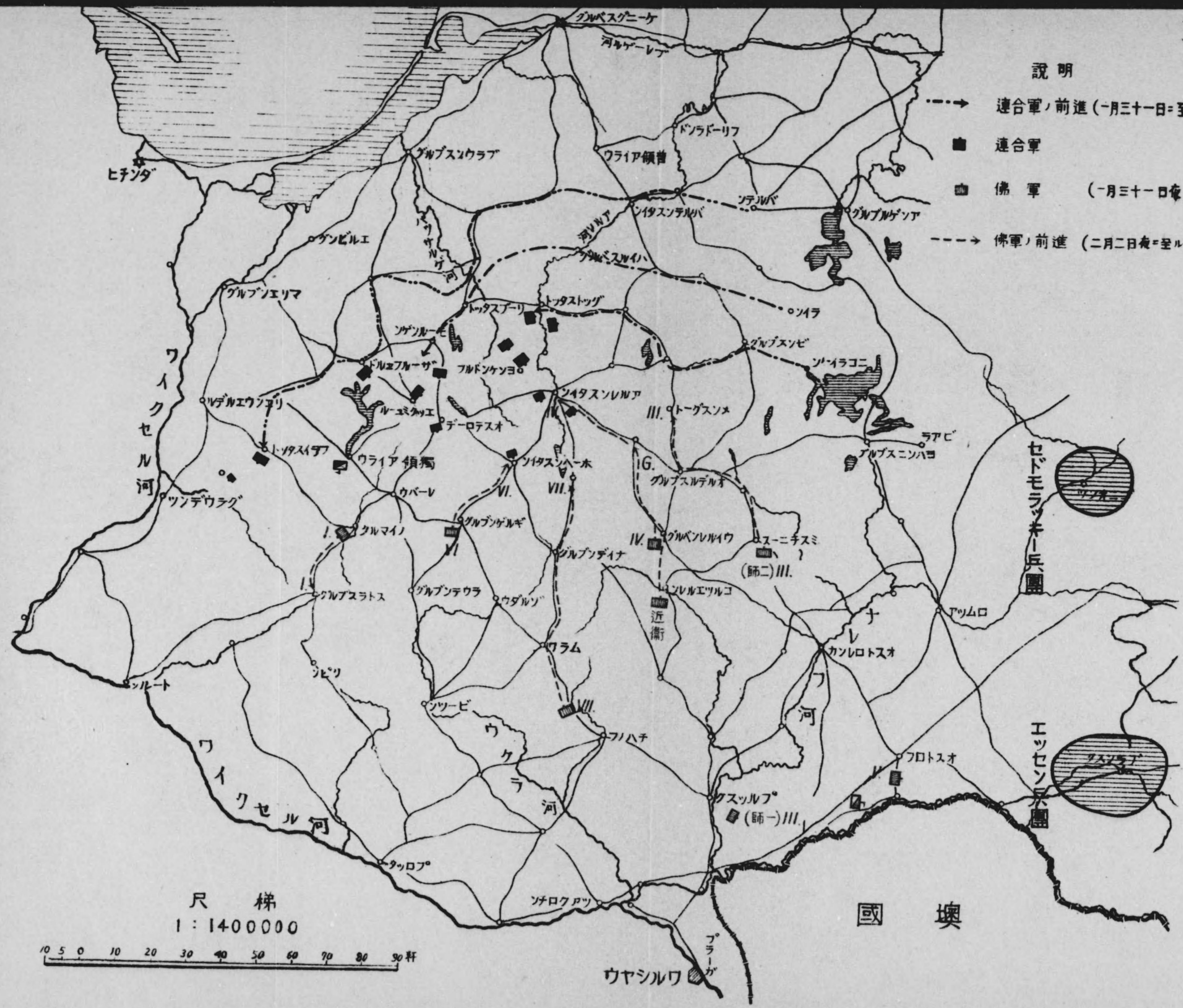
- > 連合軍ノ前進(一月三十一日=至ル迄)
- 連合軍
- 佛軍 (一月三十一日迄)
-> 佛軍ノ前進(二月二日迄=至ル迄)

セトモリツキ兵團

エッセン

説明

- > 連合軍ノ前進 (一月三十一日=至ル迄)
- 連合軍
- 佛軍 (一月三十一日迄)
- > 佛軍ノ前進 (二月二日迄=至ル迄)



尺 梯
1 : 1400000



國 境

ウヤシルワ



ある。然し其の裏面に於て軍隊が如何に大なる困苦缺乏に堪へつつ行動せるかに想到せねばならぬ。

今次の北支に於ける我が軍の行動が日露戦役の夫れに比し追撃行動特に見るべきものがあつたのは、痛快に思ふ。然し之が爲めに我が將士が如何に缺乏に堪へ、勞苦を嘗めしめられたかを想はなければならぬ。

四 普領アイラウ附近の激戦(第二十三圖其二 照)

露軍はアイラウの市街を前にし右翼シュロディッテン南方から左翼クライン・サウスガルテン附近に互る約三軒の正面を第一線とし、左側前方セルバルン附近に一部隊を配備し、砲六十門を右翼、七十門を中央、四十門を左翼に布置し、別に二師團と砲六十門を豫備として後方に控置した。總勢尙ほ七萬を算する。

奈翁は此の露軍を以て後衛なりと判断し、翌二月八日を以て之を攻撃すべく部署を定めた。然るに八日の朝攻撃前進を開始するや露の全砲兵より猛烈なる砲火を以て急襲せらるゝに至り、初めて其の眞面目なる抵抗であることを知つた。當時奈翁の手許に在る兵力は第四、第七、近衛の各軍團とミユラー騎兵團のみで、第三、第六軍團は少しく離れ、第一軍團は尙ほ百二十軒後方に

在りて戦闘の間に合はず、比較的戦場に近き第三軍團を加ふるも兵力は六萬に過ぎぬ。露軍の出様次第では佛軍は苦戦を免れぬ形勢に在る。

是に於て奈翁は第四軍團を以てロテーネン(アイラウ南方ノ部落)及アイラウの二據點を確保せしめ、第七軍團を其の中間に投入し、近衛及ミュラー騎兵團を豫備として第三、第六軍團の戰場來著迄持久するの策を執つた。而して第三軍團に對しては南方道路を経て急進し敵の左側に迫り、第六軍團に對しては露軍の右側背に進出すべく北方よりアルトホーフ(要圖西北端)に向ひ急進すべきを命じた。

間もなく第三軍團は露軍の左側に進出し來つたので、第七軍團の二師團に對して攻撃前進を命じた。然るに同軍團は正面より猛烈なる吹雪を受けて方向を誤り左方に斜行して露軍砲兵陣地の正面に現出した爲、不意に猛烈なる砲撃を受けて多大の損害を被り、再び舊位置なるアイラウ南方地區に撃退せられた。乃ちミュラー騎兵團の騎兵第六師團は之が救援の爲露軍の中央に向ひ突入したが、大勢は露軍に有利で、其コサツク騎兵の一團は近く奈翁の位置せるウインドミュールの丘阜に迫らんとするに至り、奈翁自身が危殆に瀕した。左右色を失ひ狼狽したが、流石は奈翁である、彼は神色自若として動ぜず、敵騎の勇敢を賞しつつ其の近衛一大隊を前進せしめ露騎兵

を驅逐せしめた。斯くの如く緒戦は佛軍の大失敗であつた。

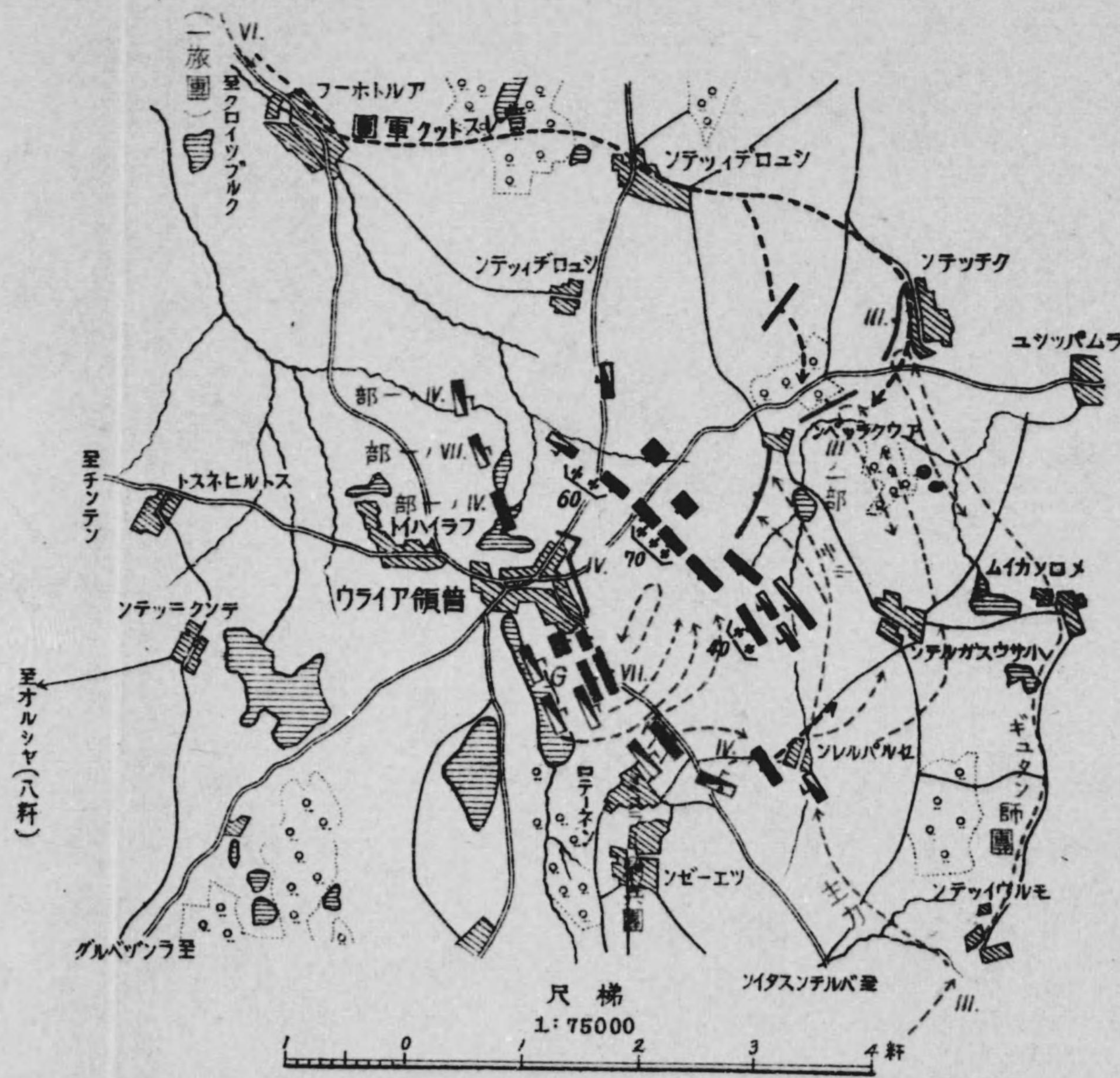
此の間第三軍團は露軍の左側背に突進し其の左翼は爲めに擾亂せしめられ、露軍も亦之によりて危殆に瀕した。此の處、佛軍の成功であつた。然るに恰も普のレストック軍團が北方から戰場に到着するや直ちに佛第三軍團に向つて投入せられた。此の時佛第三軍團は既に其の全兵力を使用し盡した後であつたので、奈翁ともする能はず、再びクラインサウスガルテンに撃退せられた。然し時恰も夜暗に入らんとし普軍の成功を阻止し得たのは、佛軍の爲幸であつた。併し要するに再び佛軍に危機が迫つた儘此日の戦闘は之で終幕となつた。然らば軍扇は露軍に揚げらるべきであらう。然し露軍の損害も多大であり全軍の三割半にも及び、二萬六千を失つた。佛軍の慘狀も亦其の戦況の示す如く決して露軍の夫れに劣らず、損害は三萬を算し、戦闘の結果は自軍に不利なものと奈翁も自認した程である。然るに露將ベンニグゼンは其右翼に佛軍の有力なる兵團が現存するを知り(實際佛第六軍團が南下中であつた)、同夜退却に就いた。戦場の主は、そこで戦績不振なりし奈翁軍のものとなつたのである。

五 戦闘後兩軍の行動

他の戦闘に於ては如何なる困難を冒しても奈翁は追撃を敢行するを忘れたことはない、然るに

普領ウライア附近戰闘要圖

於一八〇七年二月八日



第二十三圖(其二)

此の戦闘後、佛軍の疲労、糧秣の缺乏、解氷に依る困難等が理由となつて奈翁は一部を敵に觸接せしめたのみで追撃を行はなかつた。實は奈翁自身が敗戦を自認し唯第六軍團の到着により何とかして、戦機を捉へんとして最後の五分間を忍んだ。然るに夜が明けると露軍は意外にも退却したことを知つたが、最早精神的にも追撃の意思が無くなつたと思はれる。それ程一面に於て慘烈なる戦闘は想はしめる。是に於て奈翁は西方バツサージュ河邊に退却して冬營に就くに決し、若干日戰場附近に駐留した後、其占領地を捨てた。此の行動は部隊の志氣を阻喪せしめ、失望、思郷の念を増長せしめ、他の將帥ならんには恐らく反亂、解隊の危険に瀕したであらうことを想像せしむる程であつた。

ベンニグゼンは一旦退却したものの、奈翁が戰場を捨て去れるを知るや、又、のこゝと前進を始めて、戰場附近に顔を出しアイラウ附近に停止した。

六評論

此の戦役に就て露軍の通有的特徴を列擧すれば、

(イ) ベンニグゼンは露將中勇敢なる將帥である、が最初の痛快なる攻勢意志が未だ戦はずして挫折し徹底を缺くの點に就ては、庸將の常とは謂ひながら露將に多く此の弱點を見る。

(ロ) 奈翁の迅速機敏なる作戦行動に對してすら巧みに夜間退却を行ひて離脱するの得意は、ヨ
ンケンドルフ附近でも示して居る。大體彼等が鈍重であるに拘はらず、逃げる動機に就ては
巧みなりと謂ふべきである。

(ハ) 然し奈翁の超人的大追撃、徹底的壓迫行動の前には流石の退却名人も遂に捕捉せられ一戦
を交へなければならなくなつたのは、露軍の退却不得手にあらずして、猛烈不斷の追撃が之
を然らしめたものである。

(ニ) アイラウの戦闘は疲勞甚だしき露軍としては能くも執拗に戦ひ、靱強なる戦闘を敢行した
と賞揚せざるを得ぬ。此の種の戦闘能力も亦露軍の通有であり、悔り難き力である。「防戦
に偉力を發揮す」是れ吾人の忘るべからざる事項である。

此の外、佛軍側に於てネー(第六)軍團長が戦略上の判断を誤つて戰場に向はず、爲めに參戦の
機を失し佛軍を危殆に瀕せしめた如き教訓もあるが、詳細は之を省略する。

要するに此の戦役に於ける露軍の行動は其の執拗なる防戦力を有する例證として特に注目し値
するものである。

第六 Heilsberg 附近の戦闘 (第二十四圖其の一)

(其の二参照)

普領アイラウの激戦後、兩軍は各、冬營に就き一時事實上休戦の状態に在つた。其の大體の配置は第二十四圖其の一の通りである。冬營中、若干の小衝突、小移動はあつたが、大局に於ては變化なくして経過した。

奈翁は、六月十日を以て攻撃の爲行動を開始すべく其の準備を整へつつあつたが、露の勇將 Bennigsen は前回の苦戦にも懲りず、先鞭をつけて六月五日其の作戦行動を開始し、先づ佛軍中最も突出して位置せる Ney 軍團を急襲する目的を以て圖示の如き部署を以て進發した。然るに露軍の慣例とも謂ふべき各團隊の協同動作を缺きたると、其の行動の緩漫なりし爲 Ney 軍團は何等の損害も受けず準備を整へて Passarge 河の左岸に移り得た。之で其の目的たる急襲は不成立に終つた。奈翁は六月八日に至り強大なる敵が Deppen-Gutstadt 街道に沿ひ南方 Schilt に向ひ前進しあるを知り、同時に敵は大體に於て退却の準備中であると判断し、直ちに使用し得べき兵力を擧げて之を追撃するに決した。

而して翌九日朝迄に使用し得べき兵力は、圖示の如く Ney、近衛の軍團、Murat 騎兵團、Lannes の一師團 Davout の一師團半、Soult 軍團丈けで、其他の六、七師團は今直ちに使用するを

得ぬ。

堂々と前進を始めた露軍も、一旦 Ney 軍團を逃がした後は急に攻撃的意思を喪失し、佛軍が大舉前進し來るであらうことに恐れを懷き、八日夜に Heilsberg に向つて退却するに決し、Bagration 兵團を後衛となして其途に就き、十日朝に至り九萬の兵を Heilsberg 附近の陣地に集合せしむるを得た。此の附近の陣地は Alle 河右岸では其の南方正面が最堅固であるが、左岸に於ては比較的薄弱なる堡壘を以て市街を半圓形に圍んでゐるのみである。

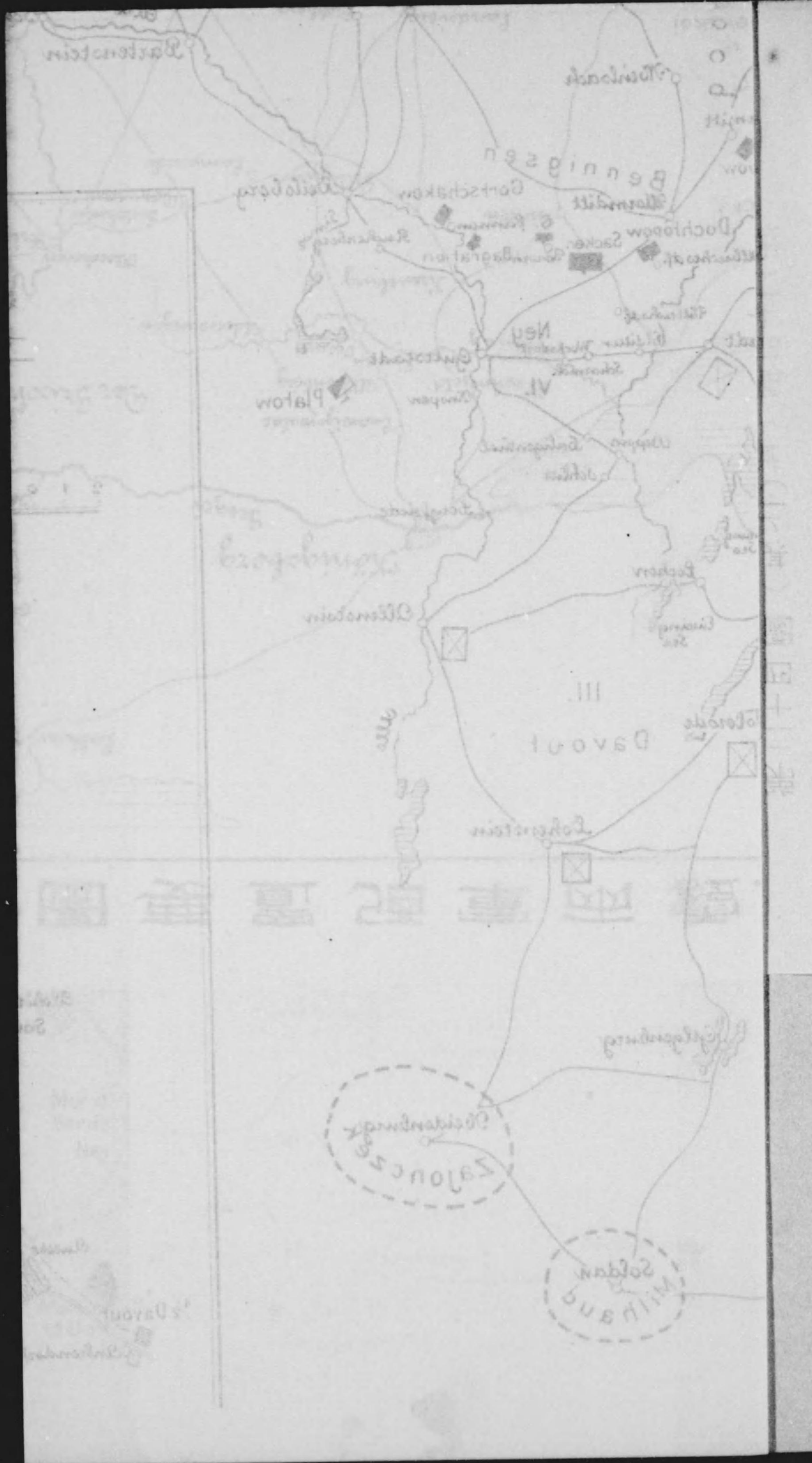
佛軍では Murat 騎兵團を先頭とし Ney 軍團が之に續行し Deppen を經て前進した。Soult 軍團は Woensdorf を經て Gutstadt に向ひ前進し、途中 Ankendorf 其他の露の Bagration の抵抗を排除しつつ前進した。斯くて奈翁の大なる努力は九日夕を以て佛軍の殆んど全部を集合するに成功した。

Heilsberg 附近戦闘の概況

奈翁は九日夕に於て敵が何處に停止しあるやを知らず又其の企圖を推斷する資料をも得なかつたが、此の不明の情況中に於ても徒らに逡巡することなく、露軍と普の敗殘軍とを分斷する目的を以て全力を擧げて Alle 河左岸(西岸)を前進した。而して此の前進は、道路の關係もあつたが、

十五萬の軍を單に一縱隊を以てしたので、十日の夕に於て Heilsberg の前面に達したのは僅かに全軍の一部分に過ぎぬ。而も後尾は尙ほ Guttstadt に宿營しある有様であるから、全員を Heilsberg 附近に集める爲めには三日間を要する。

Murat 騎兵團は十日敵の後衛の占領せる Langwitz の前方に達し、歩兵の到着まで待機し、Soult 軍團は續して到着、一部は迂回、一部は正面から攻撃を始めた所、霰彈射撃を蒙つて撃退せられ同軍團最後の師團をして更に正面から攻撃せしめたが是亦失敗した。此の間 Bagration は Murat 騎兵團及 Soult 先頭師團の迂回を顧慮し本隊方面に退却し、第一、第二堡壘間に收容せられた。佛軍は前敗を雪辱すべく攻撃を再興した。然し先頭たる Legrand 師團及近衛歩兵旅團は第二號堡に向ひ突進した。此の攻撃は初めは Alle 兩岸の敵砲兵から十字火を浴せかけられて失敗し最後に第二號堡のみ辛うじて之を占領するを得た。然し其の成功も東の間で露軍得意の局部逆襲で再び奪還せられ結局何等の獲得もなくして戦況は不振に陥り、結局 Spuy 河西方に退却した。次で Lannes 軍團の一師團が到着したので第二號堡の攻撃を再び敢行した。之も初めは有利の形勢に在つたが、露の一師團から逆襲を受け又撃退せらるるの不善尾を重ねた。斯の如くして、此の Heilsberg の攻撃は佛全力が優勢であるに拘はず常に寡兵を以て優勢と戦ひて失敗を

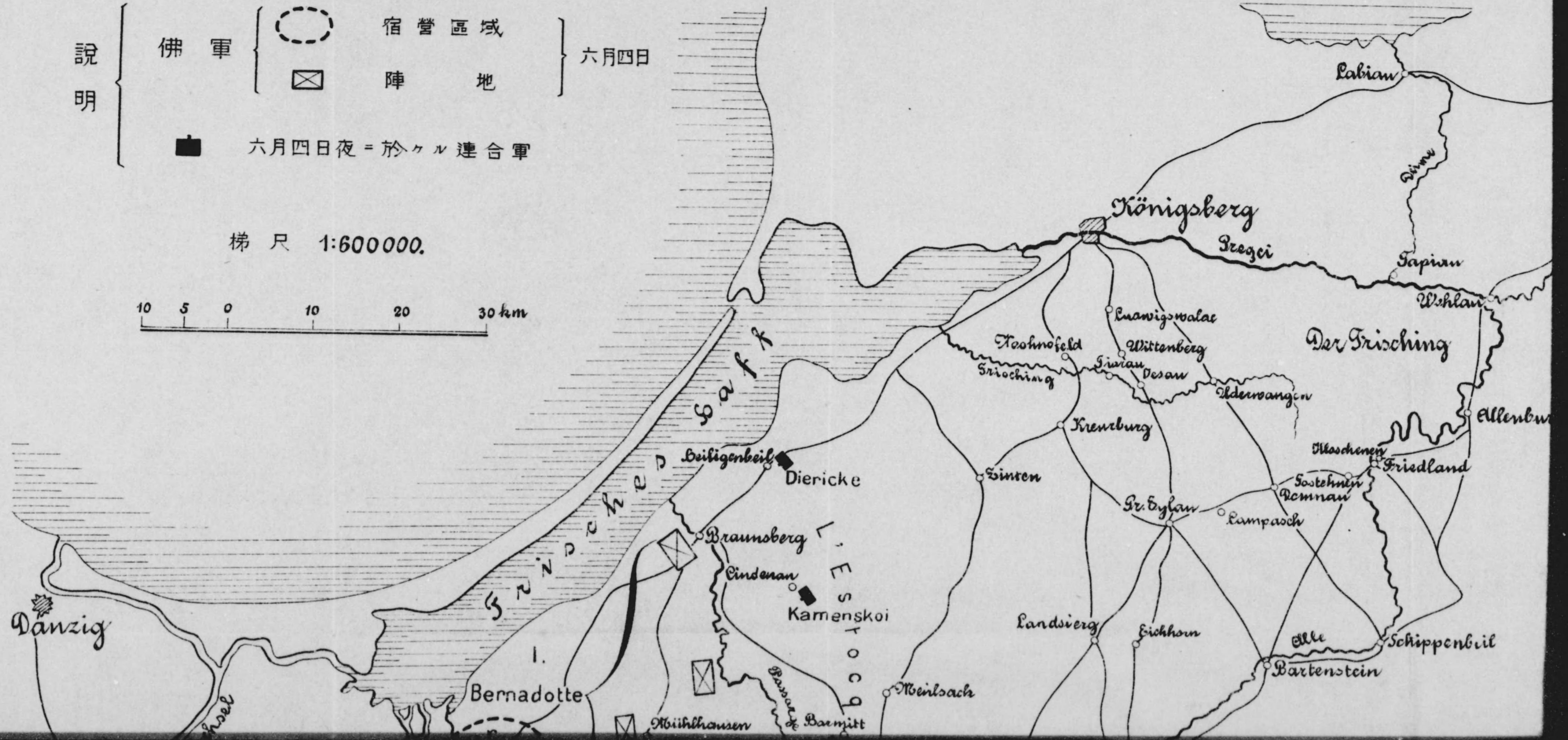


佛.露兩軍配置要圖

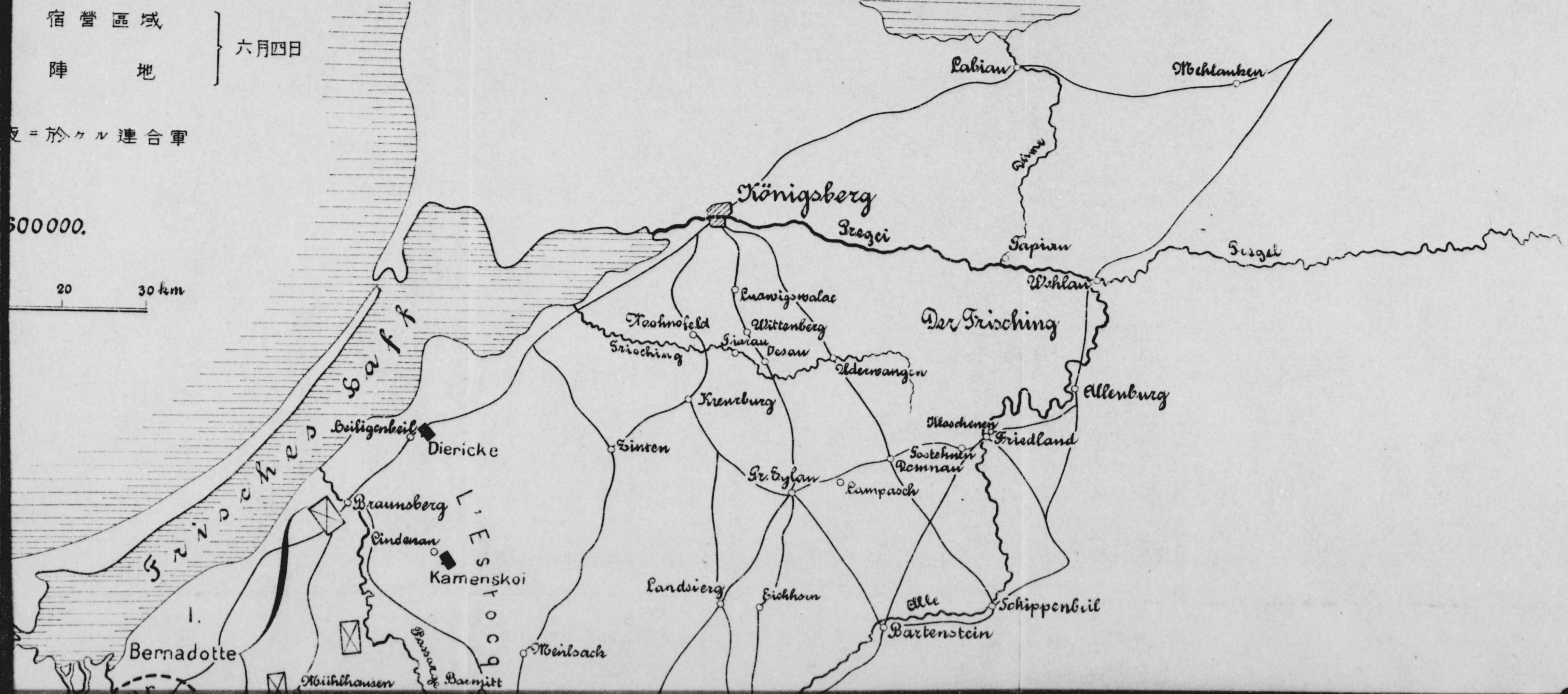
說明 { 佛軍 { 宿營區域 }
 { 陣地 } 六月四日
 { 六月四日夜 = 於ケル連合軍

梯尺 1:600000.

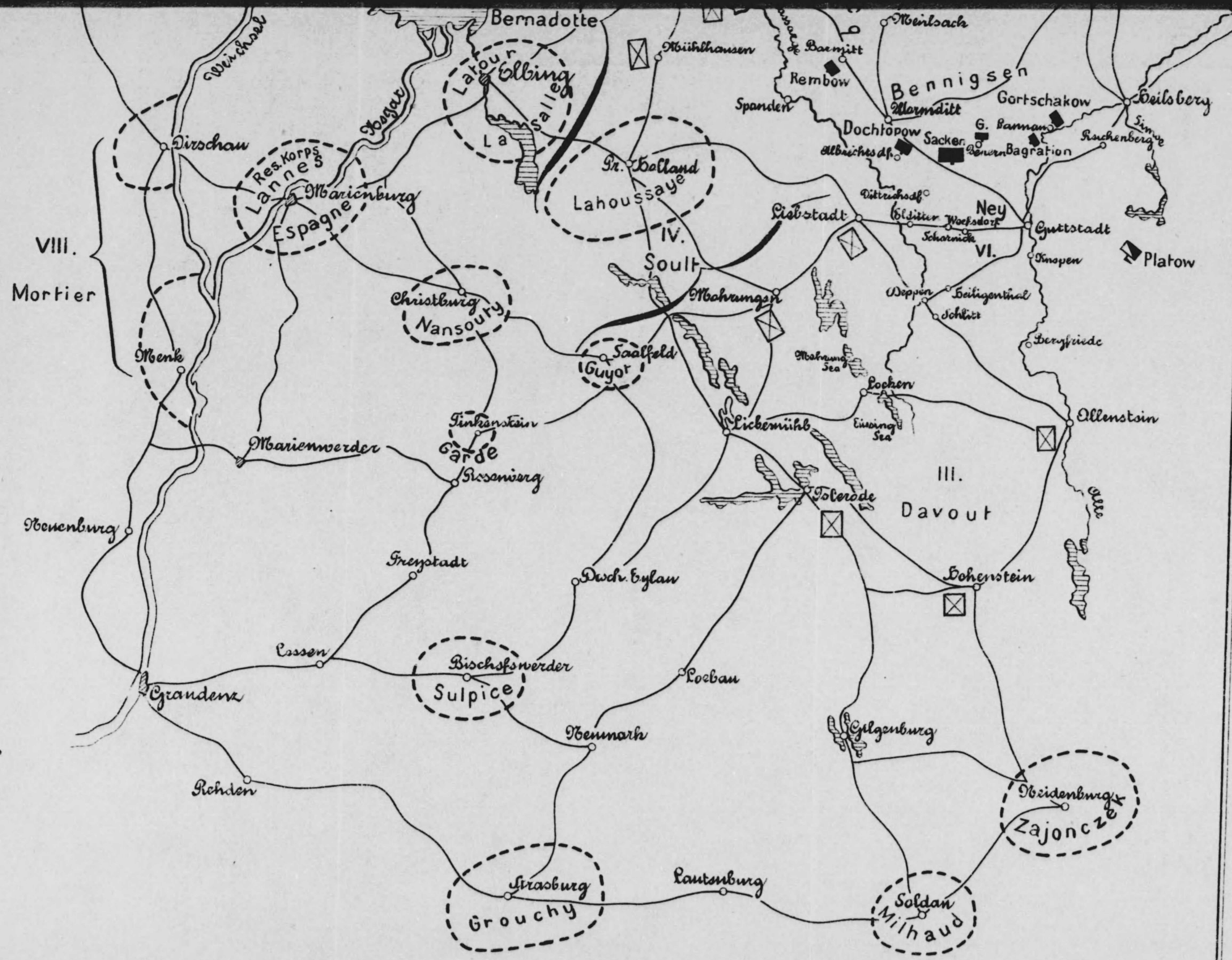
10 5 0 10 20 30 km



佛.露兩軍配置要圖

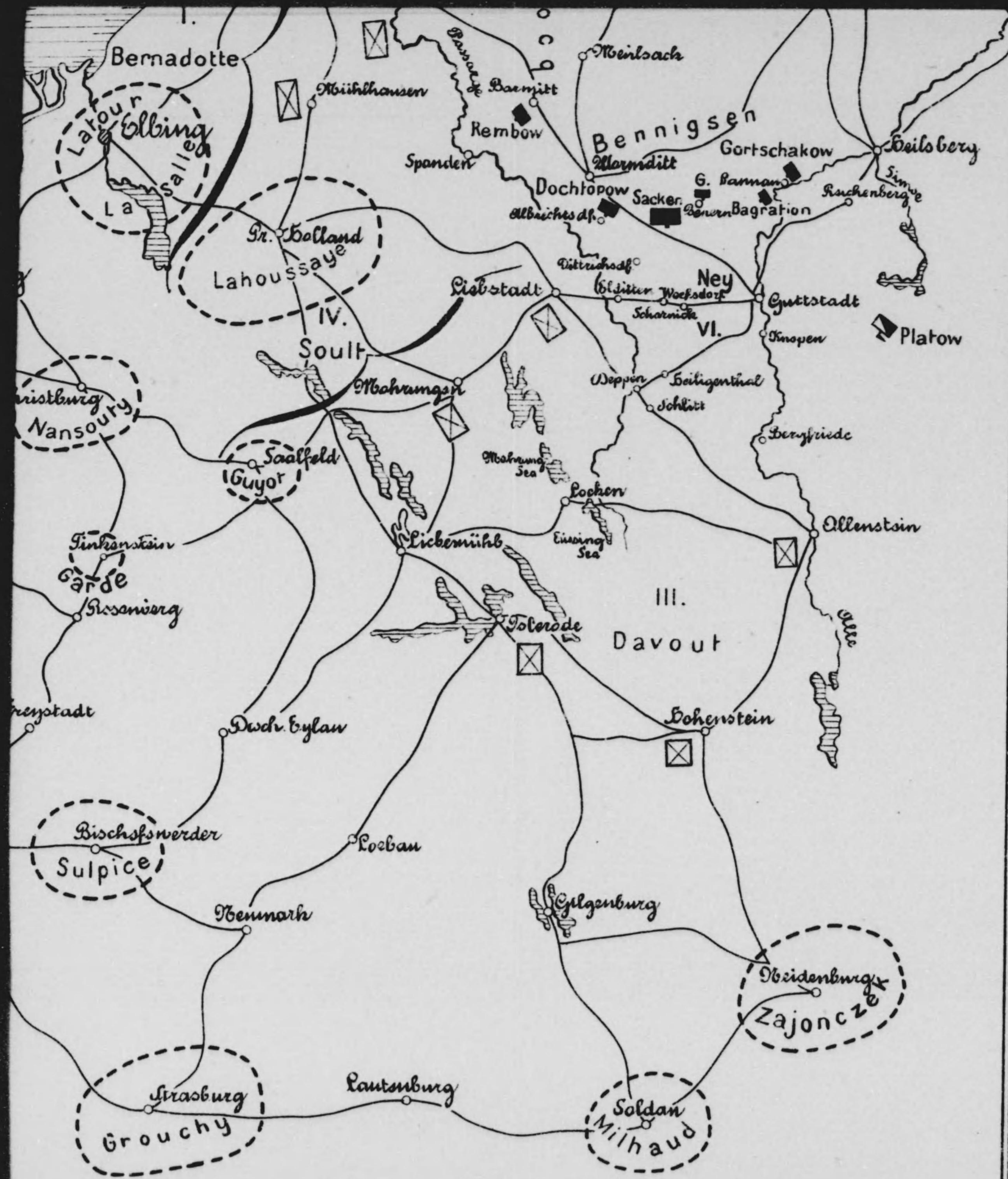


第二十四圖 (其一)



Silesien
一八〇七年六月十
梯尺 1:20000
2 1 0 2 4 6

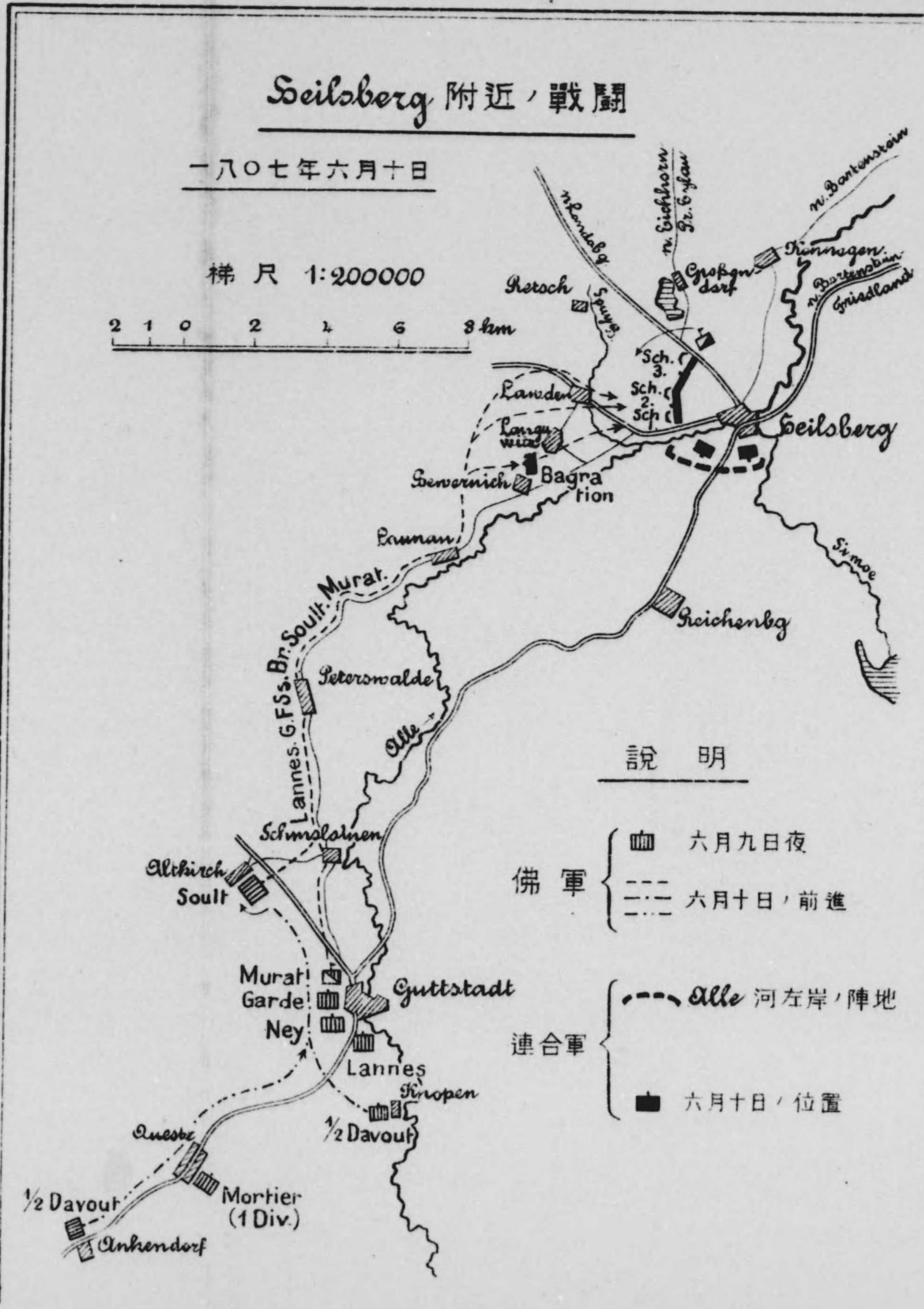
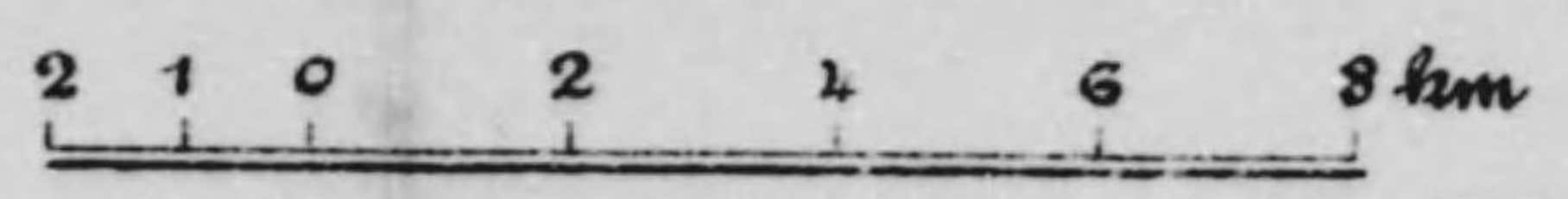




Seilsberg 附近，戰鬪

一八〇七年六月十日

梯尺 1:200000



說明

- 佛軍 {
 - ▣ 六月九日夜
 - 六月十日，前進
- 連合軍 {
 - - - Alle 河左岸，陣地
 - 六月十日，位置

第二十四圖 (其二)

重ね、爲に既に一萬二千に上る大損害を蒙つた。

評 論

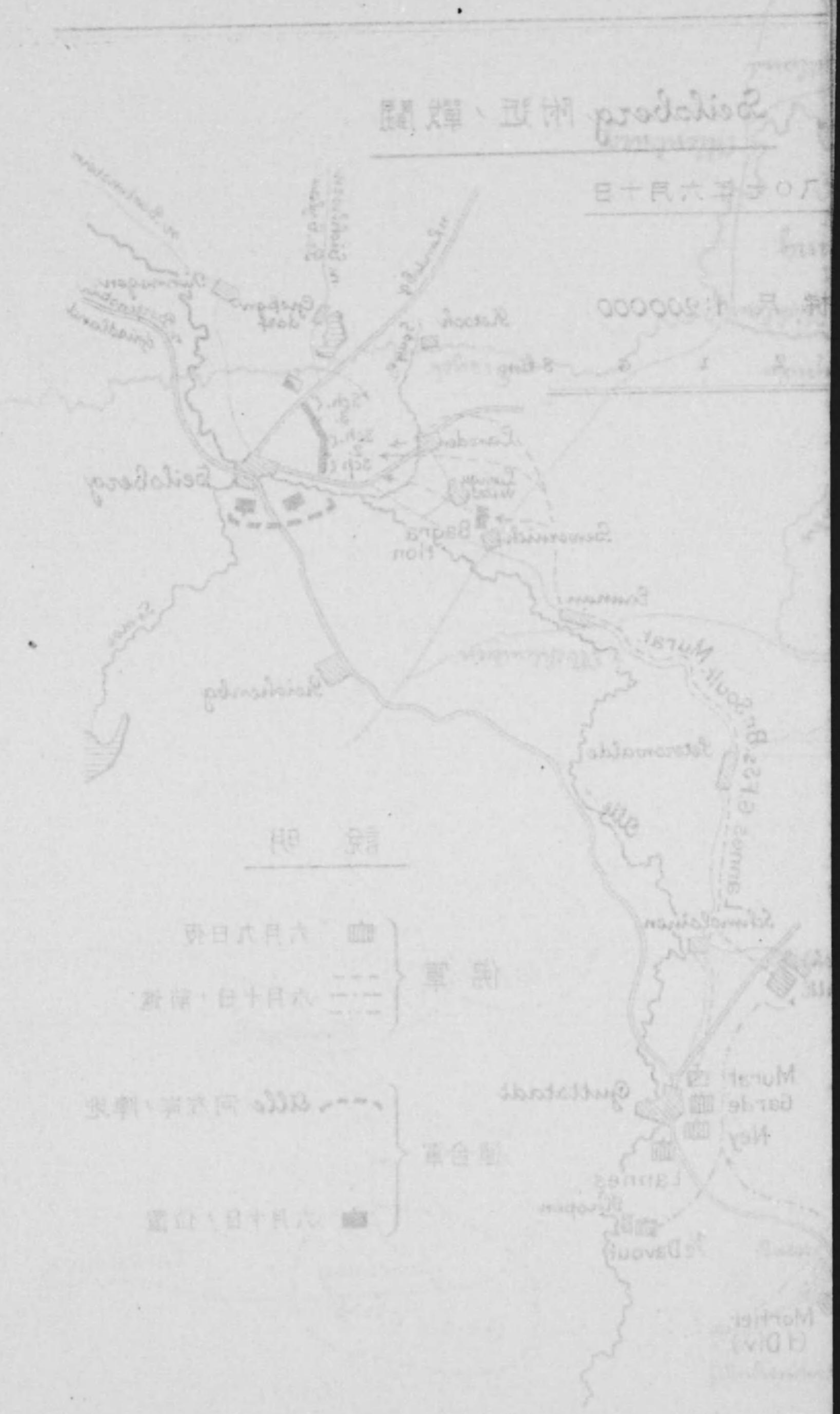
此の戦闘は次回に研究する Friedland の戦闘に於ける前奏曲であつて、別に大した戦闘でもないし、世人の多くは知らないであらうと思ふが、對露戦法の研究の上には苦き経験丈けに寧ろ教訓の價値が大きいと思はれるに依つて、特に一項を設けた所以である。

戦況に依つて誰しも感ずるであらう如く

一、Bennigsen 將軍が、前回にもブルツスク戦役で最初は積極的意思を以て堂々と前進を開始し先制の利を占めながら、いざと云ふ場合になると一戦を交へずしてアルレンスタイン附近に退避した如く、今回も最初は先づ攻勢に出でながら、軍團を捉へ得なかつたので直ちに退避作戦に轉じた。蓋し露人の通性として根本的方策乃至作戦計畫を確立することなく、途中で其の意思を極めて軽く變換して平氣で居るものが少くないことの一例である。

二、Heilsberg に停止した後、佛軍が一縦隊で前進し、而も兵力を集結せざる前に部分的攻撃を敢てしたとき、露軍得意の部分的逆襲を反復し、其の都度局部的成功を收めたことは、殆んど何れの戦例にも現はれて居る。吾人は此の點には常に著眼して、萬不覺を取らざる様心懸くる

第二十四圖 (其、二) 露軍の退却



と同時に、敵を誘出して決戦を交へんとする如き場合には、故意に我が劣勢を示し彼をして其の得意なるべき逆襲などを行はしめ之を逆利用することも考へ置くべきである。

第七 Friedland 戦役 (第二十五圖其 一、其二参照)

Heilsberg 戦闘後の追撃、退却

露軍の揃ひも揃つた凡庸の將中一異彩を認め得る Bennigsen は、Heilsberg で奈翁に一泡吹かせたる後、愚圖々々して居ては、大返撃が恐ろしいと、奈翁の眞面目なる攻撃開始に先だち、其の夜を利用して得意の退却をなすべく決した。之れは自己の力量を知れるものとして寧ろ適當な決心であらう。而して其の退却方向の選定には二様の案がある。即ち

- 一は Friedland を經つ Alle 河に沿ひ Wehlau を經由するもの
- 一は 北方 Königsberg 方向に退却するもの

である。前者は自國領に向つて自然の方向に退くもので、普國領は敵に委するものであるので、同盟普國の爲めには氣の毒である。然し後者の案を採つたならば普國首都の前面で一戦を交ゆべく普國の爲めには萬一を僥倖して自國を可及的長時日保有するに便なる代りに、一旦敗戦の曉には北方に壓迫され、奈翁得意の包圍的運動に依つて海に突き落され、全滅を招くに至るであら

う。然らば露軍司令官たるもの左程の危険を冒してまでも火中の栗を拾ふが如き義侠心の持ち合はせのないのは明白である。

そこで Bennigsen は、前者の案則ち Friedland に向ひ退却するに決し、獨り敗殘の普軍のみを其の Königsberg に向はしめた。連合軍の弱點として致し方なき次第である。

一本喰はされた奈翁は、翌十二日朝に至り始めて當面の露軍が既に早く退きたるを知つた。殘念ながら直に一撃を與ふるの機を失し、追撃の幕に入った。即ち先づ騎兵一師團半を Alle 河の東岸から追撃せしめ、軍主力は同河の西岸地區を経て先づ普 Eylau 領に向はしめた。奈翁の意圖は普、露兩軍を分断せんと欲したのであつた。

小評論

多くの兵家が奈翁の追撃部署を非難して曰く、露軍の退路を扼する爲め主力は須らく Alle 東岸に進めなければならぬと。然り結果より見れば或は至當の策であらう。然し當時の實狀を考へたならば、情況は全く不明で、敵の退路の如きも之を知るを得なかつたのであるから、平凡なる指揮官ならば暫く現位置に停止して情況の明瞭となるを待つるの策に出でたであらう。然るに奈翁は、Bennigsen が普の I. Estocq 軍と合して一戦を試むるであらうと判断(此判断は適中せざりしも)し、之を隔離、分断せんとするの主義を以て行動を律した點に

就て、吾人は共鳴するものであり、狐疑、逡巡の害に比して優ること萬々であると信ずるものである。

却説奈翁は十二日午後運動を開始し、Murat 騎兵團を以て普領 Eysiau に達したが、其の他は遙かに後方に在つた。然るに偶、普の L'Estocq 軍が西方 Tinten に在るの報に接したので、之を Königsberg 以南に遮斷する目的を以て各兵團が此の方面に轉進した。先づ Murat 騎兵團も西北方に向ひ、Davost, Soult の諸軍團も之に倣つたので、十三日に於ては L'Estocq の三師團に對して佛軍は八師團を向けたことになつた。従つて Bennigsen に對する兵力は著しく減少せらるるに至つた。然るに、普軍遮斷の目的は達せられずして彼を損害なく Königsberg に逃入せしめたのは、佛軍としては不手際であつた。

此間佛軍主力は普領 Eysiau 附近に集結し唯 Lannes 軍團のみ東方 Domnau に達し、其の騎兵は Friedland に進入して、同地の倉庫を破壊せしめんとしたが、此の時既に遅く露軍は此の日早朝 Schippenbeil (Friedland 南方二十料) を發し正午頃 Friedland に到着するや、佛の騎兵を驅逐して市街内に入つた。蓋し Bennigsen は、軍が疲労の極に達せる爲、休養上の顧慮から再び Alle 河を西岸に渡つて同市街に入つた譯である。

佛軍では十三日夕刻に至り有力なる露軍騎兵が Friedland に進入したとの報によつて始めて敵情を確むるの端緒を得た。そこで佛の全軍團は連日の長途行軍による疲労甚だしきにも拘はらず、十三日夜運動を起して方向を Friedland に採つて前進した。

十四日午前一時 Lannes 軍團は Oudinot 及 Grouchy の騎兵と共に Friedland の前面に達し、露の前衛を撃退した後、持久戦をなして後續部隊の到着を待つた。午後に入り二軍團と一師團とが到着した。

露軍でも到着する兵力を Alle の東岸から續々と西岸に移し、其の第十四師團と騎兵、砲兵の若干とを東岸に残したのみで他の全力即ち四萬六千を左岸地區に展開せしめた。其の退路は僅かに Alle 河に架せる二箇の橋梁のみであるから、恰も是れ背水の陣に等し。

小評論 敵情の不明は佛軍をして右往左往の行動をなさしめ、更に其の疲労を倍加したばかりでなく、何れの敵をも遮斷し得ずして終つた。敵が無爲の軍隊であり無能の指揮官であるから危険も少ないが、有爲なる敵に對しては實に危険である。搜索、偵察の敏速正確なることの要を痛感する。

又露將が折角敵の遮斷を免れたるにも拘はらず、自から Alle の西岸に渡り、敵に直面する

に至らしめたのは、自から危地に陥つたものと思はれるが、又 Bennigsen が前數回の小勝に自信を得て此處でも復た勝利を得べきを空想したのであらう。然し今回は佛軍の兵力も倍加して居り自己の陣地も他の場合に比して有利でない。従つて勝敗は殆んど明瞭である。

Friedland 戦闘

圖示の如く露軍の陣地は Friedland の西側で、Müllenflietz なる小流の北方は四師團、其の南方に三師團を配置し、別に一師團と騎兵及砲兵の若干を Alle 河の右岸に控置した。

奈翁は Heilsberg の失敗に鑑み、直ちに眞面目なる攻撃をなすことを躊躇した。然し愚圖々々して居ると露軍一流の逃げに出らるれば之を撃破するの機を失する。従つて奈翁としては此際に於ける手段に苦心したであらう。

奈翁は其の前進中に在る各兵團合計八萬七千の來著を待つて攻撃するの意圖を有して居たので、攻撃命令は午後二時に下したが、其の攻撃開始は午後五時とした

小評論 之は奈翁が最初敵の兵力を過大視したのみならず、Bennigsen が普軍と合する爲、Mörsberg 方向に轉進する目的を以て其の進路を拓く爲めに或は攻勢に出るかも知れぬと判断したのであつた。此の判断は慎重に行動を律する爲には至當な考へ方であるとも謂ひ得る

であらうが、露將たるもの自己の全滅を賭してまで斯くの如き冒險を敢行するやは疑問である。要するに敵情判断は適中せぬ場合が多いことは屢々述べた所であるが、此場合も亦其の一つである。

然るに其の後の偵察により敵の兵力は必ずしも全兵力の到着を待つ必要なきこと明白となつた。さうなると敵の夜間退却が懸念せられる。依つて午後五時斷然攻撃著手を命じた。攻撃部署は概ね圖示の通りで、Müllenflietz 北方では Mortier の第八軍團及 Grouchy の騎兵師團のみを當てて牽制に任せしめ、南方に主力を配して攻撃した。

是に於て Ney 第六軍團長は露軍の最左翼に在る獵兵を Sorlach 森林から驅逐し少しく左に旋回しつつ森林より進出するや、俄然として Alle 右岸に在る露の砲兵群から猛烈なる側射を蒙り、又正面からは敵騎兵が第一師團と共に逆襲を敢行して來た。流石の擗猛將軍 Ney も此の不意打に力支へず敗退の餘儀なきに至つた。然し幸にも Latour 騎兵師團の救援により辛うじて其の戦勢を維持し崩壊を免れ得た。

此の時佛第一軍團の Dupant 師團が戰場に到着し、之に力を得て Ney 軍團も前進を再興した。佛軍の戦勢は爲めに大に挽回せられ、露軍の左翼三師團は Alle 河の彎曲部に壓迫せられ頗る苦

境に陥つた。

斯くの如く露軍は左翼に於て窮境に立つたが、右翼方面では優勢なる兵力を擁して戦力尚ほ餘裕がある、とすれば、須らく豫備隊をも加へて堂々と出撃すべき時機ではないか。然し之は冷静に観察したるとき湧き出づる考で、此の窮境に在る方面に頭を悩ますとき他方面を顧みるの餘裕がなくなるのを凡人の人情とする。

Bennigsen も亦左翼方面の戦況に眩惑した。即ち全隊に向つて退却が令せられた。露將 Batiou は退却掩護の爲 Friedland 前方市街に放火せしめたるに、誤つて橋梁をも焼棄したので、多數の自己軍隊は爲めに Alle 河の鬼となつた。

小評論 露軍の退却は過早であり、尙ほ爲すべき手段もあり、施すべき術もある。殊に橋梁までも焼き落したなどは狼狽振りが思ひやられる。吾人は之を一笑に附することなく戦場に於て起り易き事象として記すべきである。

露軍右翼四師團の指揮官 Gortschakow は、Bennigsen の退却命令を受領したが、自己正面の戦況上退却の理由なきものとして尙ほ戦闘を繼續しつつあつた。然るに愈々退却に就かんとするに際しては、最早 Friedland の市街は激戦の巷と化して近寄れず、已むなく退路を北方に取つたが、

衆相争うて Klosschenen 附近の淺瀬を涉らうとして大混亂を惹起し、多數の損害を生じた。

斯くして Friedland の戦闘は、露軍の大損害を以て終結し、次で一八〇五年以來の戦役を終ることとなつたのである。

此結果露軍は物質的には大なる分割もなかつたが、普國は Rhein 河と Elbe 河との中間區域を佛國に割譲し常備兵を四萬二千に制限せられ、一億三千萬法の償金を課せられて僅かに滅亡から救はれたのみの哀れはかなき状態に墮した。

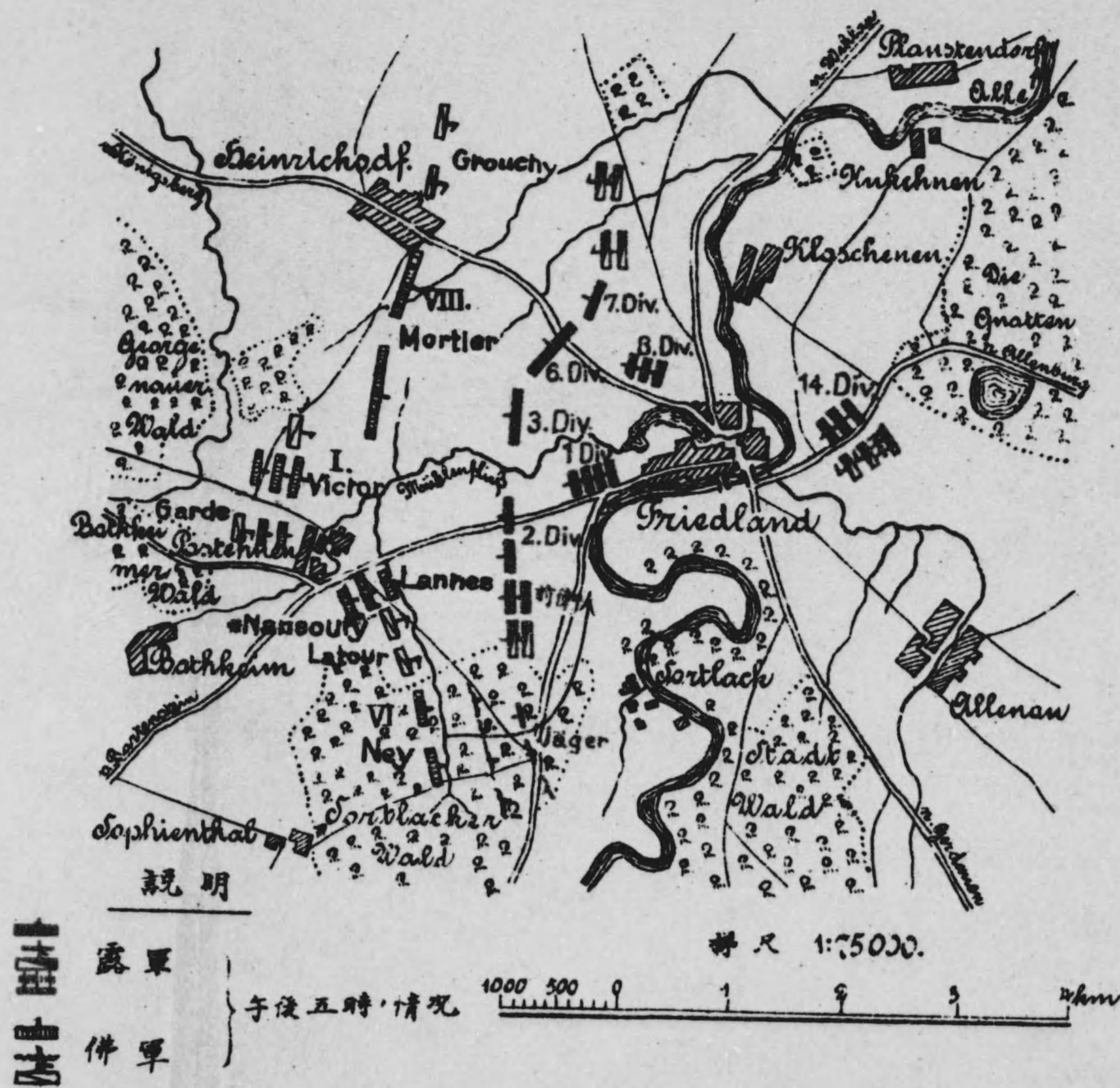
評 論

此の戦役に於ては露軍の特質として擧ぐべき程の事項もないが、他の戦役の夫れと併せて通觀すると、露軍が防禦に粘り強き點も窺ひ得べく、指揮官が戦機を看破するの明に缺けあること等一脈相通するものあるを知り得るであらう。詳細の評論はくどくどしくなるから之を省くこととする。

第二十五圖の第一



一八〇七年六月十四日 Friedland 附近、戦闘



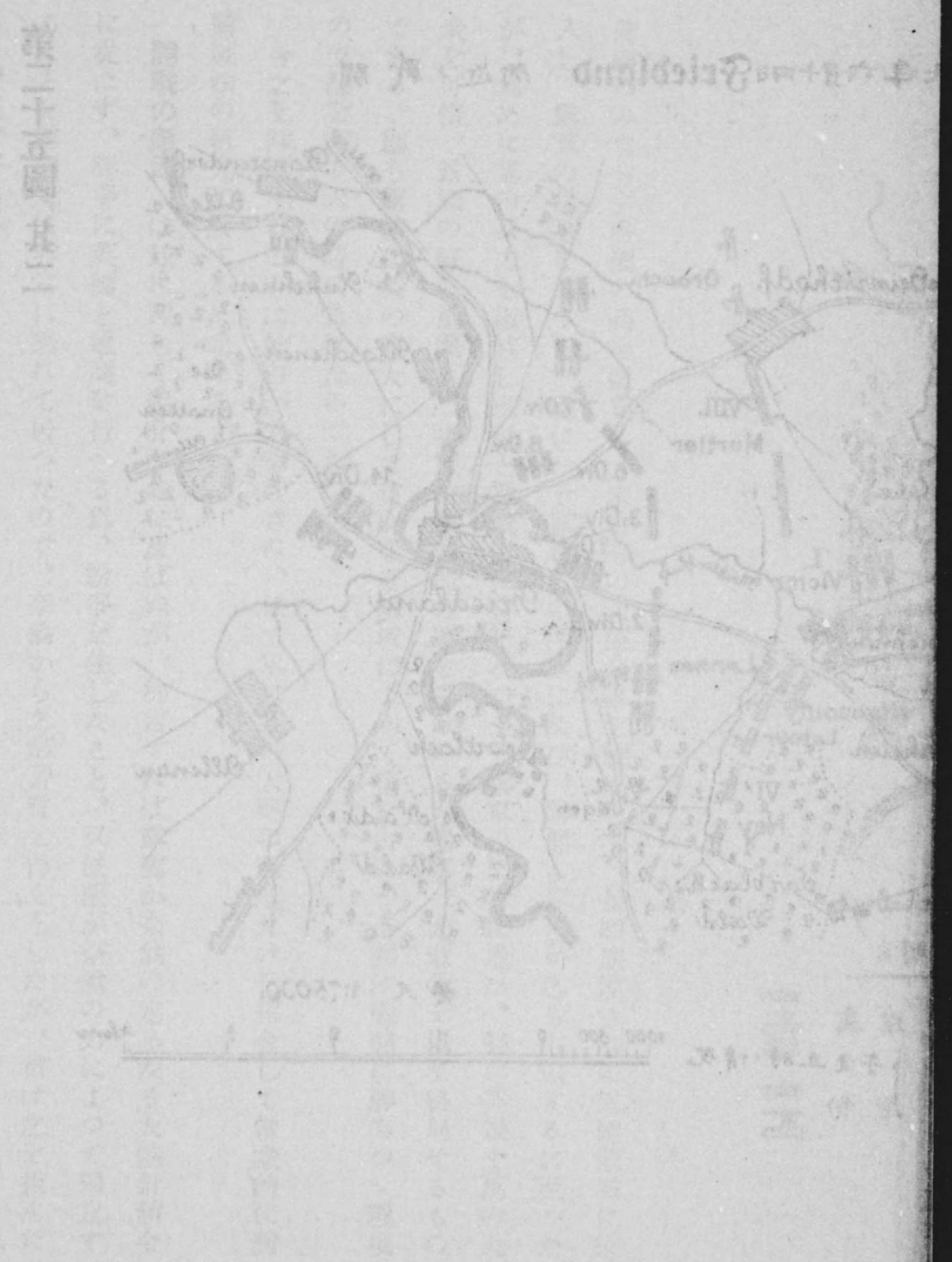
第二十五圖 其二

第八 一八一二年奈翁大敗戦役の概要

此の戦役は、奈翁が歐洲大陸の殆んど全土を事實上自己の配下に收め、君主中の大君主として佛國のみならず各國の兵を徴集し、未曾有の大連合軍を編成して、長驅廣漠無涯の露國領域に進入し、露軍の退避を追うて、遂に一千數百軒の深きに及び、露都 Moskau 迄も占領するに至つたが、爲めに軍の兵力を極減し寒氣と饑餓とに苦しみつつ、露軍の反撃に遭ひ、終に其幾十萬の大衆を可惜、露國の野に遺棄し、事實上殲滅的打撃を受けたる大慘事、大敗北を以て終局せるものである。即ち露國は其の廣大にして貧弱なる領域によりて捷を占め、奈翁は戦闘に勝ちつゝ環境の支配を蒙り天の時に負けたのであつた。

今之を詳述することは餘白が之を許さぬ、依て單に其の大略の筋道だけを紹介して常識的に對露戦法の研究に資するに止める。

開戦の原因 は茲に詳しく紹介するに及ばぬが、約言すれば露國が奈翁の定めたる大陸封鎖令に従はず、勝手に英國と通商を行へる爲、紛争を生じたこと、又波蘭が奈翁の力によつて獨立することを露國では非常に恐れて居つたので、奈翁から之が言質を得んとしたが、彼は之を拒んだこと、又、奈翁が皇后ジョセフィンの子なきを理由として離別し、露の皇妹を望んだが、當てが



外れて拒否された、そこで奥國皇帝の皇女マリア・ルイゼと結婚した、之が爲め露國をして孤立の淋しさを感じしむるに至つたことなどが、原因の有力なるものとして擧げ得る。當時の國際關係によると、露國の味方には英國を始めとし土耳其、西班牙及瑞典等があつた。其の他は奈翁の勢力に屈せられて心ならずも從屬して居る國々もあるが、歐大陸の殆んど全部が其の傘下に集る有様であつた。

兩軍の編成及集中(第二十六圖參照)

佛軍の編成 一八一二年三月奈翁は軍の戦闘序列を下令したが、其の編成の大要は概ね次の通りである。

大元帥	奈翁
近衛軍團	四七、〇〇〇人
第一軍團	七二、〇〇〇
第二軍團	三七、〇〇〇
第三軍團	三九、〇〇〇
第四軍團	四五、〇〇〇

第五軍團	三六、〇〇〇
第六軍團	二五、〇〇〇
第七軍團	一七、〇〇〇
第八軍團	一八、〇〇〇
第九軍團	三三、〇〇〇
第十軍團	二三、〇〇〇
奧國軍團	三〇、〇〇〇
騎兵集團(四軍團)	四〇、〇〇〇
合計	四七五、〇〇〇

但し第九軍團は後れて續行したから、最初の兵力は四十四萬二千である。
露軍の編成 一八一二年五月其の戦闘序列を下令した。編成の大略は次の通りである。
 大元帥 亞歷山皇帝
 第一西軍 司令官 Barclay 一一一、〇〇〇
 第一乃至第六軍團

第一、第二騎兵團	
第二西軍 司令官 Bagration 三七、〇〇〇	
第七、第八軍團	
第四騎兵團	
第三豫備軍 司令官 Tomassow 三四、〇〇〇	
Kamenskoj 軍	
Markow 軍	
Sacken 軍	
Rambert 騎兵團	
別に	
Platow の指揮する哥薩克兵一萬を有す	
合計	一九二、〇〇〇

尙ほ開戦に際し國內には實に約四十三萬の大兵(右記の兵力を含む)を散在せしめてあつたが、其の内、第一線に使用し得たる兵力は僅かに十九萬二千に過ぎなかつたのである。

小評論 奈翁の大軍編成は其の兵力が未曾有の大衆を擁せること、各國軍の寄せ集めなることに依つて特異とする。大衆を網羅することは、戦力を増大する所以であり結構なことである。併し、各國軍の展覽會的編成に就ては、原則上面白からざることであり、動もすれば極めて危険なる弱點を表はすものである。従つて、此の意味に於て奈翁の大軍編成を観察すれば、其の數の多きに比し實力は之に伴はざるものとして評價し得る譯である。彼のフリードリヒ大王が寡兵能く屢、衆敵を破りし所以のものは、統帥の卓越、用兵の妙を得たのは勿論であるが、敵が數箇國の連合軍であり、彼等は各、己の國を中核とし自軍本位の行動をなし犠牲的精神に缺如したことが、大王をして其の戦勝を容易ならしめたこと甚大なものであつたのである。奈翁の如き名將は能く連合軍の弱點を自己の統帥力に依つて或る程度に償ひ得るとしても、其の弱點の素因は潜在して居る。

露軍の編成を見るに、國內に四十有餘萬の大兵を擁する以上、其の大部を第一線に出すべきは當然であるにかゝはらず、土耳其との平和條約締結に暇取り、又所謂國民性の鈍重から、萬事手廻しが遅く、戦闘準備が整はず、半數に充たぬ兵力しか出し得ぬ羽目に陥つたことは、彼の傳統的不敏活の致す所である。

佛軍の作戰方針 奈翁は三月戦闘序列下令以後、逐次其軍を露國西境に進め、六月中旬には概ね左の位置に在らしめた(第二十六圖參照)。

イ、主力約三十二萬は Königsberg から東方及東南方に互り Gumbinnen 及 Goldap を連ぬる地域

ロ、Fügen の指揮する第四、第六軍團を基幹とする軍(八萬)は Rastenberg 附近

ハ、Jerome の指揮する第五、第七、第八軍團を基幹とする軍(八萬)は Warschau 附近

ニ、Macdonald の指揮する第十軍團を基幹とする軍(三萬二千)は最北翼として Tilsit 附近

ホ、奥國軍團を基幹とする Schwarzenberg の指揮する三萬四千は最南翼 Lublin 附近

以上の配備によつて奈翁は露軍の右翼即ち北翼を包圍して之を南方に壓迫せんとする方針を採つた。従つて其の左翼兵團即ち主力兵團を前出せしめ右翼を稍、後退せしめたのは、敵に此の方針を判断せしめ得ざらしめたものとも謂ひ得る。然るに奈翁は露軍の配備を原則的見地より至當に判断し、露兩軍の中間 Gochin 附近(Platow の哥薩兵あるのみ)に有力なる兵團ありと思つた。然し其後に至り露軍の離隔せる配置を看破するや、其の兩兵團の分離に乗じ兩兵團の中間を突破し之を分離撃滅せんとするに決した。

露軍の作戰方針 露軍は六月中旬に於て概ね左の配置に在つた。即ち

イ、第一西軍は Wilna を中心として廣地域に集合

ロ、第二西軍は Wolkowysk を中心として集合

ハ、Platow の指揮する哥薩克兵一萬は兩軍の中間 Grodno 附近に位置す

ニ、第三豫備軍は濕地帯の南方に隔絶して Lusk 附近にて編成中に在る

露軍は右の配置に在つて兵力寡弱なるが故に、當初は決戦を避け、敵を國內に牽き入れ兵力の均衡を待ちて決戦を行ふ方針であつた。其の幕僚の計畫に依れば、主力たる第一西軍は先づ Dniepr 河の中流に於ける設堡陣地線に後退し、此處に増援兵團を集合せしめ、十分の軍需品を集積して敵を待ち、敵が第二西軍の寡勢なるに乘じ追撃し來るに際し敵の側面或は更に後方に對して攻勢に轉ぜしめんとするに在つた。此の際第三豫備軍は塙軍に對し該方面の掩護に任せしむるものとした。

小評論 佛軍の作戰方針及其の配置(戰略開進)に就て概観するに、其の開進状態から判斷すれば果して奈翁が露軍の右翼方面に向ふものとのみ斷ずるを得ぬ。或は右翼を以て Warschau

方面から Grodno 方面に向ふか、若くは更に南方 Lublin 方面から、濕地帯の北縁に沿うて

進むかを的確に窺知するを得ぬ。故に露軍としては勢ひ其の兵力を分散するに至り易い。特に守勢の場合に於て然りである。

而して奈翁が、最初敵の右翼に重點を指向すべく方針を定めたことは、勿論適當であらう。

然るに露軍が南北隔絶して其の中間地域即ち Grodno 方面が殆んど配兵なく、僅かに哥薩克兵を以て之に充てたるに過ぎざることを知るや、奈翁は敵が僅少劣勢なる兵力(十五萬)を以て極めて廣正面に分離しあるに乘じ最初の方針を變更して露の兩兵團間に主力を以て突入することに決した。蓋し奈翁は敵の分散状態に在る弱點を突くことが北方に迂回して敵の右翼を包圍するの利益に比し大なるを察知したからである。其の大軍を自由自在に運用することは彼の得意とする所であり、若し庸將が強ひて之を敢行せんとしたならば敵が著しく劣等無能のものでない限り却て不測の災禍に罹るの因となる虞がある。然し吾人は斯くの如き兵力の轉用、決心處置の急速なる變更が圓滑に實施され得る如く平素の訓練に精進し、有事の際に當つて之が可能の自信を得て置くことが大切である。

露軍の作戰方針及其の戰略開進に就ては、奈翁の進入に對し先づ守勢作戰を採ることは至當であるとしても、其の集中、開進等の準備が既に手後れであることを認めねばならぬ。露軍

が其の國民性より由來する鈍重を脱却し得ざることは、茲にも其の例に洩れざる實跡をのこして居る。

従つて此の場合、天然の障礙例へば先づ Niemen 河の渡過を妨害するとか、次で Bresina 河若くは Dina 河の利用等によりて時間の餘裕を得、兵力の優勢を期して反撃に出づべきである。之が爲めには其の廣大なる領域と給養に不便なる寒村僻地てふ武器を極力利用し以て佛軍の戦力を消耗せしむることは、特に努力すべき要件である。

露軍は、最初特に劣勢であるから、敵の眞面目なる攻撃前進に際しては決戦を避くべきは勿論であり、従つて持久防禦的配備を以て而かも敵に捕捉せられざる様に注意し後方の整理に力を用ゆべきである。實際の配置を見るに、第一、第二軍が過度に隔離し Grodno の如き中央の要點に僅かに哥薩克兵のみを配置せるは餘りに寡弱である。故に尙ほ有力なる部隊を配置し敵の一小部隊の爲突破せらるゝ如きことなき様にするを可とする。若し容易に突破せらるゝときは、兩兵團は分斷せられ爾後の連繫協同に甚だしく危険不安を生ずる虞があるからである。

作戰地の兵要地誌概説

一般に寒村僻地なることは周知の事であるが、此の物資少く人口稀薄なることが直ちに大軍の給養に甚だしき不便を生じ軍の運用に困難を來たすことは、進入軍に最も不利なる重大事項であらねばならぬ。現に給養の不便の爲め奈翁軍中斃れたるもの甚だ多かりしことに徴しても、思ひ半ばに過ぐるものがある。

此の戦役に於て給養上の準備は奈翁の指示の下に主として普國が擔任したのである。其の兵站基地は最初露普國境附近に設置し作戰の進捗に伴ひ、Kowno, Wilna, Minsk より Smolensk に逐次に推進したのは當然であるが、之が實行には從來の経験もなく非常に困難をなし而かも甚だしく不十分であつた。

道路網 の主なるものを擧ぐれば

- 一 東普の Königsberg より Riga を經つ Petersburg 道
- 二 Kowno —— Petersburg 道
- 三 Wilna —— Petersburg 道
- 四 Kowno —— Wilna —— Witebusk —— Smolensk —— Moskau 道
- 五 Warschau —— Grodno —— Minsk —— Moskau 道

六 Brest — Litowsk — Bobruisk — Moskau 道

河川の著名なるものは西方より

Weichsel 河

Niemen 河

Ljina 河

Dnjepr 河

等で、其潮流にも有名な河もあるが、必要に應じ示すことにする。

比較的著名なる都市は

Wilna 二萬

Kowno

Riga

Smolensk 二萬

Witebsk 二萬

Mohilew 一萬

Bobruisk

Warschau

Minsk

Luzk

Lublin

Moskau

Wjasma 一萬

地形 は一般に平坦で甚だしき起伏なきを通常とする。而して中部地方即ち Dina 河の西方地區は、森林湖沼地帯で、軍の運動は不便である。又圖示の如く南方は一帶に濕地を成形し大軍の運動には不適當であり、又此の濕地によつて南北の運動可能地方を分斷し、従つて南北の連絡は困難である。

氣候 は寒氣相當に強く、Moskau では平均十月零下〇・二度、十一月零下三・九度、而して十一月中でも零下十七度位に降ることも稀でない。十二月に入ると零下二十八度位になることも珍らしくない。

作戰經過の大略

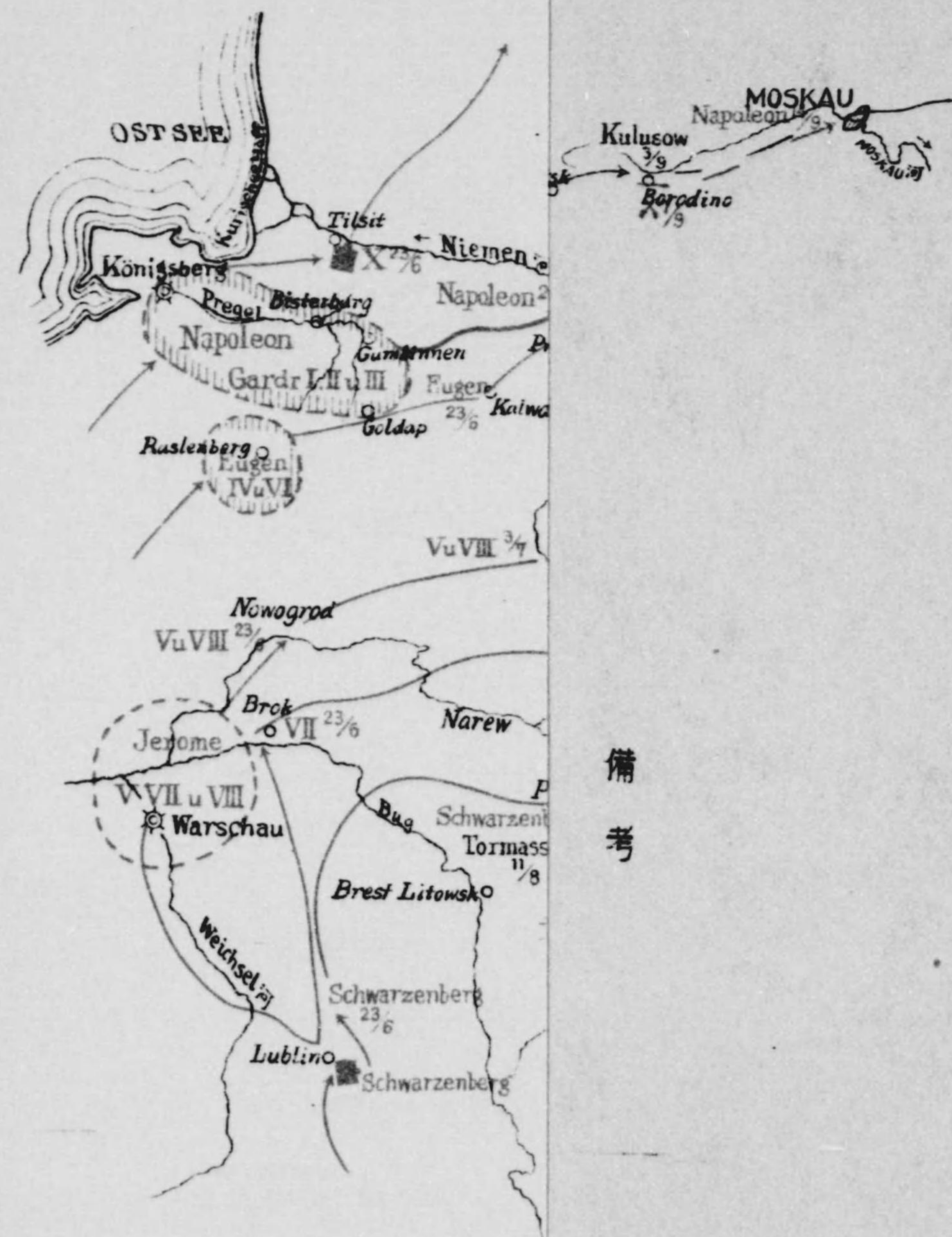
Wilna に至る作戰(第二十六圖又は第二十七圖参照)

奈翁軍は六月後半期頃から夫れ／＼前進を始めた。奈翁は Niemen 河渡過の爲、自から工兵將官のみを従へて Kovno 附近に進んで詳細なる偵察を爲した結果、其の東南方近距離の地點を主力軍の渡河點に選び、六月二十三日夜暗を利用して三箇の軍橋を架設し、直ちに第一軍團をして之を渡り Kovno を占領せしめ、他の左翼兵團の諸軍團が相次いで同地より東岸に渡り、二十六月を以て二十數萬の主力軍を渡し終つた。最左翼に在る Meckhard 軍團(第十)は Tilsit 附近で渡河し、Eugen 兵團は主力の南方から、六月三十日を以て渡河を終り、Jerome 兵團は非常に遅れて七月二日を以て Grodno 附近に其の兵力の大部を集結した。此の間主力方面では Murat の騎兵團を先頭として Wilna に向つて進軍し、二十八日同地に在りし微弱なる露軍を驅逐して同市を占領し、奈翁も同日 Kovno に達した。

露軍は佛軍との衝突を避け、其の第一軍は二十六日 Wilna を撤し東北方 Swenziany (Wilna 東北方六十軒)に向ひ退却を開始し、第二軍も亦同地に向ひ退却すべき命を受けた。

小評論

第二十六圖



備考